異形屋本舗

小春月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
異形屋本舗

【Ｎコード】
Ｎ１３９０Ｇ

【作者名】
小春月

【あらすじ】
異形を貸す異形屋。ひょんなことから、そこに奉公することになった夏洌。持ち込まれる異形関係の相談事にてんてこ舞いな日々のなか、愉快な仲間？たちと一緒に奉公！しかしなぜか、夏洌は異形に嫌われているらしくて。
異形あり、姫神あり、雷神あり、がんぜない悩みありの不可思議異形あやかしファンタジー……のはず。
本編は完結済みでございます。時間を見つけたら、短編をいくつかあげる予定（は未定にして決定にあらず）にて――。短編は異形た

ちのつぶやきだったり、日常だったり。

次編のため、完結設定にいたします。

序章～稲荷の出来事（前書き）

江戸時代風味です。でも、江戸時代じゃないので　あしからず。

序章〜稲荷の出来事

異形、貸します。
商売繁盛、家内安全、交通安全、恋愛成就。
あなたの願いにぴったりな異形、いかがですか。
女難除きに水難除き。短期的な不運も払いのけ可能な異形います。
お家のお掃除も、おまかせください。

異形、買い取ります。高額買い取り、実施中です。
ご家庭に巣くった異形、お売りください。当店の者がご自宅までうかがい、査定いたします。

春夏冬町　異形屋本舗

追伸　奉公人募集中です。　詳しくは、店員まで

＊＊＊＊＊

穏やかな春の日の午後。満開の桜のなかを吹き抜ける風は、すこし冷たかった。昨日までの陽気はどこへやら。冷たい風には、上衣が恋しくなる。
堀川にほど近い桜稲荷。多くの床店が建ち並ぶなか、彼はほてほてと歩いていた。目の前をふさぐ人の多さに辟易しつつ、目的の社へと歩く。
時折、人の壁をかき分けて、床店の前に顔を出した。鼻をくん、とうごかすと眉根を寄せた。寄り道はするな、ときつく言い渡され

ている。
湯気の立つおでんやら、香ばしい匂いの烏賊焼きの床店をひとしきりからかうと、彼はまた歩き出した。
春の原を切り取ったような萌葱の衣に、背に届きそうな髪は、良家の子弟のように結われている。その中で、角帯と白色の前掛けが一風変わっていた。
彼は手にした巾着を大切そうに抱え、稲荷の社へと急いだ。
「おい、坊」
道を急いでいた彼は、人の波からかけられた声に、反射的に振り向く。声の主を捜していると、ふいに、手のなかの巾着が引っ張られた。
「わっ」
とっさに目を閉じる。それでも巾着を離さないでいると、いきなり突き飛ばされた。すこしよろめき、うしろのひとにぶつかる。
「どわっ！」
彼にぶつかられた人が、驚いたような声を上げた。
「なにすんだっ。飲んじまったじゃないか！」
若い男の声に、彼の巾着を引っ張っていた力が消える。人を突き飛ばすように逃げる背に、彼ははっとした。ひったくりに遭いかけたらしい。
結果的に助けてくれたことになる男が、なにやらむせていた。
「がほっげっほっごっ。・・・ん？」
ぽかんとする彼に気づき、男が首を傾げる。いささか、涙目になっていた。
「どうした？　怪我でもしたか？」
「え？　あ、いえ。べつに。助けてくれて、ありがとうございます」
彼は礼もそこそこに、男から離れるように床店の一郭を後にした。
あの男。一瞬、なにか引っ掛かった。
まばらになった人の波をすり抜け、彼は社の前の白砂を踏む。すこし足を止め、床店の一郭を振り返った。

「にこ殿。お待ちしておりました」
ふいに、手が引かれた。思わず身を固くするが、知己の声だと思い出し、振り返る。人の良い顔の禰宜が立っていた。
「遅れてしまった？」
「いえ。お約束まで、まだ四半時もありますよ。あいかわらずに、お仕事熱心ですね。社務所にご足労願えますか？　件の物がそこに」
「もちろん」
彼は頷くと、禰宜に導かれて社務所に向かう。
最後に一度だけ、賑やかな一郭を振り返ってから。

第一章〜異形屋

夏洌（かれつ）がその少年に出会ったのは、桜の盛りも過ぎた頃だった。

どことなくぽやっとして、裕福な家の子供と分かるのに、着ているものは奉公の丁稚のお仕着せを思い起こさせた。角帯に木綿の前掛けが奉公丁稚の雰囲気になっているのかもしれない。

手にした巾着を握りしめていない所を見ると、そうしっかりした気性じゃないのかもしれなかった。

現に。

その少年の手の巾着に狙いを定めた破落戸が、何人もいる。

揃いも揃って目つきは悪く、あきらかに悪いことをしそうだ。

なのに。

「なんで気づかないんだ…？」

破落戸が三人ばかし、木の陰から少年を見定めているのに。このままでは、あの巾着はまちがいなく掏られる。

「あ、でも。ひったくりか？」

破落戸が、獲物を巡って小競り合いを始めた。夏洌はすこし立ち止まって、思案する。

もし、ここで夏洌が声をかけなかったら、確実に少年の巾着は破落戸の手中に落ちる。しかし、ここは春夏冬町（あきないまち）だ。侠気あふれる町人もたくさんいるし、男を尻に敷く（お強い）奥さんたちも多い。

だが。

「ここで見捨てたら名折れだな」

夏洌は苦笑して、少年に歩み寄ろうと決めた。

そのとき。破落戸の小競り合いが終着したらしい。あきらかに人相の悪い男が夏洌よりもさきに、少年に歩み寄っていく。

「おい坊主。こんなとこでぽけっとしてたら、お店の手代に叱られる、ぞっ」

出来る限りにっこり笑っていた男（破落戸さん）が、叫びざま少年の巾着をひったくった。
「…ふぇ？　ふぇぇぇぇぇぇっ？」
ぽかんとした少年も、さすがに状況を把握したようだ。子供なりに破落戸を追いかけようとする。子供の悲鳴に近くにいた町人たちが走り出す。
「か、返してくださいっ。それをなくしたら、番頭に叱られますっ」
やはり、どこかのお店の奉公人だったらしい。番頭はやはり怖いようだ。それでも泣かずに破落戸を追いかける。
けなげな少年を見て、夏洌やその他の侠気あふれる町人たちは、期せずして心中で怒鳴った。
泣きながら追いかけるのなら、最初から注意を払えやっ。
「とにかく、八丁堀の旦那に知らせいっ。あ、徳兵衛の旦那！　いいところに」
破落戸の進行方向に同心が歩いていた。ちょっと腹回りが気になる同心徳兵衛は、見回りと称して、昼中の運動を心がけている。今日もそれだろうか。
そんな徳兵衛の旦那が騒動に気づいて、走り出した。が、腹が重くて、お世辞にも機敏な動きとは言い切れない。普段から走り回っている破落戸に、追いつけるわけがない。ずんずんと、破落戸は走り去る。
「おい、兄ちゃんっ。その破落戸の足を止めてくれ！」
このままでは逃げられる。そう思ったのか、町人の一人が叫んだ。
「はっ？　どうやってっ？」
「それは知らん。自分で考えな」
「えぇっ？」
言われて素っ頓狂な声を上げた夏洌の目の端に、頼りになりそうもない同心が映る。
「…まったく！」
夏洌は投げられる物を探して首を巡らせる。とりあえず、自分の

風呂敷から取り出した独楽を破落戸の背に向かって投げつけた。
「どわっ」
破落戸がすっころぶ。見事に顔からこけた破落戸の背に、少年が飛びかかる。被害者の小僧（っぽい子供）だ。
とっくに離脱したかと思っていたが、まだ頑張っていたらしい。
「かえしてくださいっ。ぼくの巾着！」
破落戸の首を絞めにかかった少年を、夏冽と追跡町人たちが引きはがす。徳兵衛が駆けつけてきて、破落戸におつきの岡っ引きが縄をかけた。
「えぇい、引き際の悪いっ。いい加減に巾着を坊主に返しな」
しかし岡っ引きに破落戸は従わず、巾着を往生際悪く握りしめている。
「…おいで、こっちに。ね？」
少年の言葉に、破落戸はおとなしく巾着を離し、少年に手渡した。とろりとした目つきになった破落戸に、少年はなにかを払う仕草をする。
「な、なんだっ。は？　へ？　どうなって…。ぎゃっ。なんであっしがお縄に？」
「破落戸さん、人の物を勝手にもってかないほうが、長生きできますよ。皆さん、ごめんなさい」
ぺこりと頭を下げた少年の頭を、同心はかい繰り回した。
「おっちゃんたちに、礼を言いな。そこの兄ちゃんにもな。それと、ちゃんと注意してなかった坊主もだめだぞ」
「はい。ありがとうございました。お兄さんもありがとう」
巾着を抱えてお辞儀をした少年に、気の良い町人たちは破顔した。月代にかいた汗もきらきらと、少年の肩を叩く。
「おう、良い子だ。帰りは危ないから、この兄ちゃんに送ってもらいな」
町人の提案に、「この兄ちゃん」こと夏冽は驚いた。独楽を拾い上げ、文句を言うため、気のよさそうなどこかの奉公人に顔を向け

る。
「なに言ってるんですか？　俺はまだこの町に明るくありませんよ」
「あれ？　そういえば、見ない顔だな。お上りさんか？　だとしたら、いい男だなぁ。町の者じゃあないのに、坊主を助けるなんて」
町では見ない顔だと、いま気がついた商人は眉尻をさげた。そうすると、すこし険の厳しい顔も愛嬌が出てくる。
「兄ちゃんじゃなくて、夏洌です。今日、都に入ったんです。柳葉宿に住んでました。だから…」
夏洌が少年のお供を断ろうとしたとき。
「あのっ」
巾着を抱えた少年が声を上げた。自分を見上げてくる瞳を見て、夏洌は息を詰める。心とは別のなにかが、少年に抱きつかんと…。思わず、それを実行しようとした夏洌に、少年が言う。
「かれつさんっ。奉公先はきまってますか！？」
「え？　まだだけど…。でも、すぐに見つけるよ。だから、だいじょ」
夏洌は動揺を見事に隠して、少年に笑顔を向ける。少年はうれしそうに笑って、夏洌の腕を掴んだ。
刹那。冷たい感覚が夏洌の背を駆け下った。
「ぼくのお店にきてください」
「は？」
少年はにこっりと愛らしい笑みを浮かべて、夏洌の腕を引いて歩き出す。引っ張られるように歩き出す夏洌を、町人数名が楽しみを含んだ目で見つめた。
「ありゃりゃ。お上りさんに、悪いことしちまったなぁ」
のほほんと言う男たちの背に、あんたぁっ！と声が飛来する。あわてた風の男たちは、それぞれの店へと戻っていった。
「三丁目にありますから」
巾着を抱えて夏洌の先を歩く少年は、にこと名乗った。聞き慣れ

ない音に夏洌は首を傾げる。その気配を感じ取ったのか、少年は振り返り頷く。
「仁に琥珀の琥です。かれつさんは？」
「ん。夏に洌（きよい）、だ。なぁ、ほんとにいいのか？　かってに俺を雇うなんて言って」
本気で悩む風情の夏洌に、仁琥は笑って頷いた。よく笑う子供だ、と夏洌は思う。
「お店は異形屋って言うんです。この春夏冬町の三丁目にあります」
この春夏冬町は、一丁目から三丁目までである。賑わいのある一丁目や呉服屋などの大店が集まる二丁目とは違い、だいぶ寂れているようだった。
しかし、と夏洌は思う。
夏洌の里・柳葉宿は、この日出（ひいで）という国でもだいぶ奥まったところにあった。宿とは名ばかりの、小さな村だ。都の旅人の風にふれることのない里では、異形とは名にすることも忌む存在だった。
都では、異形も商売に使うのか！　と夏洌は驚く。同時に、どんな店なのだろうと、興味もわいてくる。
「でも、ちっちゃいですよ？　夏洌さん、ぜったいびっくりしちゃうんだから！」
にこにこ笑ったままの仁琥の言葉通り、夏洌はびっくりするのだった。

第一章〜異形屋2

異形屋、というらしい。
仁琥の奉公しているという店は、春夏冬町三丁目でも、だいぶ奥まった所にあった。
一丁目の大店の半分ほどの大きさで、寂れた三丁目の店にしては、大きかった。十五畳ほどの店先の半分は貸本屋のような、もう半分は薬問屋のような風体をしている。
全体が古びていて、築百年です、と言われても納得できる店構えだ。ぎょろりと、鬼瓦の目玉が動いた気がする。
夏洌は一歩後退りながらも、仁琥に訊いた。
「ここ、は…？」
「ぼくのお店です」
「は？　仁琥は、ここの坊ちゃん…若だんなかい？」
「違いますよ。この異形屋の主人がぼくなんです」
仁琥はにっこり笑った。店内にいた三人の奉公人は、仁琥の姿を認めて、板間まで近づき、仁琥が草履を脱ぐのを手伝う。ぽけっと突っ立ている夏洌にも、足をぬぐうための水桶が用意され、板間に上がるよう促された。
「夏洌さん、っていうんだよ。ひったくりから、巾着を取り返してくれたんだ」
「ひったくり！？　一丁目のあたりですか？　お怪我はありませんかっ？」
店先にいた強面の男が、仁琥を持ち上げんばかりに心配する。
「大丈夫。はい、これ」
仁琥は巾着を番頭とおぼしき男に手渡した。手代のような風情の若い男も心配そうに、ちいさな主人の顔をのぞき込む。
「ほんとうにお怪我は、ありませんか？」
「ないよ。しつこいと嫌われるよ、鈴夜」

「なら、良いのですが…。ほら見ろ、正吉。若に送り犬を憑けるべきだったろう？」
鈴夜を呼ばれた男は、夏洌のそばにいた小僧に、顔を向けた。小僧は顔を背けて対戦体勢だ。
「坊ちゃんがいらない、って仰ったじゃないですか」
「正吉っ。だからと言って、憑けなくて良いって訳じゃ…」
手代と小僧の言い合いを聞いていた夏洌は、耳慣れない言葉に首を傾げて、仁琥を見た。
「オクリイヌ？」
「送り狼のことです。正吉はうちの小僧で、鈴夜は手代。あっちの多喜次は、番頭さん。異形屋の舵取りなんですよ」
多喜次と呼ばれた男は、夏洌の視線に気づき、頭を下げる。にらみ合っていた巾着から目を離し、仁琥に近づくとその頭をかい繰り回した。強面だが、やさしく笑っているつもりだろう。
「仁琥さま、あれほど送り犬を憑けてくださいと言ったでしょう？」
にんまり笑ったその顔が、闇に住まう獣を思い出させるような気がして、夏洌は思わず身震う。
「すみませんでした、本当に。あの、ところで、異形屋ってのは…？」
「あぁ。この店は、異形を貸してるんです」
ああ、やっぱり。異形も商売に使うのか…。里が懐かしいなぁ。
遠い目をする夏洌に、多喜次は異形屋の説明を続けてくれる。
「異形関係の薬種や、異形本っていう本。あ、もちろんふつうの薬種も扱ってますよ。まぁ、それ以外にもいろいろやってますけども。それから、異形の討伐もやってます。なにか異形でお困りのことは？」
多喜次は巾着を鈴夜という秀麗な手代に渡して、夏洌の風呂敷を見た。ちいさな唐草模様の風呂敷を抱え、夏洌は首を盛大に振る。
「ありませんっ。異形とは縁のない暮らしですからっ」
「さようで。……それより、仁琥さまを送っていただき、ありがと

うございました。夏洌さん」
強面の多喜次に頭を下げられ、夏洌はいささかおどつく。一瞬、多喜次の口許に鋭い犬歯が見えた気がして、夏洌は飛び上がった。この男には、近づかないほうがいい。か弱き者の本能が訴えてきた。
だらだらと冷や汗を流し始めた夏洌に、仁琥は首をひねった。
「夏洌さん？」
「あああ、ありがとうございますっ。で、ではでは、俺はこれでっ」
本能に従い、回れ右をして異形屋を飛びだそうとする夏洌を、仁琥の腕が引き留める。仁琥は、夏洌の腕を捕らえたまま、番頭多喜次の方を見た。
「夏洌さん、ちょっと待ってくださいっ。ねぇ多喜次！夏洌さんをうちで雇って良いでしょう？」
「ににに、仁琥っ。いい、いいからっ。ひぃ」
店の支配者とも言える番頭さんにぎろりと睨まれ、夏洌はひいっとすくむ。多喜次はどすの効いた低声を押し出した。
「ここで、ですか？」
「うん、もちろん。良いよね？　多喜次、ぼくはもう決めてあるからね！」
店の坊ちゃんらしく言い放ち、仁琥は番頭を説得しようとし始めた。多喜次の眉間にしわが寄り、明らかに不機嫌度が増している。夏洌は居場所のない思いで、仁琥の腕を放そうと努力した。
「に、仁琥。あのー、ほら、もういいよ。大丈夫だから。えぇっとぉ、俺みたいな素人を雇ったら、番頭さんにも迷惑かかるし…」
「わかりました。いいでしょう。仁琥さまのお願いは、聞ける限り聞きたい。しかし、夏洌さんの希望も聞かずに…」
「あ、そっか…。夏洌さん、迷惑かなぁ」
しゅんと、してうなだれる仁琥は、子狐を思い起こさせる。思わずかわいいと思った夏洌は、この先、ことあるごとに後悔する言葉を言いはなった。

「そんなことないよ。俺、いま就活中だし。上がってきたばっかで、都のことはよくわからないから、不安だったし。な、だからそんなに落ち込むなよ、仁琥」
「ほんとですかっ！」
（あー、なに言っちゃってんだろ…。多喜次さんの顔が、恐ろしい……）
多喜次の強面が、夏洌を見つめた。ものすごく威圧感がある。
「では、契約書を持ってきます。…鈴夜」
「多喜次さん、本当に雇うんですか？　こんなどこの馬の骨とも分からない輩…いえ、はっきり言って、馬の骨ですっ。いえ、馬の骨ですらない！　苑園（こうえん）の隅っこにある、雑草の様な男ですっ。わたしは反対です！」
秀麗な手代は、夏洌を気に入らないらしい。本人を前にして、よくこれだけ言える。
夏洌がぎこちなく笑いかけると、鈴夜はあからさまに顔をしかめた。
しかし、番頭の権威は店の中では、主人よりも上の場合が多い。仁琥のような幼い主なら、なおさらか。
多喜次の一にらみで鈴夜は押し黙り、不満ありありな顔で奥から一枚の紙を持ってきた。
「契約書です」
一言添えて差し出された紙に目を通した夏洌は、仁琥を見る。夏洌と目が合うと、にっこり笑う仁琥に、夏洌もぎこちなく笑い返した。
夏洌が名前を書いた紙を手にした多喜次は、やおら立ち上がった。
正吉、と小僧を呼ぶ。
「では夏洌、と呼ばせていただく。…うちでは小僧名は使わないので。正吉、夏洌を裏屋へ案内しなさい。仁琥さま」
多喜次はそれだけ言うと仁琥の腕を取り、奥へと消えた。
正吉はにっこり笑うと、番頭と仁琥が消えた方とは違う障子を指

す。夏洌が抱える荷物を受け取ろうと、手を伸ばした。
「あ、大丈夫…です。正吉さん、俺…いや、私は」
「無理しないことが一番ですよ、夏洌さん。こっちへどうぞ。わたしの呼び方は、なんでもいいので」
正吉は明るく笑い、夏洌を手招いた。紙を貼って補修してある障子を開けると、意外に広い庭だった。

第一章〜異形屋3

正吉に案内されて入った裏庭は、ずいぶん広かった。
大店でもないのに、なぜここまで広いのか。夏洌の顔から考えを読んだのか、正吉はくすりと笑う。
「大旦那様……仁琥様のおじいさまが、春夏冬町が整備されている最中に、安く買いたいたいたようですよ」
「へー。じゃあ、けっこう古い店なんだな。ここは」
はい、と正吉は頷き、長屋の風情を持つ平建ての屋へと導いた。奉公人二名が住んでいるという裏屋は、はっきり言ってぼろい。いかにも素人修繕な跡が見て取れ、陽の当たらない板には、うっすらと緑の苔が生えている。
「まぁ、ぼろいですけども、崩れたりはしませんから。だから、安心してください」
「崩れ…。お化けが出たりとかは…」
やや青ざめる夏洌に、正吉は苦笑した。しかし、なにも言わずに裏屋の戸を引く。ぎぢっと、いかにも古い音をたてて開いた戸の向こうは。
「あ、案外きれい？」
「ふふ。仁琥様の言いつけでしょうね」
正吉の肩越しに裏屋の中を見た夏洌は、一言目にそう言った。正吉の言葉に、小さな風呂敷を抱え夏洌は首を傾げる。そして。
「ひゃっ」
首筋に冷たいものが滑り落ちた。夏洌は小さく悲鳴を上げて飛び退る。少し離れたところで見ていた正吉に、助けを求めようと踵を返した瞬間。
「あいでっ」
こてん、となにかが頭を直撃する。しかも、なんども。小さい痛みながら、けっこうつきつきする。

「あでででっ」
絶え間ない攻撃に（情けないながらも）逃げ回る夏洌を見て、正吉は嘆息した。あきれられたか、と夏洌は正吉の顔を窺い見る。その顔に浮かんでいたのは、呆れだった。たしかに。でも、その表情は夏洌に向けられたものではない。
「やめないか、家鳴（やなり）。この人は夏洌さん。今度からお店（おたな）に奉公に来るんだよ。奉公人に手を出したら、多喜次さんに言いつけますからね」
すると。ぴたりと攻撃は止んだ。
裏屋のあちこちから、小さな童子が姿を現す。
「あれ？　……家鳴？」
風呂敷で頭を保護していた夏洌は、きょとんと正吉を見た。
「そう、家鳴。悪戯好きなんですよ。でも、奉公人には手は出さないから」
「あ、ひょっとして、掃除をしてくれたのは家鳴？」
たぶんそうでしょうね、と正吉は頷きながら、転がってくる童子を抱き上げた。案外、小さい。一尺ぐらいか。
「こやつ、やな奴だ！」
「こやつ、やなのだ！」
「こやつ、きらいだ！」
童子たちは口々に言いつのりながら、正吉に抱きつこうと小さな手を伸ばした。夏洌が手を伸ばしても、つっけんどんに払われた。挙げ句、小さな牙を剥かれる。
かまれたら、痛いだろうなぁ。
苦笑しながら考える夏洌に、正吉は首をひねりながら呟く。
「塩とか、持ってますか？」
「塩？　持ってないよ。食事とかは、店でしてたし」
「そうですか。では、失礼」
ぎゃんぎゃん吼える童子を降ろし、正吉は夏洌の荷物をとった。あわてて手を伸ばした夏洌だが、正吉はするりと身体を捻ると裏屋

の中に入る。夏洌の腕は、哀しくも宙をかいたままだ。
夏洌も、反射神経には自信がある。というか、反射神経にしか自信はない。畑の作物を盗んだ狸も狐も、捕まえるほどだ。
だが、正吉は夏洌の腕から逃げた。
「むぅ」
旅の途中に、腕が鈍ったか？　夏洌は自問するが、答えは浮かんでこない。旅の途中でも、賊は捕まえられてたし……。夏洌は表でしばらく首を捻っていたが、正吉が風呂敷をほどいたのを見て、裏屋に飛び込んだ。
「しょ、正吉さん！」
「ほんとですねぇ。家鳴に嫌われるものは、ないんですけども……。なんです、これ？」
夏洌の全財産とも言える風呂敷の中身をあさりまくる正吉は、大きめの独楽を手に取った。土間で様子を窺う童子たちも、これには興味を示したようだ。
ぎょろっとした目で見合わせ、人間二人のまわりをかこむ。
「それ、なんだ？」
「おもしろいか、それ」
「それ、なに？」
怖々近づいてくるのが、丸わかりだ。夏洌は微笑みを童子たちに向けると、正吉の手から独楽を取り上げた。
「旅の途中、これで稼いでてねぇ。案外、上手いんだよ」
そう言うと夏洌は、懐に手を差し入れる。何対もの童子の目が己に集まっているのを認識しつつ、ゆっくりと手を引き抜く。握っていたのは、赤紐だ。
「独楽、っていうんだ。こうする」
独楽に赤紐を巻き付けていた夏洌は、いきなり独楽を童子たちとは反対の方に放った。勢いをつけて回り始めた独楽に、好奇心旺盛っぽい童子たちは、独楽にかぶりつく。
「これ、独楽ー！」

「独楽独楽ー！」
「回る独楽ーっ」
童子たちの機嫌が少しは浮上したようだ。夏冽の意図を解した正吉は、気を逃さず訊いてみる。
「家鳴らや。なんで夏冽さんが嫌いなんですか？」
正吉の問いに、独楽に気をとられていた童子たちは押し黙った。顔を見合わせ、困ったように正吉の腕を引く。黒髪の間から、小さなつのが覗く。
勢いよく回っていた独楽が、こてん、と倒れる頃。

「こやつ、怖いの連れてくる」
「こやつ、もっと巨きなの連れてくる」
「こやつ、恐ろしいものに憑かれてる」

童子たちは正吉の袖を強く引いた。黒目の割合の高い目をくりくり回し、夏冽の袖を引く強者もいる。
「やっこ、怖くないか？」
夏冽の袖を引いていた童子がぽそりと呟く。すると、正吉に群れていた家鳴たちも騒ぎ始めた。
「やっこ、やっこ！」
「もっと怖いの！」
「来たら、やなの！」
童子たちが騒ぐと、裏屋の天井が軋む。心の臓に嫌な音を立てて軋む。軋むだけで崩れはしないだろう、と夏冽が思ったとき。
正吉が焦ったように家鳴を止めにかかった。
「あわわわっ！　家鳴、落ち着いてっ。崩れるよっ」
「え？　…ぼろいけど、崩れないって…」
「崩れないのが不思議だけど、ほんとに崩れないから！　でも、家鳴があんまりにも軋ませると……」
正吉は天井を見上げた。

所々、雨だれの染みがある天井から、軋みとともに埃が落ちてくる。その埃と一緒に。
「ぎゃっ！　鈴夜さん呼んで、修理しなきゃ……」
ことん、と。
落ちてきた。なにか、木の破片。
「って！　正吉さんっ。崩れないんじゃありませんでしたっ？」
あわてる夏洌に、正吉は冷静に笑った。裏屋の隅に置かれた工具箱を持ち出してきて、夏洌の前に置く。
「夏洌さん。修理、得意ですか？」
それはつまり。
「俺が、修理するんですか……？」

春夏冬町、というよりも江都全体で大工の数は多い。
冬は乾燥しやすく、火事が多発するためだ。しかも、木造の屋がほとんどだから、勢いよく燃え上がる。鎮火したと思ったら、すぐにも工事を始めるから、大工の需要も多い。火事が多けりゃ、大工も多い。そんな格言？もあるほどに。
あまりにも大工人口が多いため、仕事の取り合いになるらしい。
だからか、大工はどんな仕事でも引き受ける。
たとえば、とあるお店（おたな）の裏屋の修理なんて、悦んで引き受けてくれるはずだ。
夏洌は慣れない金槌で作った傷を仁琥に手当てしてもらいながら、ふと思った。そして、その思いつきを言ってみたのだ。
目の前にいる、九つぐらいの旦那さまに。
「大工さんに頼むんですか？　裏屋の修理を、ですか？」

「そう。そのほうが、きちんと修繕してくれるような気が……」
「高いんですよ。大工さんに頼むのって」
仁琥はあっさり言う。横にいた多喜次がほんのり笑みを浮かべるのを見て、夏洌は眉を寄せた。
「まぁ、なりたい職業毎年一位なだけあるしなぁ。でも、いつか崩れると思わない？　それに、仁琥が住んでる離れだって…」
夏洌の発言のなにが気に入らなかったのか、多喜次は強面をむりやり笑いの形にしてみせた。とんでもなく恐い。ひょっとしたら、多喜次にはそれが分かっているのかもしれない。
「仁琥さま、と呼びなさい。仮にも旦那さまですよ」
多喜次の言葉に、今度は仁琥が渋面を作って見せた。しかめっつらで番頭に向き直る。
「ぼくは、仁琥って呼んでもらいたいの。正吉にも鈴夜にも。多喜次だって、多喜次って呼ばれなくて番頭さんって呼ばれたら、いやでしょう？」
首を傾げる仁琥に、多喜次は参ったように顔をしかめた。言い返す言葉を選び、口を開く。
「あたしは、番頭と呼ばれても構いやせん。むしろ、そう呼ばれた方が身が引き締まります」
多喜次の返答に眉を寄せた仁琥は、いかめしい顔つきで番頭を見る。
「…多喜次。さっき、ぼくのこと“仮にも旦那さま”って言ったね。ぼくは“仮の旦那さま”なんだねぇ」
あ、と多喜次は己の口を押さえた。どうやら、仁琥はこれでも怒っているらしい。にっこり笑って、多喜次に詰め寄る。
「ぼくは仮の旦那さまじゃなくて、本当の旦那さま。春夏冬街商業組合にもそうやって報告してあるものね。また、噂になっちゃうよ？　多喜次さんはお店を乗っ取ろうとしてる、って」
手強い。というより、仁琥の隙だらけの論に翻弄されている多喜次が弱い。困ったように顔を歪ませると、盛大に息をついた。

「わかりました。夏洌の仁琥さまへの呼称には目を瞑りましょう」
嫌々言っているのが丸わかりだが、仁琥は今度こそ満面の笑みを浮かべた。
「なら、正吉も鈴夜もいいね」
嬉しそうな仁琥に、多喜次は困ったように目を泳がせる。あ、と夏洌は彼の困惑の理由を悟った。

正吉も鈴夜も、異形屋に奉公に来てから日が経っている。慣れた呼称を変えることは、案外難しい。それが目上の人間ならなおさら。仁琥は、それを分かっていない。
「仁琥さま。正吉も鈴夜も……」
「なに？」
仁琥の期待に溢れた表情に、多喜次は夏洌を見た。黒の弱い目が、明らかに救援を求めている。番頭から救援を求められて、夏洌は苦笑した。
「仁琥」
とりあえず、仁琥を呼ぶ。救急箱を棚に戻していた仁琥は、きらきらと目を輝かせながら振り向いた。
「なんですか？　夏洌さん」
「正吉さんも鈴夜さんも、仁琥を若って呼ぶほうが良いと思ってる。というか、そのほうが慣れてるんじゃないかな？　だからきっと、仁琥って呼べて言われたら、困ってしまうよ」
「でも、正吉も鈴夜も大事なひとなんですよ。だから、名前で呼んでほしいんです」
「その大事な人に、無理をさせたいか？」
「それは…」
いやです、と呟いた仁琥の頭を、夏洌はかいぐり回した。しゅんとする仁琥が不憫に思えたのか、多喜次があわてて言いつくろった。
「ではっ！　では、こうしましょう。仁琥さまが正吉と鈴夜に名前を呼んで欲しい、とご自分で言ってみましょう。それで、二人が良

いと言ったら、それで良い。もしも、悩んでいるようなら、少し待ちましょう。大丈夫です。二人とも、仁琥さまを大事に思っている」
「ほんと？」
「もちろんですとも！　仁琥さま」
仁琥はわずかに顔を上げた。己の頭に手を置く夏洌を見て、夏洌が頷いたのを確認してから、やおら走り出した。たぶん、行く先は二人の奉公人のもと。
ほっとした風情の多喜次が、同じくほっとする夏洌に頭を下げた。いきなり、だ。
いきなり番頭に頭を下げられ、夏洌はびくぅと身をすくめる。そんな夏洌はきっぱり見事に無視して、多喜次は立ち上がった。
「とにかく、大工を呼ぶことは出来ない。ここには、いろいろと障りがある」
意味深な言葉を残して、仁琥さま大好き番頭は店表に姿を消した。

第一章～異形屋３（後書き）

さて、ますます江戸風味が強まってきましたけども。
江戸時代ではありません。あしからず

第二章～異形のお仕事（前書き）

江戸風味の異世界ファンタジーです。

第二章〜異形のお仕事

異形屋の日々は、ずいぶん単調なものだった。

朝は明け六前に起きて、店内を申し訳程度に整え、店表の掃き掃除が済んだ頃に起きだしてくる仁琥を迎えて（珍しいことに）一つの大盤机で朝食をとる。

木戸が開く頃に店を開け、ひたすら店番。お客が来なくても、店番。内職しながら、店番。ときおり、鈴夜や多喜次が店を空けるときもあるが、番頭や手代がいなくても困ったことは一度もない。

奉公に来てから一月ほど経つが、その間店に来た客は数えるほど。これで、年末の支払いが出来ているのかと訊くと、ツケは使えないと返ってきた。

つまり、つぶれないのが不思議なくらいらしい。

異形の異の字に触れることすらなかった人生が、思いっきり狂ったのも店番をしているときだった。

例のごとく、番頭と手代のいない店の番をしているときのことだ。お客も来ないので、日中は意外にのんびり出来るかと思えば、ひたすら内職に励んでいるのが常である。

「異形屋、っていうんだから……。こう、なんて言うのかなぁ。異形がごろごろしてるのかな、って思ってたよ」

夏洌がぼそりと言うと、横で傘紙を貼っていた正吉が苦笑して頷く。

「たしかに。わたしも奉公に来たときは、そう思いました」

童子にしか見えない小鬼はいますがね。

正吉の言葉に、夏洌も頷く。日当たりの良い棚の上でぐーすかぴ

ーと寝入っている童子たちを見て、何とも言えない笑みを浮かべた。
闇の中に息づく存在たちが、堂々と真っ昼間からひなたぼっこしている。
「異形なのにねぇ」
「異形が夜しかでてこないっていうのは、勘違いですよ。夏洌さん」
ぱたぱたと、店の奥から仁琥が走ってきた。胸に抱え込んだ本で、多少ふらつく。その様子を見かねて、夏洌は手を差し出した。仁琥はわずかにびっくりした後、ほんわか笑んで本を差し出す。
「これ、夏洌さんに読んでもらおうと思って」
びき、と。夏洌は手を伸ばしたまま固まった。
昔から、本を読むのだけは大層苦手なのだ。ちまちま文字を拾っていくことが、めんどくさい。
「多喜次がね、夏洌さんにも異形のことを知っておいて貰わないと困る、って言うの。だからね…、これ読んでください」
どさっどさっと目の前に本が積み上げられていく。傘張りの道具を隅に押しやった正吉が、興味津々の体で本を手に取った。はっきり言って、夏洌より楽しそうだ。
「これが噂の異形本ですか？」
「異形本？　正吉さん。それ、なんです？」
大量の本を前にして、魂魄を彼岸に飛ばしたくなっている夏洌は、引きつった口調で訊く。正吉も困っているので、答えは仁琥が出した。
「異形本は異形の名が詰まっている本です。異形屋は異形を貸してますけども、そのまま貸すわけにはいかないので、紙に異形の名を書いて貸してるんです。うーん…。難しいなぁ」
上手く説明できないらしく、仁琥は首を傾げる。とにかく、これは異形本じゃありません、と本を夏洌に手渡した。
雇い主から渡された本を、ぞんざいに扱うわけにもいかず。
「あはははは…（泣きたい…）」
顔で笑って心で泣いて、夏洌は仕方なしに本を開いた。

案の定、というかあたりまえのこと。本にはびっしり文字が書き込まれている。夏洌は半泣きの顔で文字を拾う。所々、朱墨で線が引かれていて、手垢も付いている。よほど読み込まれた本らしい。
「え…っと。なに、これは……？　く…だきつね？　管狐…か？」
「管、ですね。ちょっと待ってください。たしか、異形本にいますから」
夏洌のつぶやきを耳にして、仁琥が新しい本を取り出す。しばらく紙を捲っていたが、目当ての頁に当たったのか、本を開いたまま夏洌と正吉に見えるように床に置いた。
「ここです。普段は、竹の筒に住んでます。たしか、異形屋にもいますよ」
本をのぞき込む奉公人二人は、小さな旦那さまの言葉に首を傾げた。
異形屋にもいる、ということは。
初めてお目にかかる異形、となるのか！　案外、楽しみかもしれない。

普段と変わらない表情の裏で、実は胸を高鳴らせる大人には気づかず、仁琥は手を二度打った。
「黒、白。おいで」
ぽんぽん、と小さな音が響くと同時に、店の暗がりから二つの影が転がり出てきた。仁琥の手にも収まるほど小さな狐。一方が黒く、一方が白い。
「これが、異形……？」
なんというか、地味だ。

夏洌の率直な感想は、管狐たちの疳に障ったらしい。ぎゃん、と一声あげて夏洌に躍りかかった。
「ぎゃっ。ごめん、ごめん。ほら、異形ってかわら版に出てくるような強面かと…。狐は小さくて、かわいいな」

「たしかに。わたしの実家にある仮名草紙にも、こんなかわいい異形は載ってませんよ。もっと、恐ろしいのばかりです」
夏洌と正吉の感想に、二匹の狐は動きを止める。かわいい、と連呼されるのは異形にとっても心地良いらしい。
本当に、人間くさい。

狐の小さな爪から解放された夏洌は、ため息をつきながら思う。
その瞬間。仁琥の懐から獣のうなり声がして、夏洌はびくっと身をすくめた。
「こら。夏洌さんを脅かしちゃ、だめだよ」
仁琥が柔らかく声をかける。不承不承、といった雰囲気がびしばし伝わってくるなか、正吉は新たに本を手に取っている。読み進めている正吉の頬が引きつった。

「え？　…管狐って、人間も呪い殺せるんですか…っ？」
「はい！　あ、でも。異形屋はそんな依頼は受けないんです。おもに病気のウムを教えてくれます」
なんと、なにげなく恐ろしい異形の獣だ…！　そして、そんなことをあっさり言ってしまえるこの旦那さまは……！
微笑む仁琥と己の、埋めるのに苦労しそうな溝を感じている奉公人二人。
客の来ない店番では珍しく、どっと疲れたような気がする。お互い、顔を見合わせてため息をついたとき。

「すみません……」

異形、と染め抜かれたのれんをかき分け、声が店内に入ってきた。

第二章〜異形のお仕事2

「すみません……」

控えめな声とともに入ってきたのは、御高祖頭巾（おこそずきん）を目深に被った女性だった。

季節は春も終わりかけ。活気溢れる春夏冬町に来るには、すこし野暮な格好とも言える。それとも、顔を隠したい理由でもあるのか。

疑問が頭の端をかすめたが、なにせ久しぶりのお客様。言葉は悪いが、このお客を逃しては明日の飯も不安になってくる。

「いらっしゃいませ。本日はどのような御用向きで？」

正吉がにこやかな笑みを浮かべて女性に座るよう、促した。座敷は土間よりも高くなっており、腰掛けて話をするのにちょうど良いようになっている。夏洌も仁琥に目配せされ、棚の上に乗っている家鳴をさりげなく払った。視鬼の力を有している女性だったら、面倒なことになる。

「ぎょっ！」

「ひょっ！」

「なにしゅるかっ！」

途端、家鳴は騒ぎ出した。夏洌は嘆息しながらも、あとでね、とこっそり撫でる。しかし、嫌われているようで、ぎゃんと大きな口を開けられ、脅された。

「……あの、こちらでは本当に異形を祓っていただけますのか…？」

「もちろんですとも。ただ、強力な異形なら、寺院などに頼むというほうが…」

無理ならやらない、と暗に示す正吉に、御高祖頭巾の女性は力なく首を振る。店の奥にこぢんまりと座る仁琥を見て、次いで、なにやら小声で言いまくっている夏洌を見た。最後に、やはり正吉に目

線を戻す。一番、まともと判断したのだろうか。
「いいえ、どうしてもこちらで退治ていただきたいのです。寺院には、理由(わけ)あって参れません」
女性は力なくも凛と言い切る。あきらめそうにない姿に、正吉はため息をついた。基本、異形の討伐はお上の管轄。寺院に持って行くのが通例なのだが…。

異形屋に討伐依頼に来る客に限って、けっこう厄介な異形を抱えている場合が多い。

受けるにしろ断るにしろ、小僧の判断では決めかねる。とにかく、手代か番頭の帰りを待とう、と正吉が口を開きかけたとき。
「夏冽さん。お女中にお茶を」
お女中、と己を呼んだ子供に、御高祖頭巾の女性は驚きで目を瞠る。見習いの小僧、とでも思っていたのだろう。それが、年長の小僧に指図をする。さぞや奇異に映ったに違いない。夏冽は苦笑しつつ、小さな旦那さまの言うとおりにお茶を用意しに厨に走った。
「こんにちは、お女中。ぼくがこの店の主人です。異形屋の仁琥と申します」
ぺこん、と。可愛らしくも頼もしく、お辞儀をした仁琥に女性はほんのり笑みを浮かべた。あきらかに、緊張を解いている。
これが計算なのだから、若も侮れない。
正吉は眉を寄せつつ、帳場に座る仁琥の側に女性を導く。主人が子供だど知って、わずかに驚いているようだが、異形に悩まされているからか、ひどい取り乱しはない。
(よかった……)
内心、ほっとする。
異形、という特殊な存在を扱う店なのだから、主人が小さくても不思議ではない、というのがほとんどの意見だが、時折いるのだ。このような子供に頼むのは嫌だ、と文句を言う客が。

そして、仁琥は大層それを嫌う。子供扱いされるのは良いのだが、子供だから信頼されないのは嫌だ、ともっともな意見をあげる。
若には出来るだけ、好ましい体験をして貰いたい。
最近では、そう考えることが多くなった。それを夏冽に話すと、兄化していると笑われたものだ。それでも良い、と思う。自分が、そういった兄弟関係に置かれていないからだろうか。
ふと、考えていると仁琥の声が耳に入ってきた。
「正吉、ぼくの顔がどうかした？」
「いえ、なんでもありません」
「…そう」
生真面目な正吉は、仁琥の前では決して奉公人の顔を崩さない。それがすこし寂しい仁琥である。
なにはともあれ、今は目の前にいるお客のことだ。
仁琥は気を取り直し、御高祖頭巾を脱ごうともしない女性に向き直った。
「どんな異形にお困りですか？」
「……お話しすれば、祓っていただけますか？」
「うーん。ぼくたちに祓える異形なら、いいんですけども」
眉を寄せて、本気で考えている風情の仁琥に、女性はますます笑みを深めた。夏冽が持ってきた番茶を一口飲み、ほっと息をつく。
「わたくしは、武家町のとあるお屋敷にお仕えする者です。本日は、御方様の言いつけで参りました」
女性は頭巾に手をかけ、ゆっくりと布を取り払う。町娘ではありえない肌の白さが、出身の良さを裏付ける。
「わたくしは…徳乃とお呼びください。このことは、他言無用にお願いいたします」
徳乃と名乗った女性に、仁琥と小僧二名は頷く。それを確認して、徳乃は口を開いた。
徳乃は武家町の邸に使える女房らしい。邸の中でも、主の奥方や

子らが住まう奥の対に仕える奥女房。
その奥の対で、ちょっとした異形騒ぎが起こったという。

奥の対には奥方以外にも、一の姫二の姫、お家の嫡男や次男も住まう。子供が多いためか、騒がしいところはあるが、それでも他邸の奥と大した変わりはない。
一の姫は婚儀を控えており、奥はさらに賑々しくなっている。婚儀用の着物が多数運ばれてくる中、頼んでもいない鈴が届いたそうだ。
一同は不審がったが、鈴は大層美しく、一の姫の目にとまった。奇妙な鈴だが、さして害はないだろう、という事になり、鈴は一の姫の手元に収まることになる。
その鈴が届いた日当たりからだそうだ。

しゃんしゃん、と奥の対に音が鳴り響き始めたのは。

最初に鳴ったのは、一の姫の寝所のあたりらしい。姫が鈴を鳴らしているのだろう、とさして気も止めなかったが、つぎの晩。また鈴の音が鳴り響いた。

今度は、二の姫の寝所のあたりで。

二の姫の闇を突き裂く悲鳴に駆けつけた数人の女房が、それを見た。
しゃんしゃん、と優美な音とともに宙に浮く、青白い灯火を。見たのは一瞬だったという。もっとも、目にした瞬間に気を失ったのならば、どれくらい、その炎が現れていたのかは、わからないが。
それで、徳乃がここに来ることになったのだが…。

「しゃん、しゃん…？　ほんとにそんな音が聞こえたんですね」

徳乃の話を遮って、仁琥は確認を入れる。話を遮られたことを不快に思ったのか、徳乃がわずかに眉をひそめながら、頷いた。
「仁琥、人が話してるときに、なにか言ってはいけないよ」
やはり兄化してきた夏洌が注意する。正吉も同意見らしいが、なにも言わない。奉公人の仕事を超えてしまう、とでも思っているのだろう。
しかし、仁琥は焦ったように立ち上がる。
「しゃんしゃん、って？　本当に？」
再度、徳乃に確認する。徳乃は気圧されながらも、さらに頷いた。
「はい。鬼火、のような存在もいて…。女房のなかには、体調を崩した者もいます」
「…正吉、多喜次に沓頬（くつつら）を出して。いつ、帰ってくる？　って」
「は、はい」
正吉は首を捻りつつ、仁琥の指示を実行すべく奥へと消える。しかし、すぐに戻ってきた。
「すみません、若。沓頬ってなんですか？」
「……」
一瞬、店の空気が冷たくなった。徳乃が伺うように仁琥の顔を見る。仁琥は苦笑して、舌を出した。
「ごめんなさい。ぼく、急ぎ過ぎちゃいました。夏洌さん、異形本を取ってください」
「…え、これか？」
夏洌は手を伸ばして、異形本と銘打たれた本を取る。そのまま仁琥に手渡して、事の成り行きを見守る構えだ。徳乃も興味津々。正吉も同様。
三人の視線が集まる中、仁琥は埃が溜まった本を捲っていく。目当ての頁まで来たのか、紙を捲る手を止めた。そして…。
「沓頬ー。お仕事ですよー。多喜次に伝言を頼みたいんですーっ！」
ぼんぼんと、本を振りまくる。ひたすら振る。狂ったように振る。

全身を動かして、反動を利用しつつ振る。

なにも変化なし。

むかっとしたのか、仁琥は更に異形本を振りまくる。

「沓頬っ！」

一際はげしく本が振られたとき。どごんっと、大きな音とともに降ってきた。本の中から、沓が。

《あでででで…。痛いがね、若さん。なにぃ？　いったい》

「沓頬、っていうんです。こうやって、異形を呼ぶことが出来るんですよ」

おそい、と仁琥は異形を叩く。

転がり出てきた異形を前に、一般人化している奉公人も徳乃も、目はまん丸だ。

一方、転がってきた沓は不機嫌の極みだったが、徳乃の顔を見ると態度を変えた。

《およ！　かわいい女の子だがね！　若ー。こう言うのは、言ってくれなかんがぁ。あたしと若の間でしょうー》

まるっきりの沓が喋っている。使い込まれた沓は、所々塗りの漆が剥げ、二本の腕と二本の足が飛び出ている。

「…付喪神（つくもがみ）、ですか？」

《違うがね。あたしは付喪神じゃなくて、沓頬（くつつら）。覚えてねぇーん。で、若。いったいなんなの？　こんな真っ昼間からあたしを呼んだ訳は》

徳乃の言葉に突っ込みを入れつつ、沓の異形は仁琥に向き直る。

仁琥はひとつ頷いて、沓の異形――沓頬を掴んだ。

「多喜次にね、もしかしたら”しゃんしゃん火“がでたのかも、って言わなきゃいけないの。多喜次に伝えて！」

仁琥の手から逃れようとしていた沓も、異形の名に顔色？　沓色？　を変える。

《なんだって！　しゃんしゃん火？！　そんな、大変じゃあないか。よしっ。お待ちよ。あたしが多喜次の旦那に急いで会うからな》
言うが早いか、沓頬は駆けだした。というか跳ね出した。沓なのに、どうして跳ねられるのか、と気になるところはあるが、気にしないで置こう。夏洌と正吉は頷きあう。
沓を見送った仁琥は、徳乃に向き直った。徳乃の白い手を握り、にこっと満面の笑みを浮かべる。
「一のお姫さまのごコンギが迫ってるから、寺院には届けられないんですね。わかりました。ぼくたちが何とかします…！」
「ありがとうね、坊や」
こんなとき、子供で良かった、と思うのだ。だからといって、子供扱いが好きなわけではないけども。

「ところで仁琥…。しゃんしゃん火ってなに？」
夏洌が耐えかねたように、訊いた。

＊＊＊

そもそも、異形とはなにか。

一つ、夜中に外に出ると目が合う不可思議な存在。
一つ、あんまり、見たくない存在。
一つ、できれば関わりたくない存在。

「できれば、じゃなくて絶対に、のほうかなぁ？」
「いや、夏洌さん。そういうのじゃなくて…」
指を一本一本折り曲げながら首を捻る夏洌に、正吉は苦笑した。
「でも、出来れば関わりたくないでしょう？」
夏洌に訊かれた徳乃は、困ったように微笑みながら頭を振る。異形を取り扱う店で、あまり聞きたくない言葉ではある。ほんとうに、

大丈夫なのか？　この店は…。
「ま…ぁ、そうですけども…」
というか、異形屋の奉公人が言って良いものか否か。本気で思案し始める前に、徳乃は仁琥を見た。行儀小紋の小袖を着た仁琥は、きょとんと徳乃を見つめ返す。
「異形は人外のもの、です」
仁琥は誰ともなく頷き、続けた。
「しゃんしゃん火は、人に害をなす異形です。被害が少ないうちに、調伏したほうがいいとは思いますが…」
「でも若。多喜――番頭さんが帰ってこないうちに、店を空けるわけにいきませんよ」
「そっか…」
しゅん、とうなだれる仁琥を見て、小僧ふたりは正直ほっとする。
多喜次が帰ってこない間に退治に行ったら、なにを言われるかなど目に見えている。それも、仁琥ではなく夏洌や正吉に。
とにかく、遣いに出た沓頬の還りを待たなければいけない。
「すみません、徳乃さん。もうすこし、待っていただけますか？」
「できるだけ、早くお願いしますね」
気味が悪くて、と肩を落とす徳乃を気の毒に思うが、こっちも夕飯がかかっている。多喜次に叱られでもしたら、夕飯を抜かれることなどざらにある。
それでも残念そうにうなだれる仁琥と、不安そうに頭巾を握る徳乃を見て、情が動く。これ以上待っていたら、異形退治に出かけたくなる。
正吉と夏洌が店表をのぞきに行こうと、膝を立てたとき。
《お待っとさんでしたぁぁぁ》
徒人には聞こえないであろう声が響く。のれんを跳ね上げて通りに出た小僧二人は、その瞬間、頭を抑えてしゃがみ込んだ。

「いったぁっ」
「な、なんですかっ。沓頬！」
《ふんっ！　迎えに出てくるのならなぁ、もっと綺麗なお嬢さんがよいわっ！　帰ってきて早々、むっさい男の顔なんぞ見たくないんでね》
正吉と夏洌の脳天に直撃特攻した沓頬は、ふんっと（どうやってか）鼻を鳴らす。もとが沓なものだから、かなり痛い。
天下の往来で頭を抱えてしゃがみこむ奉公人を、通行人たちは遠目で遠慮がちに見る。
はっきり言って、視線が痛い。可哀相な人、という視線も感じる。
「沓頬、番頭さんに会えたんだろうねぇ」
「もし、会えてなくて、番頭さんの返答も持って帰ってなかったら……」
燃やしてやる！　がんがんに燃えた竈の中に放りこんで、燃料代の足しにしてやる！
結束した夏洌と正吉は、殺気を感じて縮こまる沓をひっつかみ、店の中に飛び込む。いつまでも、視線の気になる往来にいたくない。
《横着に扱うなぁぁぁ。あたしは、繊細な貴族の沓なんだよっ》
やはり徒人には聞こえない悲鳴を上げる沓頬を仁琥の前に落とす。ごっと、耳にいたい音がしたが、気にしない。
《痛っぁ。高いとこから、落とすのはかんわぁ》
沓頬は沓から生えた手で沓（からだ）をさすりながら、なんとか体勢を立て直すと、仁琥の前にきちんと座る。ちなみに、沓頬の足はうんと長い。だから、楽に座れる。
「で、多喜次はなんて？」
《あ～。とりあえず、多喜次の旦那の言葉をそのまま伝えりゃいいんでしょ。
…しゃんしゃん火の退治など、仁琥さまお一人でなさってはいけ

ません。鈴夜に押しつけなさい。
　しゃんしゃん火というのは、人の怨念が凝り固まった代物です。並の神官でも手に余ります。異形本に入れたいから、という理由では、さらにいけません。考えてもみてください、異形本は倉にどっさり積まれてるんですよ。これ以上ふやしてどうするんですか。いけません。駄目です。第一、しゃんしゃん火など、益体もありません。火だねにするなら、遊び火がいますでしょう。
　夏洌と正吉はなにをしてるんだい。仁琥さまに危険なことさせるなんて。仁琥さまが怪我でもしたら、夕飯は抜きだね。
　大体、なぜそのような依頼など受けたのですか。仁琥さまに百万が一の事があったら、どうするつもりですか。そのような依頼、寺院に持って行くのが筋というもの。一介の異形屋風情に持ってくるような案件ではありません。仁琥さまが怪我などしたら、あたしは。あたしは…っ、なにっ！　沓頬。おまえ、あたしに文句を言うつもりかえ？　長すぎると覚えられないだぁ？　役立たずだね。そんな役立たずは燃やしてしまおうか？　竈に放り込んだら、燃料代の足しにはなるだろう。…いやか。いやなら覚えるんだよ。
　……で、仁琥さま。行ってはだめですよ。あたしは、木戸が閉まってからしか、帰れそうにありません。なので、明日になるやもしれ…》
　そこで沓頬は黙り込んだ。はぁはぁ、と肩？　で息をして、傍目にも苦しそうだ。全力疾走したあとのよう。悲痛な軋みのような音をあげて、叫ぶ。
《これ以上は無理。むり。ムリ！　なにっ？　あの迫力っ！　信じたくないわっ。でっ！竈行きだけは、ごめんなのよーーー。あたしゃ、逃げるかもよっ》
　逃げるように言ったかと思うと、帳場に置いてあった異形本に消える。実際、逃げた。
沓頬の必死の叫びを耳にした徳乃は、目を丸くしている。正吉と夏洌は、思い当たる節があるので、何とも言えない。唯一、仁琥だけ

が同情したようだ。異形本を持ち上げ、棚に置いた。
「沓頬、ありごとね」
よし、と立ち上がると、仁琥は棚にしまわれていた小行李を引っ張り出す。うっすら被った埃を払いつつ、徳乃に向き直る。
「徳乃さん。今からお屋敷に行っても、大丈夫ですか？」
「あ、はい。しかし、よいのですか…？」
徳乃も番頭の権威を知っているようで、困惑している。あわてたのは正吉と夏洌だ。沓頬を介しての言葉なのに、あんなにも恐かった！　なのに、この旦那さまはお出かけしようと思っている！
「仁琥っ。だめだめ！　行くなんてとんでもない！」
「考え直してくださいっ。番頭さんに叱られますっ。ねっ、徳乃さん！」
血相を変える奉公人ふたりに、徳乃は巻き込まれるように頷く。しかし、坊ちゃん気質なのか、生まれ持っての性質なのか、仁琥は気にすることなく小行李を持ち上げ、夏洌に手渡す。思わず、といった風に受け取った夏洌の手を引き、立ち上がった。
「え？　なんで俺？　正吉さんじゃなくて？」
「……夏洌さん。若に怪我なんかさせちゃあ駄目ですよ。わたしは、店番してますから」
逃げた。にっこり笑って正吉は逃げた。明らかにほっとしている。夏洌の悲壮な視線を見ないふりして、正吉は帳場に座して手を振った。
「木戸が閉まる前に、戻ってきてくださいね」
正吉が手を振ったのを良いことに、仁琥は夏洌の腕を引いて土間に降りた。隅に置いてある小さな草履を引っかけ、徳乃を手招く。
「案内、お願いします」
「ありがとうございます…」
深く頭を下げた徳乃に、夏洌はどぎまぎする。高位の家に仕える女房が、これほど気優しいとは、思いも寄らなかった。
最後の足掻きで嘆息したあと、夏洌は手にした小行李を背負い直

す。なにが入っているのか、けっこう重い。小行李を開けたら、大小さまざまなお化けが出てきたら、やだなぁ、と何気なく考える。

「もし、遅くなりそうだったら、管狐に連絡を頼むからね。いってきまーす」

ちゃっかり徳乃に手を引いてもらっている仁琥は、楽しそうに声を上げた。今は、ちょっと裕福な商家の子供に見える。隠れ小紋がときどき、存在を示すように輝いた。

第二章～異形のお仕事２（後書き）

やっと出てきた異形ですが、資料によりばらつきがあったので、もはや創造で。妖怪としての名前は正しいのがほとんどですが、役割などはまったくの夢想です。ご容赦ください。

第二章〜異形のお仕事3

早咲きくちなしの香りがむせ返るようだ。じんわりと広がって、淡闇に佇む夏洌を包む。

実は、それがすこし鬱陶しかったりする。

武家町は大名邸界隈、とあるお屋敷、の庭。しかも奥の御殿。通称、奥の対。

ふつうなら、入っただけで大罵倒の末、島流しなんての冗談ではないのに、夏洌はその奥御殿の庭にしゃがみ込んでいる。

そして、先ほどからくちなしの匂いが漂っていて、かなり鼻につく。

「くっ。これだから、いやなんだよ。大体、なんで仁琥は御殿に入れて俺は駄目なわけ…」

理由は簡単。ここが奥御殿だから。仁琥はまだ元服もしてない子供。一方、夏洌は数えの一九。腕っ節に自信なんてないけど、成年男子。

とはいえ、分かっていても哀しい感情がある。もうじき、梅雨にもなろうかという今日この頃。ひとり寂しく人様のお屋敷の奥御殿で、なにが哀しくて庭にしゃがみ込んでないといけないんだ！

おまけに、あやしい空模様になってきた。

雨が降ってくる前に、お店に帰れると良いんだが…。

仁琥に風邪でも引かれたら、多喜次さんが恐いことになる。夏洌は深く息をついた。

「傘を貸してもらえると良いけど」

ぽん、と夏洌は脇に置いた小行李を叩いた。ここに来た理由を思い出し、ちょっとばかし憂鬱な気分になるのだ。

しゃんしゃん火という訳の分からん異形の退治。

夏洌の雇い主である仁琥は、嫌がりながらも御殿に上がっている。徳乃以下女房たちに引きずり込まれた、と言うほうがしっくり来る気も否めない。かわいい、かわいいと連呼されていたし。

「しっかし、なんで俺？　正吉さんじゃあなくて。なんで俺？」

異形屋の奉公人の中では、一番日が浅い。番頭や手代が留守にしているから、小僧が対処すべき、というのは納得できるけど…。なんで俺？

「うぅ。出来るだけ異形には関わりたくないのに…。なんか肌寒いし…、気味悪いし…、なんか飛んでるし…、くちなしの匂いきついし…」

肌寒さを感じて、夏洌は腕をさする。ふと、肌が粟立っていることに気づいた。

「夏洌さん。そこは寒くない？　大丈夫？」

「ひょえっ。…なんだ、仁琥か」

縁台の上から、仁琥が苦笑して夏洌を見下ろしてきている。年上の威厳台無し。元々ないけど。

「しゃんしゃん火、出てくると思います？　夏洌さんの意見は？」

「え…、どうって言われても、ねぇ。うーん、くちなしの匂いが鼻について寝られない…かも。ところで仁琥、なんで俺を連れてきたんだ？　正吉さんのほうが、馴れてるっぽいけども」

「そういえば、そうですね。何ででしょう？」

小首を傾げて微笑む仁琥を見て、徳乃以下女房たちが小声で騒ぐ。ずいぶん、気に入られたらしい。困ったように仁琥は廣間を見て、夏洌に視線を戻す。

「とくに、理由はありません。なんとなくです」

なんとなく、で異形退治のお供に選ばれた訳ね…。

運が良いんだか、悪いんだか。夏洌はますます憂鬱になる。しか

し、異形を視られるのか？　俺は…。異形屋に奉公に上がってからだぞ、視られるようになったのは。ん？　なんで視られるようになったんだろ。

しきりに首を捻る夏洌に、御殿のうちから声がかかった。正確には、仁琥に。

「仁琥殿、こっちにいらっしゃらない？　おいしいお菓子もありますよ。あ、ついでに夏洌さんもどうぞ」

麗しい女性に声をかけてもらえたのは嬉しいけども。ついで、ついで、ついで…。夏洌の頭の中で「ついで」が反響する。

俺はついで、ね。ちっきしょーーーー。でもっ、困ってる仁琥も可愛いっ。抱きぐるみにしたいっ。

思考はもう破茶滅茶滅茶苦茶。夏洌は頭を掻きむしらんばかりに迷う。

「じゃあ、お菓子を貰いながら、異形についてお話してもらっても、いいですか？」

「それはもちろん。ねぇ、御方様？」

廣間の奥から、緩やかな声で肯定の返事がある。朽ち木型の帳を垂らした几帳の裏で、奥方さまが微笑んでいることだろう（↑夏洌想像談）。夏洌は遠慮がちに縁台に上がったが、廂の間に腰を下ろした。仁琥も同じく。

「あら、もう少し中に来られればよろしいに。仁琥殿も、夏洌さんも」

いいえ、と声を上げたのは仁琥だ。しゃん、と前を見据え首を振る。

「ここでいいです。まずは、しゃんしゃん火退治です！」

「そう、ですか…」

なぜか非常に残念そうな声が几帳のうちから響く。しん、と廣間が寂しく静まった。多少、その気持ちが分からないでもない夏洌だが。

どこかで気の早すぎる鈴虫が、鳴いている。大方、早物好きのいなせ者でもいるのだろう。聞けば、隠居殿が好んでいるらしい。
「どうやって、早く鳴くようになるんだろう…？」
話を聞いていた仁琥が、きょとんと疑問を言の葉に乗せる。徳乃はほほ、と優雅に笑い、答えた。
「専門の職業師がいるのです。御当家では、隠居様がお好みになるので、そういった者が多々出入りしてます」
ふーん、と仁琥が納得したような息をついたとき、一際大きな鈴虫の音が響いた。
お武家は風雅なんだなぁ、と感心気味の夏洌がふいに眉を寄せる。目の前を黒茶っぽい虫が走り去っていったような、嫌な感じが…。
麦菓子に手を伸ばしていた仁琥も、剣呑がるように辺りを見回した。夏洌はびくびくと忙しなく辺りを見回しながら言う。
これは、まさかのまさか…。
「ひょ、ひょ、っとしなくても…。お化け？」
「異形です。夏洌さん、異形屋奉公人がこれっくらいで怯えていては、いけませんよっ！　小行李を持ってきてください」
言うが早いか仁琥は立ち上がったかと思うと、もう走り出している。麒麟もかくや、と思えるほどの素早さに目を瞠る一同をほっぽり出し、夏洌も小さな旦那さまの後を追う。もしも、もしも仁琥さまが怪我でもしたら…っ！
「仁琥ーっ！　ごろごろ石が転がってるから、転ばないでくれよっ」
ごろごろ…。庭師が聞いたら、怒りそうな言葉だ。
子狐並のすばしっこさを発揮して、夏洌の旦那さまは庭を駆けめぐる。後を追うほうのことも考えて欲しいものだよっ！
風雅に配されているんだろう庭木や庭石を避けながら、夏洌は必死に仁琥のあとを走る。子供特有のすばしっこさだろうか…なんて考えながら走っていると。
「がっ」
ごんと、哀しい音がして夏洌のおでこに激痛が走る。庭の松の枝

が憎々しい。思わずしゃがみ込みそうになったが、思い直して足を進める。今度は、ちょっと慎重に。
「まったく…。帰って、多喜次さんがいたら…」

考えるだに、恐ろしい。

「くっ。なにがなんでも早く退治て、木戸番たたき起こしてでも通してもらって、店に帰ろう」
「夏冽さん？　遅いです。…おでこ、どうしたんですか？」
ひょっこん、と仁琥が顔を覗かせた。庭木の枝の下にいるらしい。夏冽は微妙な笑みを浮かべて、その質問をやり過ごすと、仁琥の手招きで木の下に潜った。
夏冽が隣に腰を下ろしたのを見て、仁琥は指を立てた。そのまま、顔を向けた先を指す。
「あれ…」
「…ひっ」
夏冽は息を呑む。見たくない、見たくない、と念じながらも薄目を開けて仁琥の指先を見る。
ふうらりふうらり、と青白い火が浮いていた。
しゃんしゃん、と音がする。次の瞬間。

ぎぃよぇぇぇぇぇぇぇっっっ！

「夏冽さんっ」
夏冽の悲鳴が轟いた。ついで、仁琥の小さい怒声。
「なにやってるんですかっ。先攻必勝っていうんですよ！　あぁ、もうっ。きちゃったじゃないですか」
「いっ。いやぁぁぁぁっ」
しゃんしゃん、と音が響かせながら青白い火がこっちに飛んでくる。というか滑空してくる。なにが燃えてるのか分からないけど、

なんだか焦げ臭い。
それが自分に向かってくるのだ。基本的に、こうなる。
「お化けぇぇぇっ。こっちに来るなぁぁっ。ひょえぇぇぇっ！」
極々ふつうの反応だ、と後に異形屋閣議決定されることになる夏洌の行動だが、青白く燃える異形は、興味を引かれたらしい。ニッ、と笑った（どうやってっ！）。
無言で己を見つめる仁琥に突進？　してきた。
避けるそぶりを見せない仁琥に、完全にへっぴり腰の夏洌は別の悲鳴を上げる。
「仁琥っ」
大事な旦那さまに怪我をされたくない。夏洌は異形を睨んだ。頭の奥で、なにかが填った音。微かだが、しっかり聞こえた。
恐怖に奉公人魂が打ち勝った瞬間である。というより、仁琥一番大事心発動の瞬間？
仁琥にからみつこうとしていた青白く燃えるお化けをはり倒し、末恐ろしい眼光を向ける。ひっと、異形は後退った。仁琥の前に立ちはだかり、奇っ怪なふふふ笑いを浮かべながら異形を引っ掴む。ごごごごごごごと冷たい炎を放ちまくる夏洌に、異形は恐怖を感じたようで。
《あぎゃぁーーーっ！》
断末魔似の悲鳴？　をあげて後ろに退がる。
仁琥もぽかんと口を開けっぱなしだ。夏洌の勢いに押されて数歩後退った。こつん、と足に触れるものがある。肩越しにそれを見て、仁琥は瞠目した。

異形を睨み抑えている夏洌は、なにか思いついたらしい。
「俺が背負ってきた行李。あれの中に、異形退治の七つ道具が入ってるんだろう？　とにかく、それで退治を…」
「無理です」
至極もっともな提案を切り捨てた仁琥に、夏洌は状況を忘れて突っ込んだ。
「なんでっ」
「だって…。帰ったら、鈴夜を叱らないといけないんです」
意味不明。夏洌はそう判断して、ゆっくりと振り返った。なにかの拍子に開いたのか、小行李がその中身をさらしている。その中には、
ころんと一個、転がっていた。大層大きな漬け物石が。
「……これが、異形退治七つ道具？」
「……まっさかぁ！　へいへいぼんぼんな漬け物石ですよ」
しばしの沈黙が場を包む。異形は律儀なことに、その場にとどまって様子を窺う。夏洌はぎしぎしと振り返り、乾いた笑声を押し出した。
「あはは…。漬け物石ねぇ」
三十六計逃げるが如かず。な状況っぽい。
「鈴夜のお漬け物は、おいしいですもんね」
「そうだな。こんなにも重い石を使ってるからな」

帰ったら、怒る！

小さな旦那さまと奉公人は期せずして、同じ誓いを立てる。
「異形本は持ってきてありますから、折伏なら出来ますよ」
折伏？　と夏洌は首を捻った。仁琥は懐から草紙本を取り出す。年季物の本を抱え、夏洌の前に出てきた。
「危ないから、退って」
「異形は律儀なんです。礼儀正しいんですよ」

「…律儀…礼儀正しい…？」
闇に住まうのに、律儀も礼儀正しいもあるのか…。異形とは奥深いものなんだな。
妙なところで納得した夏洌は、一応仁琥の邪魔にならないようにさがる。万が一、仁琥の邪魔なんてして、旦那さまが怪我でもしたら…。考えただけで、鳥肌がたつ。
草紙本を抱えて頁を捲っていた仁琥は、ある頁で手を止めた。夏洌が不審に思ったのつかの間。
「水は近くにあるし、相手は燃えてるし。よし、好条件だね。リュウコイ」
小さくなにか呟いたかと思うと。どこからか大量の水が降ってきた。律儀に礼儀正しくとどまっていた異形にかかる。

じゅっ。

目の前に浮遊していた異形がか細い音を立てて消えた。というより、異形のまとっていた炎が消えた感じ。
「龍、来い？」
まさか、さっきのは龍を呼ぶための呪文、だったりして…。というか、律儀で礼儀正し異形に断りもなく先制攻撃って、いかがなものだよ。しかも、あっけなく勝負がついたような。
急に現れた水に炎を消された異形は、水たまりと化した地面に転がっていた。なぜか、うっすら汚れた鈴に変化して。
驚きに目を瞠る夏洌をよそに、仁琥は転がっている鈴を無造作に掴みあげた。けっこう大きく、土産物の風体をしている。しゃん、とか細くふるえた。ばんばんに怨念が伝わってくるそれを、仁琥はぎゅうー、と握る。一層、音が強く鳴った。夏洌は控えめに仁琥に近寄る。
「これが、あのお化けの正体…？」
「異形ですよ、夏洌さん。お化けじゃありません。竜鯉にお願いし

ました」
「竜鯉？　なに、それ」
鈴を袱紗で包む仁琥は、疑問符が飛びまくっている夏洌を見上げる。鈴を包んだ袱紗を小行李の中に入れ、夏洌に持つように言う。
「ぼくのお祖父さまが飼ってた鯉です。頭につのがあるんですよ。すっごい大きいんです！　ね、竜鯉」
仁琥は庭の池に声をかけた。仁琥に従って池をのぞき込むと、夏洌は目を瞠る。池の小さな鯉のなかに、やけに太った鯉が泳ぐ。どこか視覚の不調を感じ目をこすると、声を上げた。
「あっ」
太った鯉は、頭につのがあって、太っとい首には黒い璧。あきらかに、異形の存在。
「わー、御利益ありそう…」
一応、拝んでおこう。なんか、良いことありそうだ。
鯉に向かって手を合わせる夏洌の耳に、かすかな声が滑り込んでくる。耳に直接、というか頭に直接響く。
《我儕（わなみ）は鯉。御利益を期待するなら、社居へ行くがよろし》
ぽちゃん、と小さな水音と微かな言の葉を残して太った鯉（竜鯉？）は消える。まさしく消えた。目を瞠る夏洌の袖を引いて、仁琥は立ち上がる。
「鯉の成った存在です。龍脈を使って移動するんですよ。
夏洌さん、帰りましょう。御殿の人たちには、もう大丈夫って言わなきゃいけません」
「…あの異形は、どうするんだ？」
「店に帰って清めましょう。ご供養です」
言い終えると、仁琥は御殿に向かう。小行李（異形入り）を嫌々背負った夏洌も、小さな旦那さまの後を追った。
静まった闇のうちに、くちなしの匂いがゆるゆると広がった。

そういえば……
「仁琥、ところで何で漬け物石一個が？」
「鈴夜の趣味です。置き場所に困ったんじゃないのかなぁ」
「迷惑だな…」
「めーわくです」
夏洌の言葉を反復して、仁琥は頷いた。

第二章～異形のお仕事３（後書き）

まとまりが乏しいです、すごく…反省です

第二・五章〜木戸番の悲鳴

まったく。木戸番なんてするもんじゃない。
番太郎はたたき起こされて重いまぶたを落としながらため息をつく。気持ちよく寝ていたのに、たたき起こされた。先ほど、帰るのが遅くなった奉公人二人を通してやったばかりだ。番小屋で寝ていた妻が起きなかったのが、幸いだ。

はっきり言って、妻は恐い。

世に言う恐妻家なのではないか、とこの頃思い始めている。番屋で寝ている妻を思い起こし、番太郎は暗い気分に落ち込む。
番太郎は火鉢の埋み火を掻き起こし、五徳を乗せた。鉄瓶に水を入れ、五徳に乗せる。
「まったく」
もう一度息をついて、番太郎は肩を回した。煙管をとったが、妻の顔を思い出してあきらめる。
「…身の不運ったぁ、こういうのだなぁ」
鉄瓶の湯が沸くまで、と言い聞かせ、番太郎は寝転がる。雨が降ってきたのか、微かな水の匂いが満ちていた。
「…ん？」
ふいに、番太郎は身を起こす。いま、なにか気配が…。ぞくり、と背中が粟立つ。番太郎は二の腕をさすった。
「お、おい…」
番屋で眠っている妻を起こそうとしたが、思い直す。寝起きの悪い妻を起こすより、妖怪に遇った方がまだマシだ。
「……よ、し」
心の臓の音が、耳の近いところで聞こえる。恐いもの見たさ半分に、番太郎は番屋の戸を開けた。がたごと、とがたつく戸を開ける

と、そこには。

銀の闇が目の前をよぎった。

「ひっ…」

銀の闇をまとった影は、番太郎に気づいたらしい。ゆっくりと緩慢な動きで振り返った。

一対の金の輝きが番太郎を射止める。刹那、番太郎の足元が揺れた。

なぜだか、非常にゆっくりと銀の闇は番太郎に歩み寄る。

「そこもと、吾の――を知らぬかえ」

耳に付く甘ったるい声で問いかけてきた。かさり、と銀の闇が雨で濡れる地面を踏む。

番太郎は言葉もない。音がしそうな勢いで首を振り、否定をあわらす。

「そうか…。残念だ」

銀の闇は金の目を細めると、呟いた。

「引き留めて、わるかった」

律儀に礼の言葉を残し、銀の闇は消える。

なんて、礼儀正しいお化けなんだろう！

しかし、番太郎は息を吸うと腰を下ろした。一拍、間をおいて目を見開く。

ぎややぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！

野太い悲鳴が、江都の夜に轟いた。

第二・五章～木戸番の悲鳴（後書き）

木戸番は、どうやら薄給だったらしく、副業で駄菓子屋さんやら内職やらをやっていたようです。
妻子と一緒に番小屋に住み込みで、木戸の番をしたようで。

第三章〜異形屋の裏

こ。こけけ。ここけ。こここっこけっ！

と、人を小馬鹿にしたような鳴き声で一日は始まる。腹立たしいが、起きねばならない。

こ、こここけ。こけけ、こっこけ。

……うるさい…。

小さく唸りながら、夏洌は茵を抜け出した。正吉も隣の部屋で起きだしたようだ。微かな物音がする。

「夏洌さん、起きてますか？」

「なんとか、起きれる…」

九割九分九厘方、頭は寝てるけど。

夏洌は手を伸ばしてお仕着せに腕を通した。適当に着て、茵を片付ける。里にいた頃、仲良しだった万年床とは、おさらばしたい。しかし、早速にも挫折しそうだ。

ありえそうな現実に目を向けていると、隣からこつん、と軽い音がした。

「仁琥様はどうしてます？」

「遅くまで手代さんを叱ってたよ。まだ寝てるんじゃないかな。鈴夜さんから、昨日のことが番頭さんに漏れることはないだろうな」

薄い壁を通して、正吉が安心するため息が聞こえてくる。帯を結んで、夏洌は部屋を出た。朝一番の仕事は決まっている。

明け六つすこしまえ。ようやく東の空が赤みを帯びてきた頃だ。

「ふあぁぁぁぁ」

おおきなあくびをひとつして、夏洌は表に出た。九割方眠った頭のまま、店の前を掃き清めるべく箒を手にする。そこで気づいた。

「あれ？」

店の前に、人が立っている。木戸はまだ開いていない。なのに、なぜ人がいるのか。しかも、この辺りでは見かけないような上等の振り袖を着て、つややかな黒髪は大名家の姫様のように長い。

「あの…」

どきどきと、高鳴る心の臓を押さえ、夏洌はその女に声をかけた。

すると。

「あら？　異形屋の奉公人？　見かけない顔だわね」

その女は緩慢に振り向いた。秀麗な顔立ちに、一層早まった鼓動に加え、なぜか恐怖も感じる。女の首に違和感を覚え、夏洌は首をひねった。違和感がいや増した、そのとき。

ぐわりと、女の首が伸びた。

「……」

首がそのまま夏洌に向かって、伸びてくる。

沈黙はおよそ一拍。固まっていた思考能力が回復すると、夏洌はぱかりと口を開け、息を吸う。そして。

ぎょぉぉぇぇぇぇぇっ！

まだ早い時間だというのに、春夏冬町に悲鳴が響き渡った。突如轟いた悲鳴に、店から正吉も飛び出す。ぞうきん片手に、先輩威厳を見せる。

「夏洌さんっ。近所迷惑もかんが、ぎやゃゃゃゃゃ」

しかし、店から飛び出した正吉も、口を大きく開けて叫んだ。

「ろくろ首女ぁぁっ。出たぁぁっ」

「な、なんですってっ！？　失礼よっ。男ども！」

ろくろ首女が、首をなお一層伸ばしながら夏洌と正吉に近づく。小紅の振り袖と一緒に、長い首が揺れるさまは、はっきり言って不

気味だ。
「ば、番頭さん呼んできましょうっ。夏洌さんっ」
「呼ばれなくても、ここにいる。あさっぱらから、騒がしい。近所迷惑もいいところだ」
多喜次があきれ調で、のれんから顔だけをのぞかせている。首だけ異様に長い女を見ても、驚きもしない。片眉を跳ね上げ、珍しいものを見るように異形ろくろ首を眺めた。
「お江与媛。こんな時間にどうしました？」
動揺ひとつせずに、客に接するように対応している。というか、媛なのか？
「捜し物を頼みたいの」
「捜し物、ですか。……わかりました。とりあえず、店の中へ。正吉、夏洌、きちんと掃き清めておきなさいよ」
ぽかんとする奉公人二人を残して、多喜次はろくろ女を伴って、お店に入っていく。掃き掃除を言いつけられた二人は、顔を見合わせた。
「店の中のぞきたい、けど……」
「番頭さんに叱られますよ。いつもそうなんです」
がっかりしたような正吉に対して、夏洌は猛烈な勢いで箒を動かし始めた。
「夏洌さん？　どうしたんです？」
「早く終わればいいんじゃないか」
にっかり笑う夏洌の意見に、正吉も賛同する。ぞうきんを放りだして、竹箒を手に取った。
「ふたりとも、掃除は終わったのかい？」
正吉と夏洌が店ののれんを押して入ってきたのを見て、鈴夜は秀麗な顔を向けた。夏洌だけには、鼻を鳴らす。所行がばれて、痛い目を見たからだろうか。
夏洌は苦笑しながらも頷いた。

「はい。きちんとしてあります。あの、そっちのひと……ひとでいいのかな？」
「お江与媛。由緒正しい、ろくろ首だ」
ろくろ首に、由緒正しいも正しくないもあるのか……？　ぼんやり思っていると、「……うちのお得意さんなんだよね」
寝ぼけ眼をこすって、座布団に収まっている仁琥が補足説明してくれた。鈴夜が不機嫌そうな顔をしているのは、仁琥が羽織を着ていないからだろう。正吉が気を利かせて、奥から羽織を持ってきた。
「あら、やっぱり異形屋の奉公人なのね。ふたりとも、前は見なかったけども。前の小坊主はどこに？」
人間と同じ長さに首を収めたお江与さんは、首を少し伸ばして疑問の意を表す。こうしていると（首の長さを除けば）、やっぱりふつうのお嬢さんだ。
多喜次はすこし考えた後、口を開く。
「嵐新ならば、異形退治の行脚に出ております。一応、籍は置いてあって、異形屋の廻屋という形をとっていますよ。元気でやっているそうです」
「……そう。あの子は優しかったのになぁ。あたしを見て、悲鳴なんてあげたことなかったわ」
ちらり、とお江与さんは小僧二人を見る。正吉と夏洌はにこやかな笑みを浮かべて、お江与を見返した。
文句があるなら、はっきり言えぃ！
内心叫んでいるが、お得意様らしいので、表情は穏やかだ。しかし、異形がお得意様とはどういうことだろう。不思議に思うのだが、聞ける雰囲気ではない。我慢我慢。
「で、お江与媛。捜し物とは、いったい…？」
多喜次が話を切り出したところで、夏洌は立ち上がった。店の奥にある厨に向かう。
「あのね、櫛をなくしてしまったの……」
「櫛、ですか？」

夏洌が運んできたお茶を飲み、お江与さんはこくり、と頷く。…というか首だけ伸びる。ぼこ、って感じに。
「そう、櫛なの。とっても大事な櫛なのよ。あの人からもらった、大事な櫛」
あの人、と言う時だけ、お江与さんは瞬いた。大きめの湯飲みを両掌に包んだ仁琥が、不思議そうに首を捻る。
「それは誰ですか？」
仁琥さま、と軽くたしなめる多喜次の声がある。美人のろくろ首は、力なく首を振った。
「異形屋の若君のお心を煩わせたとなれば、組頭からおしかりを受けてしまいます。お気になさらずに」
「…お江与さんが言いたくないなら、それでいいけども…。ぼくが力になれることがあったら、言ってくださいね」
「…ぅんもー。若君様かっわいいーっ！　食べちゃいたいわーっ」
むんぎゅー、と異形の女に抱きしめられた仁琥は、ふざけ気味の悲鳴を上げる。鈴夜がむっとして、お江与さんの袖を引いた。
「それで、櫛を落とされたのは、どの辺りですか？」
表面上は穏やかさを保っている多喜次も、内心牙を剥きだしているだろう。とっとと大事な仁琥さまから離れんかい！　が異形屋の総意だ。控えめの殺気を感じたのか、お江与さんは仁琥を放して、座り直す。
「お城に繋がるお堀の中よ」
「……はい？」
多喜次が聞き直す。お江与さんはもういちど、言った。
「お城に繋がるお堀の中に落としてしまったの」
「……すみません、他を当たってください」
多喜次の言葉を皮切りに、鈴夜がお江与さんに出されたお茶を回収し、正吉ははたきを手に取り、夏洌は帳場の机を拭き始める。座布団に座っていた仁琥を、多喜次が抱き上げた。
「もう少し、お休みになりますか？」

「え、でも…。お江与さんの依頼はどうするの？」
「…お江与媛。諦めていただきたい。異形にとっては、お城などただの建物かもしれないが、あたしらにとっては、大事なとこだ。仁琥様にそんなことは、させられない」
そんな！　とお江与さんは瞠目する。よよ、と泣き崩れる風をし、仁琥に流し目を向けた。多喜次がなにかを払う仕種をすると、なにやら怒り始めた。
「ちょいと！　私のお願いは聞いてもらえないのっ？　看板に偽りありね！　ち。駄目か…。こうなったら。
異形屋の若君～。番頭さんを叱ってくださいな。私を苛めるのですよ」
「え、でも…」
「間違った知識を、うちの旦那様に植え込まないでもらいたい」
鈴夜が帳場に座り、そろばんをはじきながら言う。
「まったく…、昨日だって若は異形退治に出かけてらっしゃるんだから」
「なに…？」
多喜次の冷たいつぶやきを聞き、鈴夜は己の失言を認識した。はっと、仁琥に目線を滑らせると、満面の笑みを浮かべた仁琥を見つける。冷たい汗が背中を流れ、ついで番頭に目線を移す。これまた満面の笑みを浮かべた多喜次に行き当たり、小僧二人に助けを求めた。
「なんてことを…。本当に異形退治など…？」
「…番頭さんに怒られる」
正吉と夏洌も“仁琥さまの異形退治”に荷担しているため、下手なことを言えない。飛び火しないことを、ひたすら願う。
「ほぉ、仁琥さまがなぁ。異形退治…ねぇ」
不穏な笑みを浮かべた多喜次の腕から逃れようと、仁琥はからだを捻った。正吉も夏洌も、残っていた眠気が吹っ飛ぶ。お江与さんは馴れた様子で隅に避難。

……場慣れしている気がする。
番頭の腕から逃れた仁琥は、夏洌と正吉、小僧組の後ろに避難する。
「ひさしぶりに、雷が落ちそうです…」
仁琥のふるえた声に、夏洌と正吉は震え上がった。にっかりと、番頭さんの口が裂けた。……ように思える。
番頭多喜次の尾を踏んだ鈴夜だけではなく、“仁琥さまの異形退治”に荷担していた小僧二人にまで、多喜次の雷は落ちた。
それはもう、どっかんどっかんと。
多喜次の説教雷が鎮火すると、どこからか現れた異形が後を引き継ぐ。
《みなさん、番頭殿がお怒りになるのも仕方ありませんよ。事主(ずしゅ)殿、貴方はご自身を軽んじられているのか？》
はて、と小僧二人が首を傾いでいると、やつれた鈴夜が説明する。
「どこかに蛟竜がいるんだろう。みずちの精だ。若のお守りでもある」
「鈴夜、お守りって言わないで！　蛟、姿もなしに怒らないでよ！　ここに来て」
鈴夜の説明に文句を入れてから、泣く寸前の仁琥は異形本に手を置く。
《あい、事主の命じならば》
すん、と水琴窟に似た音がして、異形本がふるえる。どこか蛇に似た異形が姿を現した。頭部にある角が竜に似る。
「ずしゅ、ってなんです？」
これまた御利益のありそうな異形の登場に、目を瞠る夏洌の耳に正吉の問いが入ってくる。正吉の問いに答えたのは、巻き込まれて

いたお江与さんだった。
「異形が仕える主を呼ぶ言葉よ…。ところで、今日は長いわね」
「これからが長いんだ」
苦い物を呑んだ顔をする鈴夜は、ますます眉間のしわを深めた。
嘆息して見る先には、蛟竜という異形。蛟竜は優美な尾を振った。
《事主、貴方は先代から異形本を引き継いだ唯一の方です。はやく大人になりたい、というのは分かります。お仕事熱心なども感心。しかし、考えてもみなさいな。事主に万が一があれば、異形本に入っている異形はどうなるのですか？　異形をきちんと扱う者に本が渡ればいいが…。国家転覆を企む不逞の輩の手に入ったら、どうなります》
蛇の口が絶え間なく動き、静かだが逆らいがたい説教が湧き出る。仁琥は一層小さく縮こまっていた。助けを求めようにも、蛇に睨まれた蛙よろしく動けない。
すこし離れたところで聞いている夏洌らにも、その迫力は効果抜群だ。動くに動けない。
《おわかりか、事主殿》
蛟竜の眼光がすこしやわらぐ。蛟竜の眼光から解放された仁琥は、多喜次に駆け寄った。多喜次が伸ばした手に抱きつきながら、控えめに蛟竜を見る。
「…あの、蛟…。ぼくね、無理をした訳じゃあ、ないんだよ。夏洌さんにも付いてきてもらったし、竜鯉にも助けてもらったし…。危なくなったら、夏洌さんに負ぶってもらって、逃げてくる気だったんだよ。だからね…」
蛟竜の顔色？　を伺いながら言う仁琥に、蛇の異形は笑んだ。
《これじゃあ、拙が事主を苛めているようだ。…お分かりならば、よい。今後も、ご自愛なされるように》
はい、と消え入りそうな声で頷いた仁琥に、満足したらしい蛟竜は細い尾を振り姿を消す。途端、しゃん、と鈴のような音がした。
昨日退治した異形の音に似ている。夏洌は顔を上げた。

「…そういえば、しゃんしゃん火は…？」
夏洌の言葉に、番頭は至極不機嫌そうに、店の奥に引っ込む。待つことしばし。
「しゃんしゃん火なら、大人しく異形本に記されましたよ」
店の奥から戻ってきた多喜次の手には、小さな鈴が握り込まれている。仁琥は手を伸ばして、鈴を受け取った。
「ちゃんとご供養した方がいいね。寺院に頼もうよ」
「もちろんです。鈴夜を遣いにやるつもりです」
多喜次の言葉に、鈴夜はぎくり、と顔を上げた。目を泳がせた後、観念したようにため息をつく。
「わたしが昨日、店にいなかったからですか？」
「それ以外になにがある？」
「夏洌か正吉に行かせたら…」
「夏洌と正吉には、お堀でお江与媛の櫛を探させる。替わるか？」
「いえ、寺院に行って参ります」
言うが早いか、鈴夜は仁琥に手を伸ばした。鈴を、と言う鈴夜に、仁琥は頷いて鈴を渡す。では！　と言い残して、鈴夜は駆けだした…否、逃げ出した。
「…お堀で櫛探しって…」
「してもいいんですか？」
正吉と夏洌は不安そうに番頭を見る。番頭は黙って行灯とほっかむりを差し出した。
つまり、隠れて探せってことですか……。

第三章〜異形屋の裏2

草木も眠る丑三つ時。都の中心、お城のお堀に不審者二名。雨で水かさが増していて、水もけっこう冷たい。

不審者二名は、青白い発光体と朱い発光体を従えて、ひたすらに網を動かしていた。

「夜は寝るためのものなんだけども…」

「同感です、夏洌さん…。よっしょ、っと」

ぼやく夏洌に正吉は同意しつつ、網で堀底をあさる。網が重くなったところで、引き上げた。

「櫛、櫛、櫛…、櫛はなし」

「おー、二朱銀だぁ」

隣で夏洌の声がする。あまり感慨の入っていない声に、微かに同情した。昨日も寝ていないのだし、けっこうきついのではないか？

小さくため息をつくと、しゃん、と青白い発光体は気遣うように音を発した。正吉はほんわか笑って網を水に戻す。夏洌には遊び火が憑いている。

「ねーぇー。あったー？」

岸から女声が響く。今回の依頼…者？　…異形？　のお江与さんだ。整いまくった面立ちに、心臓の鼓動が早くなるが、自分たちに向かってくる首に情緒は台無し。

《ろくろ首殿、方々は忙しい。お話ならば、拙が》

お江与さんの隣に伏せた闇の犬が、牙を見せながら笑った。お江与さんは残念そうにうなだれるが、犬の差し出したお茶に顔をほころばす。

「ずるっ。俺たち、冷たい水の中に…」

「私たちも欲しいんですけど…」

小僧たちの文句の声を無視して、お江与さんと送り犬は笑いながら世間話をしている。

ひきひき、と水もしたたる小僧たちのこめかみに青筋が浮かぶ。良いじゃないか！　お茶ぐらい！　こうなったら、なにがなんでも早く探してやる！

凄まじい勢いで網を動かし始めた二人を見て、送り犬は苦笑した。犬形なのに…、どうやって笑うのかしら？

お江与さんは薫り高いお茶を口に含みながら考える。じつに、表情豊かな異形だこと。

「異形屋は、いいところのようね」

闇に紛れるように押し出された声に、夏洌は手を止めた。

「なんでです？」

「あら、やだ。聞こえちゃった？　ごめんなさい。忘れてちょうだいな」

恥ずかしそうに口許を隠すお江与さんに、正吉も顔を向ける。夏洌と正吉の目線を受けて、お江与さんは苦笑した。

「気になっちゃうわよね。ほら、早く探してくださいな。あたしの大切な櫛をね」

「大切って、なんでそんなに？」

夏洌は網で水底をあさりながら、お江与さんに尋ねた。お江与さんは少し迷うように首を傾げた後、お茶を飲んだ。そして、おもむろに口を開く。

「あたしたち異形って、嫌われるわ。――人智を越えたものだから、それを畏れるのかしらん」

そこで息をついて、お江与さんは続ける。

「でもね、仕方ないと思うのよ。異形って形も人とは違うのが多いでしょ。あたしみたいに、見てくれは人間ってこともあるけど…。人と同じ生活してね、人と同じように暮らしてる。

そりゃあ、悪さをする異形もいるわ。それは本当に一部なの。まぁ、実際に害があるんだから、嫌われても仕方ないのかなぁ、って思うわ」

それは、と正吉は言葉に迷う。夏洌も迷っていたが、不意に首を

振った。
「違う、と思う。だって、異形たちだって、ふつうに暮らしてるんだろ。そりゃ、俺だって異形の話を聞いたときは、嫌だって思った。それは、人を喰ったりする存在への恐怖からだ。人を喰う狼が嫌いなのと同じ。あ、ごめん、送り犬。
異形には異形の暮らしがあって、俺たち人間には人間の暮らしがあって…。俺は畑を耕す派だったし、里宿の大爺は狩りをする派だった。自分と同じ生活をしてないから恐いなんて思ったことない。里宿に来る占い婆は虫を食ってたよ！　まぁ、勧められたときは焦ったけど…。でも、占い婆を恐いって思ったことはないし…。あー！　なんて言えばいいのか、わからんっ」
一息に言い切った夏洌は、頭を掻こうとして思いとどまった。手は泥だらけだ。銭湯も終わってる時刻。泥だらけの頭で店番は出来ない。
とにかく、と夏洌は言った。
「俺は異形が異形だからって、恐いとは思わない！　むしろ、楽しくなってきた」
かっこよく決めたい、と思っていた夏洌は、上手く言えないもどかしさを持て余す。静かに網で水底をさらっていた正吉が、小さく呟いた。

「私は、異形よりも人の方が恐い」

しん、と静まりかえった。赤と青の異形火たちが燃える音だけが響く。
「平気な顔をして、他者を蔑む人の心の方が、私には恐ろしい」
無言で己を見つめる五つの視線を感じたのか、正吉ははっと辺りを見回した。夏洌は網からしたたる水もそのまま、お江与さんは両掌に包んだ湯飲みもそのまま、送り犬は紅い舌を出したまま。
「あ、すみませんっ」

「良いんだけど…。正吉さんって、何かあったのか？」
「そうよ！　あたし、気に障ること言ったかしらっ？」
《溜め込むのは、得策ではありませんよ》
　口々に心配され、正吉は赤くなった。あわてて言い繕う。
「違うんですっ。ただ、その…何というか。え…っと。ほら、人って、その人が嫌いでも笑顔で接しますよね。でも、裏側ではその人を嫌っていて…。なら、最初からおまえを喰うぞっ！　って襲いかかってくる狼のほうが、」
　途端、ぐるる、と送り犬が唸った。目は爛々と輝き、白い牙は月光を受けて煌めく。正吉は飛び上がらんばかりだ。
「わわわわわっ。すみませんっ、送り犬っ！　隔意があったわけじゃなくてっ、そのっ」
《知っています。そのように評してもらえるのならば、拙ら狼族は嬉しい。まぁ、人を好んで喰うのは、外れ存在（はずれもの）だが》
　送り犬は笑みを作りながら、正吉の頬をなめた。恐い作りの犬の顔が耳の側にあるのは、非常に恐ろしいが、正吉は甘んじてそれを受ける。
「ありがとうございます。あの…外れ存在とは？」
　照れた笑みを浮かべながら正吉が問うと、送り犬は嫌そうな表情を作って見せた。正吉が怯えるので、表情を和らげたが、なにか引っ掛かる顔つきだ。
《拙らは、山の神に仕える。人を喰らうのは、山の神の意志に背く行為だ。穢れを嫌うゆえな、山の神は》
　異形本に入り、人と住まうことを選んだ狼は、複雑な表情を浮かべる。己の心の整理が付かないようで、頭を振った。
「正吉さん、早くお江与さんの櫛を見つけない？　上手くいったら、夜鷹蕎麦にありつけるかもだし」
　夏洌が顔を泥だらけにして、網を振りまわす。正吉の顔にも泥が飛来して、正吉は顔をしかめた。送り犬の足も汚れたらしい。ぎゃっ、と小さく吼える。

不器用な気遣いだわ。

お江与さんは少しだけ笑んだ。不器用だけど、ちゃんと人を気遣ってる。人のそういうところが好きだ。ひょっとしたら、己はあの人のそんなところを慕っていたのかも。

「頑張ってちょうだい！　見つけてくれたら、お蕎麦驕るからー」

喜ぶ声がお堀の中から飛んできた。あの年頃の人は、よく食べるから。

お江与さんの横の送り犬が、耳を倒して寝ころんだ。

異形に蕎麦を驕ってもらえる！　初めての体験に、夏洌は声を上げた。一際力を入れて水底をあさると、不意に感覚に引っ掛かるものを感じる。

「なんだ…？」

視覚に違和感を覚えて、頭を振った。目の奥、頭の奥が鈍く痛む。

一間ほど離れたあたり。水の底に何かあるように思える。

でも、なんで？　月明かりは一間も先を照らしてくれない。遊び火の赤い炎は抑えられ、夏洌の周りだけを照らす。

「遊び火。あそこに、なにかある」

きゅう？　と鼠の声で鳴いて、遊び火は夏洌の指さす辺りを照らした。黒々とうずくまっていた闇が退き、赤くうねる水が現れる。水底は見えそうで見えない。

「なんか、光ってる」

水の底に沈む光。その光に導かれ、夏洌は水をかき分けた。屈んで手を伸ばす。耳に水が入るが、我慢だ。

「ん。あ、もうちょっとこっちだ」

夏洌は手探りで、水底をあさる。つい、と堅い感触を指が捕らえた。

「お、これだ」

堅いものを握り込み、顔を上げた夏洌は瞠目する。自分の掌に収まっているのは櫛。半月状の黄楊の櫛だ。飾りっ気もないが、お江与さんの櫛だろう。
「あったぁっ！」
夏洌が声を上げると、正吉が顔をこちらに向けてきた。
「ありましたか、夏洌さん」
「おう、あったよ！　これだろう？　お江与さん」
夏洌と正吉は、櫛を手に岸に上がる。待ちかまえていたお江与さんは、嬉しそうに手を叩いた。
「これよ、これ！　あったわ！　あの人にもらった櫛…」
最初は喜んでいたが、すぐに安堵の声に替わる。岸に座り込んだお江与さんのとなりで、送り犬が手ぬぐいを咥えていた。
《身体を拭かれよ。風邪を引いてしまう》
「ありがと、送り犬」
「やさしいな、送り犬は。あれ？　そういえば、なんで送り犬？」
正吉も夏洌の問いに、首を傾げる。送り狼、ではないのだろうか。疑問を口にすると、送り犬は闊達な笑み声をあげた。
《先代様がお付けくださった名です。送り狼のままだと、人は怖がるだろうから、と。犬、にしておけば、聞かれても『いえ、これは送り犬。狼ではありません。いやー、人違いならぬ、異形違いですよぉ。あはは』と答えられるから、だそうに》
「……人違いならぬ」
「……異形違い」
なんだかなぁ。正吉と夏洌は座り込む。その姿を見て、送り狼ならぬ、送り犬がからりと笑った。

夜の町を歩くのは、ずいぶん勇気のいることだ。
自分の影ですら、妖怪に見えてくる。

春夏冬町を流れる鹿堀にかかる橋の近くまで来た頃だ。風にたなびく柳が恐い。そう話すと、送り犬は楽しそうに尾を振る。
《夏洌殿のような方ならば、送りがいがあるというもの。拙が付いている故、野犬などは襲っては来まいよ》
「いや、野犬が恐いんじゃなくて…。柳が恐いって言うか…。なにか、声聞こえるし」
「声？　そんなの聞こえませんよ？」
夏洌の言葉に、不審そうに正吉は眉を寄せた。
「大丈夫よ。ただの闇童の声だから」
《左様、気のよい奴らだ。蕎麦を分けてくれ、と言いに来るやもしれぬ》
お江与さんと送り犬は聞こえているらしい。不審なものではない、と夏洌を安心させようとしてくれた。
しかし、それが一層夏洌を不安の淵に追いやる。
なんで、正吉には聞こえないんだ。俺よりも、異形屋に長くいるのに…。
不安に思って腕をさすると、わずかに鳥肌が立っていた。そう思った途端。夏洌の耳に声が滑り込んでくる。
――お城の家鳴に聞いたんだ
――太守は床に就いている、という
――そう。でも、お家を継げる御子は闇狂い
――太守の家で。闇狂いとは哀れな
――もう一人の御子は、追い出され。あぁ、ほんとうに哀れな
――あぁ、ほんとうに哀れな
気分が悪い。耳に入ってくる声は、声ではないのに。正吉が心配そうにのぞき込んでくる。
――人間は愚か。平気で他者を潰す。己のために、穢れすら厭わぬ
――人間は厭わしや、厭わしや
闇狂いとは、なんだろう。とても嫌な、響き。そう思った途端、夏洌は吐いていた。夕飯はにぎりめし一個だった。胃の中は空っぽ

らしく、焼け付くような胃液だけが戻ってくる。
「大丈夫ですか！？　夏洌さんっ」
「ちょいとっ、しっかりしなさいよ」
《ばふぅ、ばふぅ》
なんで送り犬は喋らないんだろう、と思っていたら、知らない声が聞こえてきた。今度は、人の声。たぶん、蕎麦屋台のひと。
天ぷらの良い匂いもしてる。天ぷら屋も来てるんだ…。
「大丈夫か！　兄ちゃんっ」
「ほら、白湯だ。ゆっくり飲みな」
《ばふっ、ばふばふっ。ぼふぅっ》
重たい犬の足音を最後に、夏洌の記憶はとぎれる。
あぁ、異形ってなんか……畏怖(こわい)い。

第四章〜狐と狸と異形の匂い

重たい……。とにかく重たい。

夏洌は朦朧とした意識を総動員して、その重たさの原因を探った。

自室として与えられている部屋。吹けば飛ぶよな薄布団の下で、夏洌は異様な重さで目を覚ました。

「いったい、なんだよ……」

いったいなにが、自分を圧迫死させようと目論んでいるのか。夏洌はともすれば遠ざかる意識を何とか保ち、必死に首を巡らせる。

異形屋に来てからいろいろあったが、なにかに恨まれるようなことはしてない……はずだ。第一、仁琥がいるのに邪気を持った異形が入ってこられるか？　否、入ってこられるわけがない。

しかし、そろそろ限界だ。このままじゃ、異形に押しつぶされて彼岸に渡らなければならなくなる。そんな死に方は、できればしたくない。

だから、この胸の重さには退いてもらおう！

夏洌は力を入れ、半身を起こす。すると、案外簡単に起きられた。おい、今までの重さはなんだったんだよ。目を据えた夏洌の耳に、異形の悲鳴が入ってきた。

《あんぎゃーっ！》

ついで生じたのは、小さな落下音。生命の危機から脱した夏洌は、その悲鳴と音に、目を丸くする。そして、それ以上にその異形の姿に。

「……異形？」

夏洌の視線の先で、その異形は頭をこすっていた。とてつもなく奇っ怪な異形である。

大きさは小さな狗ほど。しかし身体は熊で、中途半端に長い鼻は象のよう…。恐ろしげな爪は虎だろうか？　そのなかで、優しい色を湛える瞳が目を惹きつける。それでも、寄せ集めの印象はぬぐえ

ない。夏洌には、この異形の心当たりがある。
「……噂に聞く、獏か？」
夏洌の呟きを拾った異形は、はっと顔を上げた。黒くつぶらな瞳が、すぐに涙で濡れてくる。
《よかったですっ。夏洌様！　お目覚めになってっ！　あっ、事主様にお知らせに》
忙しそうな異形――獏は、ぽけらっとしている夏洌の前で前脚を振った。
《夏洌様～？　もしもし、大丈夫ですか？　ややっ。呆然としていらっしゃる！　大変ですっ》
獏のあわてように、夏洌は口を開けっぱなしだ。そして、一言。
「かわいい……」
《はい？》
「お前、かわいいよ！　抱きぐるみみたいだ！」
獏はその口をぱっかりと開く。赤い舌が覗き、鋭い牙が見えた。そして、視線を彷徨わせる。困ったように首筋を掻く獏の毛は、たしかに柔らかそうだ。抱き上げたら、すんごく気持ちが良いに違いない！
「最高だぞ、獏！」
夏洌はなにを思ったのか、獏を抱き上げようと手を伸ばした。この異形が、重たさの原因なんてことは、頭の彼方に吹っ飛んでいる。抱き上げて、一拍。
「おっ。重もてぇっ」
《あぎゃー。夏洌様！　夏洌様っ。しっかりなされませぇっ！》
夏洌様～～っ！　と獏の声が部屋に木霊する。獏を抱き上げ損ねた夏洌は、自分からあの重さに悩まされることになっていた。
「ぐるじ…」
夏洌様、夏洌様、夏洌様！　大混乱に陥った獏を救ったのは、幼い声だった。
「あ、おきたんですね、夏洌さん」

仁琥が障子から顔だけ覗かせていた。夏洌とその上に乗った獏を見て、目を丸くしていた。しかし、すぐにあわてて多喜次を呼びに走った。
「多喜次っ！」
仁琥の声がかろうじて耳にとどく。しかし、仁琥が戻ってくる頃には、獏に伸された夏洌がいた。

すみません、と獏は小さく小さく縮こまっている。茵の上に座っている夏洌も似たような格好だ。
「あの…」
「異形屋の奉公人に、莫迦で鈍い奴はいらんのだ」
「すみませんっ」
多喜次のお説教を受けている……の図。夏洌と獏は、大人しく座り、番頭の怒りの嵐が収まるのをひたすら待っていた。仁琥が気の毒そうな視線を向けてくるが、なにも言わない。心配したんです、とその視線が訴えれば、やはり夏洌は縮こまる。
「莫迦で鈍ちんで、どうしようもないが、仁琥様がお気に召している。けっこう役に立っているのも、否めない。というわけで、だ。今回は不問にする」
「いいんですかっ？」
多喜次の口から、思わぬ言葉が飛び出し、夏洌は顔を上げた。獏も心なしか嬉しそうな顔をしている。そうだ、と番頭は頷き、仁琥を見た。
「これでいいですね、仁琥様」
「うん！　夏洌さん、もう無理はしないでくださいね」
うるうると仁琥に見つめられ、夏洌は自然と頬が緩んだ。夏洌の横にお座りする獏を撫で、懐から一冊の本を取り出す。仁琥は本を獏に近づけると、笑う。
「獏、ありがとうね。お疲れ様」
「そういえば、獏はなんで俺の上に？」

夏洌が首を傾げると、獏は上目遣いに仁琥を見上げる。仁琥は頷くと、本を床に置いた。
「夏洌さんの“凶夢”を食べてもらいました」
「凶夢？」
「はい。悪しき夢です。夏洌さん、倒れて帰ってきてから、うなされてたんで。だから、獏を呼んだの」
まさか、上に乗るとは思わなかったけど。仁琥は続きの言葉を呑み込んだ。そのかわり、多喜次が獏を射止める。
「なんで、夏洌の上に乗った？」
多喜次の声は冷たい…気がする。だから、怒られるときはとても怖いのだ。獏は身を縮め、頭を下げる。
《相済みません。夏洌様から、妙な匂いがしたもので…》
匂い？　と一同は異口同音に尋ねた。獏は首を縦に振ると、前脚で夏洌を指す。
《奇妙な匂いです。夏洌様の中から漂っております。その…わたくしどもの匂いにそっくりなのです。それが、とても畏怖ろしくて…》
獏はそれだけ言うと、床に置かれた本の中に滑り込む。すみません、と本は一度だけふるえた。
「守り狐も同じことを言ってたね。なんだろう？」
「それは、おいおい分かってくるでしょう。今、仁琥様が悩んでも仕方のないこと。異形のことは異形がいちばん分かっている。獏や守り狐、貔貅（ひきゅう）にも分からないのであれば、あたしら人間には分かりませんよ」
多喜次は仁琥の背を優しく叩いた。そういえば、俺もやってもらってたなぁ、と夏洌は里を思い出す。
立ち上がりかけた多喜次だが、なにかを思い出したようで、片膝をついた。大きな右手が、一度懐に消える。次に出てきたとき、その手は不思議な刀を握っていた。
「筆架叉だ。異形屋はいろいろ危ないことも多い。仁琥様を守るため、多少の怪我を惜しむなよ」

「……わかりました」
仁琥はなにがなんでも守れ。その言葉の裏にある多喜次の思惑を感じ取り、夏洌は微笑んだ。
「仁琥、心配をかけてごめんな」
夏洌の言葉に、仁琥は多喜次の後ろに隠れる。頬を赤く染め、ふいっと顔を逸らす。異形本を拾い上げると、裏屋を出て行った。
多喜次はその後ろ姿を見つめ、微笑んでいる。
「じきに雨だ」
重くたれ込めてきた雲は、すでに黒い。水の臭気が辺りに満ち、あの夢の続きを思い起こさせる。
「……どうせなら、あの夢も持っていってくれればよいのに」
小さな呟きを拾った多喜次は、夏洌の頭をかい繰り回した。滅多にない行動に、夏洌は瞠目する。多喜次はすぐにそれをやめると、足早に裏屋を出て行こうとする。夏洌はあわてて、それを止めた。
「あのっ」
「ん？」
「ご心配をおかけしました」
深く頭を下げた夏洌に、多喜次は小さくあごを引いた。
「せいぜい、筆架叉の腕を上げておくんだな」
返された言葉は存外に温かい。不器用ともとれる優しさを受けて、夏洌はもう一度深く頭を下げた。
ぽつん、と最初の一雨が降ってくるまで、そう時間はいらない。

第四章～狐と狸と異形の匂い（後書き）

悪い夢を食べるという獏です。良い夢は食べないんでしょうかね？凶夢は不味そうなんですけども。獏の画は非常に可愛くなかったので、可愛くしてみたのですが、いかがでしょうか。

第四章〜狐と狸と異形の匂い2

とある神社の堂内。積み上げられた蜜柑箱の上に乗って、力説を振りまく姿があった。

「もう…。もう我慢の限界じゃぁっ！　あんの莫迦タヌキどもっ。我らが大君の気配が日々、薄くなりつつあるのは、あんの莫迦タヌキどもの仕業じゃぁっ。諸共！　用意は良いかぁ！」

長老の言葉――叫びに、一同は鬨の声を上げる…わけではなく、三者三様の違いを見せた。

「えー。なんでそんなことするんっス？」

「めんどいじゃないっすか」

「あんな性根の腐りきった野郎のために、なんで命（タマ）はらにゃならんです！」

文句たらたらなのは、比較的年若い連中。

「むぅ…。まあ、なぁ」

「世話になっとるっちゃあ、なっとるし」

「世話になってないっちゃあ、なってない」

迷うそぶりを見せるのは、団塊世代の方々。

「おぉぅう！」

「やったるわーーーい」

「莫迦タヌキども！　首を洗って待っておれぇい」

長老の叫びに応えるのは、じじ様世代のお歴々。

「……おぬしら…ぁ」

一同の賛成を得られなかった長老は、震える拳を握りしめた。綺麗に手入れされた自慢の白ひげが揺れる。

「我らが大君に受けたご恩、忘れたかえ……っ」

長老の言葉に、一同は記憶をさらった。思い起こされる“ご恩”の数々。あーんな事やこーんな事…。もはや、ご恩と呼べるのだろうか？　というような仕打ちの数々。

「ご恩に報いねばならんというにっ」
「……」
ご恩。ごおん、ゴオン、ゴォオン…頭の中で反響する“ご恩”。
一同が遠い目をしたとき。静かな場を破る声が妙に間延びして届いた。
「たのもー。たのもー」
「あ、はーい。いま行きますねぇ」
対応役の青年が戸口に飛んでいく。
「あの“ご恩”はひどかったな」
「滋養強壮にいい温泉と騙されて氷水に入らされたことか？」
「違うだろう。きっと、ホレ薬と騙されて、笑い茸を食わされたことではないか？」
「おれっちは、乙女衆らがぬか漬けが好きと聞かされて、送ったら恥をかいたぞっ」
その間、堂内は“ご恩”について話し合う声に埋まった。しかし、その声も飛んできた言葉に凍り付く。
「決闘状っ？」
宿敵莫迦タヌキたちが送りつけてきた決闘状。…内容はさておき、堂内は恐慌状態に陥った。盆踊りを始める一派。漢詩を詠う一派。干し柿を祭る一派。意味不明な行動をする狐らが多いなか、長老狐が怒鳴り上げた。
「たわけめーっ。こんなもの、熨斗つけて送り返してやれいっ！」
長老は箱の上で拳を大きく振る。長老の言葉に、堂内は沸き立った。
海苔を持ってくるもの。糊を抱えて走ってくるもの。軒板を抱えて走ってくるもの。
彼らは熨斗の意味を解していないらしい。

＊＊＊

手を伸ばせば掴めそうなぐらい近い空。灰鼠色の雲が一面を覆っていて、そこから絶え間なく雨が降ってきていた。
瓦に雨が当たり、楽しげな音がする。縁台に座った仁琥は、楽しそうに団扇を扇ぐ。新し団扇は、真白だ。なにを描こうか、と楽しげな会話を交わしている。
「ねぇ、旱母（かんぼ）。なにを描こうかなぁ」
《そうねぇ。紫陽花なんて、どう？》
仁琥の向かいに端座した少女は、悪戯っぽく笑んだ。つい、と伸ばされた指の先にあるのは、青みの強い紫陽花。
「うーん。夏に使うんだよ？」
《じゃあ、金魚？　あ、花火も良いわね。今年は大川に見に行くの？》
「ううん。今年も行かないと思うよ」
悩む仁琥に、少女は困ったように微笑んだ。異形屋の庵に現れる少女が、ひとであるはずもない。
朱縮緬に高島田髷。ぽってりと塗られた口紅は、高価なものらしく艶やかで鮮やかだ。悪戯っぽく引き上げられた口端が、どこか心を捕まえて離さない。いわゆる、お禿の格好だ。
その名を、旱母（かんぼ）。旱神（ひでりのかみ）に仕える神霊だ。

悩む仁琥と、それを見守る十二、三の少女。ぱっと見れば、仲の良い姉弟の図。
《ね、あたしが描いてあげようか？》
「旱母が？　なにが描けるの？」
《そうねぇ。龍とかどう？》
「あ！　ぼく、描くの決まったっ」
《……人の話を聞かないのは、先代とおんなじね》
頬を引きつらせた旱母は、ため息をついた。しかし、楽しそうな仁琥を見て、表情を改める。手元を照らしてやろうと、仲間を呼んだ。

《ね、金烏（きんう）。すこし提灯になって》
願意に応じて現れたのは、三寸ほどの烏……ではなく九官鳥。火の粉を盛大にまき散らしながら、仁琥の手元に降りる。
手元が明るくなり、仁琥は顔を上げた。目があった鳥形異形に微笑み、金烏の喉を撫でる。
《何を描くの？》
「ひみつだよ！」
《あら、あたしには見せてくれないの？》
「んー。じゃあ、完成したら、旱母に一番に見せてあげる」
あら、嬉しい、と旱母は破顔する。それでも、覗くことはしなかった。
小さく小さく嘆息して、大人しく座り続ける。時折、金烏の羽繕いの音だけが響く。それでも、暇なのは変わりない。旱母は庭を見回した。

空から降ってくる雨は細く、まるで宙に静止しているようだ。
大輪の紫陽花は多く、その影にのぞく黄色い実は梔苺だろうか。夏を待つ朝顔は、寂しく雨に打たれている。
庭から子供に、目線を転じた。熱心な子供は、団扇をのぞき込むように描いている。のぞき込んでいるので、手元がどうしても暗くなってしまう。
人間は、あたしたちと違うのだから……、と旱母が気にするほど。
（灯りを用意しようかしら……）
礼儀正しい異形は、優しい配慮を見せる。庵のなかから、行灯を引っ張り出そうとしたとき。
「仁琥」
母屋……というより店の方から、聞き慣れた小僧の声が届く。声のするほうを見れば、灯りがこちらに向かってくる。
夏洌の姿が見えると、旱母はすこしだけ眉を寄せた。
（……獏の言ったこと、ほんとだったんだ。あれは、ひどいわね）

“異形の匂い”が漂う程度じゃなく、まさしく“異形の匂い”の根源。しかも、畏怖を誘う匂いだ。
そこまで考えて、あわてて微笑んだ。隣に座った仁琥が、不思議そうな顔をしているから。
「すこし、来て欲しいんだ。厄介なお客が来たらしくて……。仁琥？」
燈火片手に廊下を渡ってきた夏洌は、縁台に出ている仁琥を見つけて足を止めた。仁琥の前に座り込んで、首を傾げる。
「あれ？　なにを描いてるんだ、仁琥」
「多喜次から、夏用の団扇をもらったの。だから、お絵かき。……厄介なお客さんって、どんな……ひと？」
夏洌の視界からさりげなく団扇を隠すと、仁琥はすこし眉を寄せた。店の方に目線を転じて、首を傾ぐ。その仕種が愛らしくて、夏洌は軽く頭を振る。少し迷ってから、告げた。
「人間じゃない……と思う。二人組だ。ひとりは、ひょろりとした白髪の美青年。もうひとりは、どこか凡庸さの否めない好青年」
「ぼんよう？」
「ぱっとしない感じ」
あぁ、と仁琥は頷く。団扇を旱母に渡すと、部屋の中に引っ込んだ。なにやら箪笥をあさっているようす。しばらくすると、羽織りを引っ張り出してきた。
「行ってくるね。旱母」
《あら、もう行くの？　さみしいわ、あたし》
「じゃあ、旱母も行く？」
《……遠慮してくわ。多喜次が怖いから》
お禿異形の言葉に、夏洌は笑みを零す。あの強面番頭の支配は、異形たちにまで及んでいるらしい。
「じゃ、お留守番よろしくねー」
手を振る仁琥に、思わず手を振り返す旱母。小僧が口に笑みを湛えているのを見て、赤面する。にらみ返せば、ますます微笑まれた。

《一生の不覚……っ。あんな小童に笑われるなんてっ。……あれ》
仁琥と夏洌の姿が、店に消えてからだ。旱母は手にした団扇に視線を落とす。
《変わった趣向の団扇ねぇ。どこで変人気質になっちゃったのかしら？》
真新しい団扇は、楽しげな異形の似姿で溢れている。金烏と旱母も、ちゃっかり描かれているのが嬉しい。
《さぁて。お留守番の間に、仁琥のお部屋を片付けちゃいましょ》
朱縮緬の着物を袖まくって、旱母は庵を見回す。翡翠の簪が、しゃらんと鳴った。

常にはない二人組に、異形屋店内はずいぶん狭くなったように感じられた。
一方はひょろりと細身で、白髪の美青年。もう一方はなんとも凡庸な青年。しかし、両方とも好印象を持たせる風体だ。
「つまり狸さんと狐さんが、またまた対立して、喧嘩しそうになっているから止めて欲しいんですね」
仁琥の確認に、訪れ人の二方はすこし迷ってから頷く。ひょろっとした白髪美青年は、小さく頭を下げた。
《なんて言うか、喧嘩、なんですかね》
《我々、調停者の言うことも聞いてくれんのですよ》
《さよう。狐殿らが、狸一族に言いがかりをつけてきて…》
《…言いがかり？　桜の空狐殿がいなくなったのは、そちらの金長殿に会いに行ってからであろう》
《だから、それこそ言いがかりというのだ。金長様は、いつものようにお帰した、と仰っておったぞ》
《なにを言うか。ならば、なぜ空狐様がお戻りにならん？》
《こちとら、知ったこっちゃない》
言い切った白髪（きつね）美青年に、凡庸（たぬき）好青年は顔を赤くする。なにか言

おうと口を開いたが、怒りが勝っているようで声にならない……らしい。
座布団に収まった仁琥は、小さく息をついた。その嘆息は、さっそく多喜次の耳に入ってしまい。
「すみませんが、わたくしどのは忙しい。喧嘩ならば、余所でやってもらいたい」
「そうそう。若もお疲れでしょうし」
「私は、夕餉の支度をしなければ」
「仁琥、庵でなにかやってたよな？」
奉公人に言われ、異形屋主人はすこし考える。たしかに、お腹はちょっと空いた。虫封じのお八つはだいぶ前に食べたっきりだし、庵で描いていた団扇も気になる。
でも、と仁琥は独りごちた。そっと番頭の顔を窺い見る。その顔を見れば、切り出す決心がつかない。
「仁琥？」
優しく問われてやっと、切り出せた。
「ぼくに出来ることなら、やります」
「仁琥様！」
多喜次が声を荒げた。その声に飛ばされそうなほど縮こまった仁琥は、それでも顔を上げる。
「ぼく、お二方の喧嘩を収めます。だから、」
途中で言葉を切る。どのように継ごうか、考えてから。
「解決できたら、ぼくのお願いを聞いてください」
《は？》
《へ？》
さすがの狐と狸も、おもわぬ“対価”に目を瞠った。すこしのあいだ、考える。
その間、仁琥は多喜次の満面笑顔にさらされていた。
「なにを言ってるんです？　お代はきちんと貰わないといけません。あたしたちだって、食べるんです。食べるためには、お金がいる。

お金は稼がないといけない。
異形屋は、ひとの客より異形の客のほうが多いでしょう？　異形から稼がないと、ご飯が食べられませんよ。いいんですか？　美味しい豆腐が食べられなくなっても」
「えっ！　やだっ」
「でしょう。だからですね、」
有能な番頭が言いつのりかけたとき、高貴な異形はにっこり笑う。
《もちろん、お代は払いますよ》
《えぇ、これっくらいでどうでしょ？》
狸が袂から出したのは、小さめの算盤。ぱちぱちと珠を弾いて、金額を出す。
《狐殿らと折半して、これっくらい》
「え。えぇえっ？」
示された金額には異形屋一同、目を瞠る。そこには、なにげに一家五人が一年食べていける金額が。
《足りませんよね…》
《狸殿らは、みみっちいのだ。ケチるべき所ではない》
そう言って、さらに珠を弾く狐――の化けた白髪美青年。
「金三十両っ！」
もはや、夏洌とは縁遠い数字。鈴夜も瞠目している。
蕎麦が一八文のご時世。金三十両とは、破格の金額だ。
ある意味、恐慌に陥る異形屋のなか。平静を保ったふたりは――仁琥は金額が分かっていない――恐ろしく静かだ。
「やらせていただきましょう」
即答したのは、多喜次だった。もちろん、他の奉公人に異論があるはずもなく。
「ぼくたちに、お任せください！」
異形屋主人、仁琥は右手を高々と挙げた。

第四章～狐と狸と異形の匂い２（後書き）

ちなみに蕎麦一杯の値段は４８０円です。
一両の値段を調べていったら、なぜかバッラバラ。変動が激しかったようです。だから、ご飯の値段も大変動！

第五章〜異形たちの問題

夜は静かだ。
静寂を愛する神さまが統治しているから、とかいわれているが、夏洌には信じがたい。
すこし感覚の鋭い者なら、多少のざわめきを聞き取れるかもしれない。異形の姿をとらえることが出来るなら、なおさらうるさいだろう。
《なあなあ。絳葉稲荷の鳥居が付喪になったらしいぞ。今度、遊びに行ってみようぜ》
とか。
《主上に仕える何某の貴族が、椛の巫女に横恋慕しちまったらしいじゃん。まあったく、人間ってやつはよぉ》
とか。
《南天神とこの神主の末孫が元服したらしいなぁ。からかいに行ってやらねばな！》
などなど。
夜の都大路は、情報通な異形たちのささめきに満ちていたりする。
異形たちを感じることのできる一部のものたちにとっては、だが。一般的な人々にとって、やはり夜闇は畏怖の対象であり、静寂なものだ。
異形が視られる自分にとって、もはや静かな夜は来ないのだろうか。　そう考えていたら、腹が立ってきた。
《おー。おまえが夏洌だな。異形屋の新入奉公人だってな！》
ため息をついた夏洌の肩に飛び乗ったのは、ウサギっぽい異形。夏洌がなにも言わないでいれば、足元を転がっていた丸い異形が頬を膨らます。
《無視すんなよぉ。おまえもさぁ、俺らとおんなじ匂いの持ち主なんだしぃ。あ、こら！　蹴飛ばすなよっ》

「あのな、俺はこれからひとりで異形退治……じゃなくて、狐狸の喧嘩を収めに行くんだ。精神集中させてくれ…」
肩を落とした夏洌に、小さな異形たちは同情を一割ほど含んだ目線を向けてきた。ちなみに、残りの九割はからかいだ。
《あの異形さんたち、まーた喧嘩してんのか。なんちゅうか、年中行事だな》
《火事狐狸合戦は拓都の華ってやつ？》
《ならなら、小稲荷もいれようぜ》
《おまえ、頭良いな！　江都三名物ー、とか言っちゃったり？》
「……おまえら、うっとうしいぞ」
きゃらきゃらと笑う異形たちに、夏洌は肺を空っぽにするぐらい、息を吐きだした。腐りかけて、柔らかくなった橋を踏み、危なげなく渡っていく。
橋の先には、天神社のご灯明が煌めいている。

春夏冬町から二町ほど離れたところだ。
拓都もここまでくれば、田園が目につきはじめる。国主のお膝元とは思えないほど人に害なす異形も多い。ちなみに、夜盗・強盗の心配も大。
狐と狸の喧嘩現場は、ここからもうすこし行ったところで勃発したらしい。都の中心部から離れているのは、彼らなりの配慮だろう、と番頭多喜次が言っていた。
場所の配慮をするぐらいなら、最初から喧嘩しないで欲しいなぁ、と夏洌は思うのだ。そんなことをつらつら考えていれば、気のよさそうな提灯お化けが、眉根を寄せた。
《しっかし、新人がひとりで狐狸退治とはねぇ。あたしゃ、心配でならんよ》
提灯お化けが言えば、小鬼数匹（家鳴ではないモノ）がけらけら笑う。
《どうせ、強番頭を怒らせたんじゃないの？》

《ひょっとしたら、坊に嫌われたのやも》
《鈴夜に押しつけられたんじゃね？》
《どれも、真実味満載ですなぁ》
「……おまえら、ほんとにうっとうしいよ」
夜闇をかき分ける提灯を掲げて、夏洌はひとり、西ノ橋を渡っていく。
いったい、なんで新人の夏洌ひとりが異形退治に出かけることになったのか。噂好きの異形たちの憶測が、とんでもない噂に変化するのは、もう少し先のこと……。

《おぬしら、いい加減にいたせよ》
ぬう、と闇から出てきたのは巨きな狼。二股の尾を振りつつ、大あくびを押し出した。
《だってよー雷獣。夏洌って、ほんとに俺らの匂いがするぞぉ？人間じゃないみたいだしー》
《しばらくしたら、馴れる。というか、馴れろ。努力して、馴れろ》
否が応でも牙が見えるように、さらに口を開いた雷獣は、不機嫌そうに夏洌を見上げた。
《ま、馴れないのは小物の証だな。おいらは、馴れたぞ》
えっへん、と両前足を器用に組む。大きさに似合わず、愛嬌たっぷりな仕種に、夏洌は首を振った。動物の骨格構造じゃあ、無理なんでは？と思う。
「ま、異形だしな。え、っと雷獣、だっけ？　俺は夏洌だ。よろしく」
一応、礼儀正しく挨拶などを…と思ったのだが、雷獣はせせら笑うように鼻を鳴らした。
《いまさら自己紹介されんでも、わかっとるわ。おいらは、雷帝が属獣だ。敬えよ》
「……はいはい」
めんどくさいやっちゃな、と夏洌がため息をつけば、雷の異形は

牙を剥く。
《ぬしっ。おいらをバカにしたな！　撤回せよ！》
「ごめんなさい。……ところで、このあたりって、地蔵が多くね？」
夏洌と、夏洌に憑いてきた小異形たちは、あたりを見回す。そういえば、形の揃っていない地蔵が多くある。その数、ざっと百は超えているだろうか。
「なんかお供えしてく？　ほら、道先に幸雲がありますよーに、とか」
しらたま屋で買った白玉を取り出した夏洌に、異形たちは胡乱な目線を送る。《おまえ、ばかなんだな》とか《いや、阿呆だろ》とか《ネジが足らないんじゃないの？》などなど、けっこう酷い内容のひそひそ話を交わす。
「え、おかしい？」
《ぬし、あほだな。これは、異形の化けたモノだぞ……って！　なにをしておる！？》
呆れ口調の雷獣が夏洌を止めようと口を挟む。しかし、なにげなく振り向いた雷獣が見たものは、ちゃっかりお皿まで用意してお供え物を待つ地蔵と、その皿の上に白玉をのせた夏洌の姿。
《のせちゃったの！？　え、え、えーーっ！　だっ、そやつらは異形ぞーーーっ？》
え？　と肩越しに振り返った夏洌の腕を、ひんやりとした地蔵が掴んだ。
《白玉、安月屋の一品だな。なかなか、乙な選択をする狐憑きだな》
ひとの良さそうな？地蔵の姿が揺らいで、ほっそりとした異形の姿に変じる。にっかりと笑った妖狸は、高らかに叫んだ。
《ご覧じあれ！　この人間、我ら妖狸の手を取ったぞ！》

比較的穏和だった闇が急速に転じて攻撃的になった。
肌をさす殺気に、めまいがするほど。
のちになっても、夏洌にはわかりがたいのだ。いったい、どれだけの狐狸が拓京に生息しているのか、と。そのあとの自分の行動が酷く恥ずかしかったが、無理にでも納得しようと思う。
だって、優に二百はくだらない数の狐狸に睨まれれば、誰だって気を失うものだ。

＋＋＋

時は一時ほど遡って、異形屋の店表でのこと。
異形が化けた青年ふたりが帰って、すぐだった。
「じゃあ、ぼくが行く！」
仁琥があげた手を無言で下ろさせたのは、強面がかなり名高い番頭・多喜次。他人には厳しく、自分にはさらに厳しいと評判の彼だが、事が主人である仁琥に関わると、態度は豹変する。
「駄目です。危険すぎます。狐狸の喧嘩に首を突っ込んで、ろくなことがあったためしがない。なにがあるかわからないところに、仁琥様を行かせられません。今回は、三十両もだすんですよ。普通に考えたら、よほどの状況でしょう」
多喜次の手を振り払い、仁琥はそっぽを向いた。機嫌を損ねたらしく、頬がわずかに赤い。
「ぼくだって、喧嘩ぐらい収められるもの。鈴夜、三十両あったら、なにが出来る？」
異形屋の財布を預かるこれまた切れ者の手代を、なかば睨むように見る。鋭い、とは言い切れない仁琥の視線を受け、鈴夜は愛用の古算盤を取り出した。ぱちぱち、と小気味よい音を立てて、算段を打ち出していく。
「まずは裏屋の雨漏りを直せて、台風で飛んでいった倉の瓦を直せ

て、庵の壊れかけの書棚を直せて、ついでに備蓄用の味噌・醤油・五穀などなどを揃えることができて、若の掛布団を新調できますね。あぁ、滞納しまくっていた町費も一括で払えます」
「ありがとう、鈴夜。で、多喜次、三十両を諦める？　ついでに、信用もなくす？」
言い切った仁琥の“勝った！”的な顔を見て、吹きだしたのは夏洌と正吉。家鳴数匹も、ころころ笑っている。
鈴夜の手元にある算盤とにらみ合っていた多喜次は、しばらく唸っていたが、やがて観念したように息をついた。
「わたしと鈴夜は、山上様のご依頼に行かねばなりません。正吉も連れていくと約束してしまいましたし……。残るは、」
ちらり、と多喜次が夏洌を見る。心配そうな正吉と、秀麗な顔をほころばせた鈴夜も夏洌を見る。仁琥があわてて、首を振った。
「ダメダメ！　夏洌さんだけに、行かせられないっ」
夏洌は嫌な予感を覚えつつ、苦笑するしかない。黙っているべし、と本能が告知する。
「いいえ、仁琥様。異形屋奉公人なら、あの狐狸喧嘩をかいくぐってこそ。嵐新も正吉も鈴夜も経験してきました。夏洌だけが経験しないのは、ずるいでしょう？」
「じゃあ、ぼくは？　ぼくは良いの？」
のけ者にされた、と感じたのか、仁琥は珍しく声を低める。とはいっても、迫力のない声だが。
「仁琥様も十になったら、狐狸喧嘩に連れていってあげますから。それでいいな、夏洌。知恵妖（ちえもの）をつけるから、わからんことがあればそれに聞けばいい。さあ、仁琥様、これでいいでしょう？」
「それだけしてもらえば、大丈夫ですよ。な、仁琥？」
多喜次と夏洌の笑顔に、仁琥はしぶしぶ頷いた。仁琥様の気が変わらないうちに、と準備を始めた夏洌の袖を握って、一言だけでもと。
「無理は、しないでくださいね。ぜったいに、帰ってきてください」

「大丈夫だから。旱母と庵で遊んでなよ。帰ってきたら、あの団扇を見せてくれない？」
うん、と頷く仁琥の頭を撫で、夏洌は異と染め抜かれたのれんを潜った。その背に、正吉の声が飛ぶ。
「夏洌さん、命の危険を感じたら、恥なんてかなぐり捨てて逃げてくださいね！」
その時は、意味なんてわからなかったし、のちにも分かると思わなかった。
でも、これだけは言いたい。
正吉さん。お願いですから、警告を与えるときは、もっとわかりやすくしてください。
命の危険は感じたけれど、逃げる暇なんてありませんでした。

＋＋＋

かぐわしい香りが広がっていて、まるで極楽浄土のようだ…。
と、思ったのもつかの間。
背中に固いものがあたって、痛い。あまりの寝苦しさに寝返りを打てば、夏洌の腰は軋む。
「あ、いったぁ…」
いったい、なんでこんな所にいるんだ？　と夏洌は疼痛を訴える腰をさすりつつ起き上がった。
「ここは、どこだ？」
率直な疑問だ。答えが返ってくるとは思っていなかったので、雷獣の声がすれば喜べた。たとえ、どんな罵声でも…。
《おう、起きたか。このアホ夏》
否、これだけは喜べない。むしろ、文句のひとつふたつみっつ言

わねば。
「アホ夏！？　ちょっと待て、雷獣！」
《おまえなんぞ、アホ夏でじゅうぶんだ。見ろ、このざまを》
なぜか板間に転がっていた夏洌は、伏せている雷獣を睨んだ。葡萄色をした目を見た途端、状況がよみがえってきた。
「えーっと、ここは狐狸さんの巣窟ってところですかい？」
《バリバリな。ちなみに、ここは田貫町というところだ。おいらの貴重な情報に感謝しろよ》
冷たく、及び至極不機嫌に言い放った雷獣に、夏洌はしぶしぶ頭を下げる。
「貴重な情報、ありがとうございます」
下げた頭を戻すついでに、あたりを見回す。
夏洌が転がされていたのは、どうやらどこぞのお堂のようだ。ご本尊が収まっているべきところには、ぽっかりと空間があいている。そのかわりに、なぜか置いてあるのは信楽焼のたぬきだ。
なんか、立派な焼き物たぬきだなぁ、なんて考えていると。
信楽焼のたぬきが、口を開いた。
《おや、起きられたか？　小僧殿》
「……しゃべった？」
信楽焼きのたぬきは、いつからしゃべるようになったのか。いやいや、それ以前に、どうして焼き物がしゃべる。夏洌の顔から思考を読んだ雷獣は、鼻を鳴らして尾を振った。
《アホ夏。その狸は金長という大狸だ。神位を持つ狸だから、アホ夏よりもずっと上のものだ。桜稲荷の空狐と知り合いだそうな》
「その情報、どっから来たの？」
《アホ夏が転がっている間、そこな金長殿と話した》
アホ夏、と言うたびに雷獣は夏洌を見る。アホ夏じゃない、と苦情を言う夏洌をさっぱり無視して、首の後ろを後足で掻いた。眉を寄せた夏洌に、金長狸は近づいてきた。焼き物のたぬきは止めたらしく、普通の狸だ。

《ほれ、そっちにいるのが、狐たちじゃぞ。話があるのであろ？》
金長狸が指さすほうを見れば、殺気だった狐狸さんたち。
眼光が硬度を持ち、いまにも飛びかからんとする、その殺伐とした雰囲気。予想以上の状況に、夏洌は雷獣に助けを求めた。
「らいたー、どうすべきだろう……？」
《らいた！？　おい、こら待て。誰がらいただ。アホ夏》
「アホ夏言うな。雷獣だからいただ。言われたくなかったら、アホ夏言うな」
《……軽く雷撃を落としたらどうだ？》
「いや、神さまに仕えてる異形なんだろ？　さすがにそれは、まずいんじゃ…？」
気のせいか、空が曇ってきた。雷さまがゴロゴロ鳴っていて、落ちる気満々だ。夏洌はあわてて雷獣の二尾を握る。
「ほんとにまずいって！　まずは、話し合いだろっ？」
《離さんか！　尾を握るなっ。しばしの間、待ってやろう。おいらだって、忙しいんだ》
雷が収まったようで、夏洌は胸をなで下ろす。雷獣が待っていてくれる間に、と殺伐とした狐狸に向き直った。

「えーっと、とりあえず話し合いません？」

そぉっと切り出した夏洌に、狐狸たちの視線が突き刺さる。それはもう、ぐさぐさと。ちなみに、雷獣は安全地帯――金長様のところ――に避難している。
狐狸たちは、それぞれ顔を見合わせた。《どうする？》《いや、ひとの言うことを聞くのか？》《狐はひとに媚びるのか。仕妖の恥めが》《左様、我らの矜持を傷つけるとは、相変わらず狐らは》《狸らこそ、決闘状なんぞ送りつけてきおって》《おおかた、しゃれたものを使ってみたかったのでないか？》
話していれば、険悪な雰囲気が増していく。これはひどい、と夏

洌はため息をついた。
とりあえず、血の上った頭を醒ましてもらおう。そのためには。
「雷獣、ほんとに軽く、雷撃落としてくれない？」
《…やるのか？　さっき、止めとけっていったろう》
口を開いた雷獣は、耳を押さえる夏洌を胡乱げに見つめた。
「頭を醒ましてもらおう。大きな音がすれば、醒めるだろ」
《ぬし、亊主（あるじさま）に似ておるぞ》
ため息をついた雷獣だが、それでも雷を落としてくれるらしい。お堂の天井を見上げたかと思うと、大きく一声だけ吼えた。だが、その吼声は聞こえない。
突如として轟いた雷鳴にかき消される。雷鳴より少し早く、極小の雷が堂内に落下し、堂内が真っ白に染まる。
あまりの事態に驚いて言葉すらなくした狐狸たちは、呆然とにこやかな人間を見つめた。
「とりあえず、自己紹介。俺は異形屋に新しく奉公に来た…っていっても、三ヶ月も前だけど。名前は夏洌だ。お見知りおきをば」
言葉すら失った狐狸たちを見て、金長狸は呵呵と嗤う。側に臥せる雷獣は、もはやあきれ顔だ。
《あの者、傑物になりそうな予感だな》
静まりまくった堂内に、金長狸の楽しそうな嗤い声が響いた。

第五章〜異形たちの問題

刹那の輝きと、それに従った轟音。極小とはいえ、れっきとした雷鳴だ。
場をつんざいた轟音の名残が風に流されると、さわさわと小雨の音が聞こえ始めた。
「あちゃー。降ってきちゃったよ。雨具とか、用意してないのになぁ」
《ふっざけるなぁっ！》
観音開きの扉を薄く開けてお堂の外を睨む夏洌の背に、頭から突っ込んだ狸が一匹。予期せぬ衝撃を受けた夏洌は、小雨に濡れた階を転がり落ちる。
「なにをするんだ！」
《それは、こっちの台詞じゃあっ》
あちらこちらの毛が禿かかった狸は、くわっと牙を剥く。となりに立った狐が体毛を膨らませれば、青白い狐火が夏洌に降りかかった。顔を庇った袖が不穏な音をたてて焦げる。ひき、と夏洌の頬が引きつった。
「わっわわっ」
《アホ夏め》
とん、と軽く跳躍しただけで雷獣は夏洌の背後に飛び降りる。巨大な影に包まれる形になった夏洌は、ゆっくりと肩越しに雷獣を振り返った。鋭い牙が鈍く光って、鋭い口先を突きつけられているのは、あまり良い気分ではない。むしろ、悪夢に等しい光景だ。
「えーっと、ありがとな、雷獣。背後に立つのは、止めて欲しいなぁ…と」
《あいつらだって、喧嘩を止める契機（きっかけ）が欲しいんじゃないのか。だったら、適当な理由を与えてしまえば、おいらは帰れる》
「あ、そっか。喧嘩って、そういうもんだもんなぁ」

里で喧嘩したときも、仲直りの契機がなかなか掴めなかったものだ。懐かしそうな目になった夏洌を、雷獣は太い前足で払う。
「あだっ？」
《おいらの知恵に感謝して、さっそくおいらに礼を言え》
「あ、ありがと」
頭を押さえた夏洌だが、それでもお礼は言っておく。素直に言うとは思っていなかった雷獣は、すこし驚いたように目を瞠った。驚いたのを知られたくなくて、そっぽを向く。
《……ほれ、さっさと良い案を提案しろや》
「俺が！？」
《おまえがやらず、誰がやる。おいらか？　おいらなのか？　おいらが考えるのか？　なんでおいらなんだ？》
「え、やっぱ俺が考えるんだ…。どーしよ」
《よもや、得策もないのか！？》
「あ、ははは」
牙を剥きだしにして唸る雷獣に、夏洌は乾いた笑みをひとつ。あっけらかんとしていて、なんにも対策をしていなかったことが丸わかりだ。雷獣はふかーくふかーく息をついた。救世主が現れぬものか、と首を傾いだとき。
滅多に聞かない同胞の声が響いた。
《乃公が考えてやろうぞ》
どこまでも尊大な響き。他者を見下しても、平気と思っている異形さん。自分とは馬――ならぬ異形が合わないと分かっているからこそ、雷獣は眉を寄せた。
《貔貅（ひきゅう）…殿。忙しい御身がなにゆえ、こちらに？》
皮肉に聞こえるだろうか、と雷獣は斜に構えた。だが、貔貅には痛くもかゆくもないようで。
《お小さい主殿に言われたのだ。主命とあらば、参じなければならぬであろうに。どうせ、汝らには、考える頭もなきほどに》
雷獣と険悪そうな雰囲気の異形は、どことなく遥か南方の獅子を

思い起こさせる風貌をしている。鬱金色の明眸に見つめられる、というより睨まれて、夏洌は一歩、退がる。背後の狐狸たちも、息を呑んだらしい。
「……雷獣、こんなことを言うのはなんなんだが」
《おいらも同意見だぞ、アホ夏》
なんか、超偉そうだ。狐狸たちが縮こまっているなか、金長狸はにこにこ笑っている。曲がりまくった杖をついて、縁台に出た。尊大な態度で見下ろす貔貅に、前足を突き出した。
《よろしかろうのぉ。貔貅殿よ、課題を頼むぞ。若輩者共は、すこしばかり“ぎゃふん”となったほうがよかろうに》
《ふんっ。狸風情に言われずとも》
なんて、偉そうなんだ、あいつ！　と狐狸と夏洌と雷獣が結託して貔貅をにらみつける。しかし、金気の異形は悠然と笑んで見せた。
《では、問題だ》

＊＊＊

なぜこうなった、と雷獣は不機嫌そうに喉を鳴らす。小さな雷鳴を喉の奥で飼っていて、それが啼いているようだ。
「あいつ、気に入らん」
《おう、おいらも同じだ》
「大体、なんなんだよ。これは！」
《……おいらには、数学的思考能力というものが欠如していると、ようように解せたぞ》
地面に散らばった碁石を睨み、雷獣は不機嫌な声を押し出した。碁石を弄ぶ夏洌も、しかも、だ。
「諦めるな。これを解いて、あんの偉そうな異形をぎゃっふんと言わせてやるんだ！」

《がんばーれ、がんばーれ。あーほーなーつ》
「……異形って、ほんとにうっとうしいんだな」
ちらり、と狐狸たちに視線を向ければ、こちらと同じように悩んでいる様子。目の前の碁石を弾き、夏洌は息をついた。

足の数は百十二。頭の数は四十六。
鶴、亀の数はそれぞれいくつか。
世に言うつるかめ算だ。

それをなぜ、異形である貔貅が知っているのか、という疑問はあるが。まあ、それは置いておいて。
狐狸さんたちは、ひじょうにお悩みのようだ。
《ちょっと待て、それでは足の数が多いぞ？》
《む！　頭の数が足らぬっ》
《ぬおぉぉっ、足がおおいのだぁ！？》
《あれ？　なんか、頭が多い》
《くむぅ》
《ふーむぅ》
ふっさふっさと揺れるしっぽがいくつか。狐の尾も、狸の尾も入り交じって、なかなかに良い雰囲気だ。
車座になってなにかをしているのは、里で聞いた昔語りじみている。仁琥に見せたら、喜ぶだろうなぁ、と夏洌は考える。
喜ぶ仁琥の顔を想像していたら、表情がだらしなかったようで。
《アホ夏！　ちゃんと考えているのか！？》
雷獣の前足で後頭部を叩かれた。何度目かの叩きに、夏洌は不満を漏らした。
「痛いなぁ。ちゃんと、考えたよ」
《考えただぁ？　紙が真っ白けであろうに！　おいらでは解けぬから、アホ夏に任せているというのに……っ》
「なんっ。なんで解けたのに、アホって呼ばれるんだよ！」

《それはおぬしがアホだから…、なに？　解けた？》
「うん。鶴は三十六羽で亀は十匹」
にっかり笑った夏洌に、雷獣はしきりに首を傾げる。真っ新な紙と、鶴亀に見立てようとした碁石の山を睨む。
《なんで？　どうして？　おいらには、わからんぞ？》
納得していない様子の雷獣を横目に、夏洌は小さくあくびをかみ殺す。異形屋に奉公に入ってから、まともな睡眠が取れていない気がする。朝寝坊なんて、出来ないし。
早く帰って、ゆっくり寝よう。四分の一ほど寝かかっている頭を振って、夏洌が立ち上がる。そこに、貔貅の尊大な声がわって入った。
《おい、解けたとは真か？》
「ああ、解けたよ。鶴は三十六。亀は十」
《むむむ。ズルはしてなかろうな？》
「しないよ。ほーら、俺が解いたんだから、とっとと帰ろうな」
肩を回した夏洌の背に、今度は狐が突っ込んできた。
《なっにっ？　アホ夏殿が、解いたとなっ？》
《なんと！　どうやってじゃ》
地面に突っ伏した夏洌の背に、狸が飛び降りる。どす、と腹に来る一撃だ。なかなかの連携攻撃。仲が良いのか、悪いのか。起き上がるのさえ面倒になって、夏洌は後ろ手に狐狸を払った。
「もう、どうでも良いだろ…。俺は、帰って寝るんだ」
《いーや、納得いかぬっ。我らは神々に仕える異形。狐狸が手を合わせて、なにゆえ人間風情に負けるのじゃ！》
《そうだっ。説明責任というものを、おぬしは知らんのか！　このつるっぱげめ》
《教えぬか！》
《けちんぼめっ》
びしべしと、狐狸さんたちが協力して夏洌を蹴る。殴る。叩く。噛む。しかし、身体の大きさが違うからなのか、なかなかに致命的

な一撃が与えられない。なので狐狸たちは、顔を見合わせた。
一方、解けまい、と高をくくって出した問題が、小僧ごときに解かれた貔貅は、ご機嫌斜めだ。太い尾をくねらせ、剣呑な光を鬱金の目に宿す。
《その方、どうやって解いたか》
断じて友好的とは言えない貔貅に睨まれ、夏洌が肩をすくめた。
「全部亀だと、足が七十二も多い。多い分を鶴に変えれば、鶴は三十六羽。頭の残り十。それが亀の数」
《……雷獣よ、とっととそこな小僧を連れて帰還せよ。お小さい主殿が心配症を発症しておる》
言うなり、貔貅は太い足で地面を蹴った。余韻すら残さずかき消える貔貅に、雷獣は鼻を鳴らした。
《気むずかしいやつだ。よかったな、夏。貔貅に敵認定してもらえたぞ！》
「貔貅に嫌われた！？　えっ。俺の金運、どーなるの！？」
貔貅嫌いが増えたことが嬉しいのか、雷獣は上機嫌だ。しかし、一生の金運が尽きたかと思うと、夏洌は真っ青になる。
尾を振る雷獣に、狐狸たちが近づいてきた。自分からしてみたら、成獣とも思えないほど小さな異形たち。話しやすいようにと、雷獣は伏せてやった。
《どうした？》
茄子紫の瞳に射られて怯えつつも、狐の一匹が歩み出る。
《あの者、かわった狐憑きか？》
《狐憑き？》
思わぬ問いかけに、雷獣の眉が寄る。いまだ悶々と悩む夏洌に目を遣るが、狐の気配などないに等しい。むしろ、これだけ狐狸に囲まれているからには、それなりの気配が染みついてもよい。が。
《狐狸の気配が染みてない？》
ふん、と鼻をひくつかせる雷の異形に、狐たちが言いつのる。
《そうなのだ！　なにゆえなのか、わからぬが》

《どことなく、畏怖いし》
《やってることが、どことなく我らの空狐さまに似ているぞ》
《まことに。あのように悩んでいると、さらに空狐さまにそっくり》
《威厳ナシ、貞操ナシ、仕事嫌い、おなご好き。空狐さまに似ているところ、あるかの？》
最後の狐の言葉に、雷獣はくつくつと笑う。空狐とは思えぬ空狐らしい。それでも慕われているのか、と逆に驚く。
《そうだな。威厳はない。だが、仕事もまあまあやっているし、おなごよりも主様大好きだから》
それはそれで、危ないだろうに。
番頭辺りが聞いたら、眉根を寄せて憤るだろう。仁琥様に骨抜きにされている、あの奉公人は特に。
「あっ。今何時？　喧嘩、終わってる？」
一生金運さようなら、の落ち込みから立ち直ったのか、夏洌があわてたように振り向く。その足元に、わらわらと狸たちが寄っている。
《帰るか？》
夏洌に特攻した狸が名残惜しそうに問いかけてきた。ちょっぴり情が移ったらしく、夏洌に抱き上げられるままになる。
「喧嘩だって終わってるし。ほら、喧嘩するほど仲が良いって言うだろう。でもさぁ、他人に迷惑を掛けるのは、よくないよね」
《そうなのか。では、以後気をつけるようにしよう……とお偉方に言っておく》
「……お偉方に言うだけなのかよ」
自分たちで気をつける気は、ないのか？　夏洌の表情を読んだ狸は、けらけらと笑う。
《我らは上の決めたことに、従うのが常。我らでなにかを決めるのは、なかなかなぁ》
《それに、これもひとつの年中行事ゆえなー》
「さいですか……」

肩を落とした夏洌は、抱いていた狸を下ろした。ぶるる、と身震いをひとつして、狸は立ち上がる。
《いまは子の刻をまわったところだ》
「子の刻？」
《夜半九つじゃ》
ふくふくとした金長狸が横から言い挟む。なぜか、信楽焼のたぬきに戻っている。気に入っている姿なのか、はたまた夏洌の驚きようを見たいのか。
《今宵は遅い。このような夜中、金三十両を担いで店に戻るのは、つらいであろう。良き日を選び、異形屋に運ばせようぞ》
ありがたい申し出だ。つらい、とか以前に、千両箱を担いで木戸番を起こすわけにはいかない。
《ほれ、これが証文じゃ》
受け取れ、と放り投げられた紙は、見事な放物線を描いて夏洌の懐に収まる。すごい、というより、なにかの妖術だ。絶対。
「証文？」
《そこに、金三十両は後日払う、と書いてある。掛けのようなものじゃ。こちらから行かねば、強面番頭殿が出てくるゆえな》
きちんと行くぞ、と信楽焼金長狸は呵呵と笑う。呆気にとられる夏洌を背に、またまたなにかが突っ込んだ。
「がっ……！」
勢いに押されて、顔面から地面に転がる夏洌（十九歳）。異形に激突されて転がるなど、一生に一度体験できるかどうかだ。なんと貴重な体験。それが一日に三度。くそっ、こんどはだれだ！？　というより、どんな異形だ！
恨み骨髄に徹す、といった体で振り向いた夏洌は、そのままで固まった。
《おや、主殿ではないか！　眠たかろうに。おいっ、多喜次。こんないといけない幼子を連れ出して良い時間と思っているのか！？》
いろいろ言いたいことはあったが、ほとんど雷獣が言ってくれた。

仁琥を抱いて立っていたのは、眉間のしわがいや増した番頭多喜次。抱き上げられた仁琥は、すでに夢の中だ。
「なんで、ここにいるんですか！？　しかも、仁琥まで連れて！今何時だと、思ってるんですっ」
「夜半九つを数える頃だな。仁琥様が来たい、と駄々をこねられたのだ。だから、ここにいる」
　そろり、と雷獣が夜闇に紛れる。まわりにあれほどいた狐狸たちも、ゆっくりと退散していく。夏洌だけが、逃げ遅れた。
「わたしとて、お連れしたくなかった」
「そぉ、ですよね……」
「だが、ここにいる」
「すみません」
「謝らねばならんことを、したのか？」
「いえ。……ほんと、すみません」
「なぜ謝る？」
「あの…、えっと。ほんとうに、申し訳ありません」
　静かすぎる多喜次に押されて、頭を下げ続ける。面を伏せた夏洌を放っておくことに決めた多喜次は、つい、と目線を巡らせた。
《ひっ》
　その視線に捕まったのは、信楽焼に転じていたゆえ逃げ遅れた金長狸。冷たすぎる炎が吹き出す多喜次に、金長狸はゆっくりと振り返った。
《お久しぶりじゃのぉ、多喜次どの》
「いいえ、この前の諍いは三ヶ月ほどまえでしたよ」
《そ、そうじゃったのか？　いやー、寄る年波に敵わず、物忘れが激しくて激しくて……》
「……。夏洌」
「はいっ」
　静かな呼び声に飛び上がった夏洌は、即座に番頭の許へと走る。無表情になっている多喜次から仁琥を渡され、夏洌は状況が掴めな

い。
「あの……？」
「さきに帰れ」
「み、店にですか？」
「店以外、どこに帰る」
「でも、木戸が閉まっていますけど…」
「……雷獣」
《ぬおっ？》
木陰で気配を窺っていた雷獣が、多喜次の呼びかけに応じて姿を見せた。乗せていけ、とは言わずもがな。
《了解したぞ。さ、アホ夏。おいらにとっとと乗れ！　なにをくずくずしているっ》
「あの、じゃあ、お先に失礼します……」
「仁琥様を起こすなよ」
はい、と縮こまるように答えた夏洌に、多喜次が振り向いた。怒られる、と身をすくめた夏洌に、多喜次が一言。
「初めてにしては、よくできたではないか」
「あ……りがとうございます」
誉められた。初めて誉められた気がして、夏洌は黙り込んだ。雷獣の硬い毛を握って、仁琥をしっかりと抱き上げる。
「いいか、くれぐれも仁琥様を起こさないように」
念を押されて走り出した雷獣に、一匹の狐が併走する。夏洌を見上げ、ささやく。
《ぬし、狐憑きじゃ。狐に憑かれておる。気をつけよ。異に同化してしまえば、容易には離れぬ。堕ちた化生に、気をつけろよ》
「は？」
訳が分からずぽかんとする夏洌を一瞥したあと、狐は雷獣から離れていく。雷獣は止まる気配を見せない。刹那とも思える間に、狐の姿が消えた。

狐が走り去ったあと。

明かりがない拓京を眼下に収めつつ、雷獣は夜空を疾走する。雷雲をまとい、すべてを明かす月光を避けるように。

第五章〜異形たちの問題（後書き）

つるかめ算なんて、どうやって解いていたんでしょう…？
たった一行の台詞にまとめるために、三日は苦心していました。昔のひと、これを遊びにしていたんだから、すっごい。

第六章〜姫神様の野望

蝉の大合唱に包まれる昼下がり。
陽は中天に昇ったばかりで、暑くなるのはこれからだ。異形屋も暑いことには変わりない。
しかし、雰囲気は冬並の低温だ。しかも、一触即発な感じ。
「やだ！行きたいのっ」
と、子供の甲高い声が響く。めずらしいことに駄々をこねる仁琥に、鈴夜は無情にも首を振った。
「ダメです。子供だけで肝試しなぞ」
「行くの！　せっかく、お八恵ちゃんと一緒になれたの！」
「お八恵ちゃん？　あぁ、あの損料屋の娘さんですか。なんで、そんなに行きたいんです？」
「行きたいから、行きたいの！」
わかりません、と切り捨てた鈴夜に、仁琥は夏洌に助けを求める。
「夏洌さんっ。行ってもいいでしょう！？」
「俺に聞かれても…」
夜中に仁琥を送り出しす事に賛同した、と多喜次に知られたら…と夏洌は目を逸らす。行かせてはやりたいが、その後が怖い。頼りのない夏洌に、仁琥はむぅ、とくちびるを尖らせた。
「もーーっ。僕は、ぜったいに行きたいの！」
柱の陰や梁のうえ。いたるところに、ちいさな童子の姿がある。どの顔も心配に染まっているが、それでも手を出す勇気はないらしい。
徹底抗戦を貫こうとする仁琥に、鈴夜は最終手段を使うことにした。
「番頭さんに言いますよ」
効果覿面。鈴夜の言葉に、仁琥はあわてる。
「だめっ！　ぜぇったいにだめぇっ。多喜次に言ったら、もうお八

恵ちゃんと遊べないもの！」
　めずらしく焦る仁琥に、家鳴たちが集まり始めた。隙あらばお祭り騒ぎを起こそうとする家鳴たちを蹴散らし、鈴夜は立ち上がった。奥に向かおうとする手代に、仁琥は半泣きの形相だ。
「鈴夜！　多喜次に言っちゃあ、だめだからねっ」
「さて。番頭さんでもないと、若は止められそうにないのでね」
「だめぇっ。家鳴ぃっ！　鈴夜にとっしーーんっ！」
　悪戯好きな異形たちは、いつの間に増えていたのか、数が多い。その全てが、鈴夜に向かう。
《すず、にこ、いじめたーーっ》
《やなり、とっしーーん、なのだぁ！》
《わるものたいじーっ》
「いった！？　ちょっ、なにをするんだっ。離れろ！　えぇい、ちょろまか動くなっ」
　ちょろまかと動き回る童子たちを払う鈴夜に、今度は後頭部からつぶてが飛来する。月代を痛むほど冷やすそれは、特大の雪つぶてだった。
　それを投げたのは、活溌そうな瞳の少女。袖をまくり上げ、新たな雪玉を製作する。
《悪者退散！　いまよっ、山童》
《……我はやめる》
《はあ！？　ちょっとっ、ここまで来て止めるってなによ！》
《我は最初から、やるとは言ってない》
《なんですっぇぇぇ！？》
　剣呑な雰囲気で、今にも喧嘩しそうな二人の子供…姿の異形。年中行事となっている雪童と山童の言い合いだ。しかし、その言い合いも耳に入らず、鈴夜と家鳴の格闘が続く。そこでまた、新手の異形が登場して…。
　手がつけられそうにない状況に、夏洌は隣に座る仁琥を見る。
「止めなくていいのか？」

我関せずを貫く仁琥は、夏洌を見上げた。しかし、まだご機嫌斜めのようで、ふい、とそっぽを向く。
「行かせてくれないんだもんっ」
「行きたいよなぁ。もう、子供じゃないんだし。べつに、行ってもいいんじゃない？」
「そう、僕、子供じゃないの。だから……え？」
虚を突かれた仁琥は、まんまるの目で夏洌を見る。
「あとで、正吉にも頼んで、多喜次さんに言おうか」
「でも、さっきはダメだって」
「あー、なんか、あの異形たち見てたら、平気なように思えてきたんだ」
「じゃあ、行ってもいいの！？」
「うん。異形たちもついていくだろうし。それに、ただの肝試しぐらい」
夏洌が今まで経験してきた異形体験は、ほとんど異形屋に入ってからだ。異形屋に生まれ、異形屋で育った仁琥に、子供同士の肝試しぐらいで危険が迫るはずもないだろう。
「とりあえず、あれをなんとかして…」
途端、素直になった仁琥がうなずきかけたとき。のれんを潜って、番頭が顔をのぞかせる。笑ってはいるが、たいそう恐い笑みだ。これは、あれの前触れ。
にっこり笑ったまま、多喜次は息を吸い込んだ。
「いい加減にしないかっ！！」
やっぱり、番頭多喜次の雷が落ちた。

蝉の大合唱も、さすがに多喜次の雷には敵わないようだ。
異形屋の周辺だけが、異様なまでに静か。というより、沈黙の世界と化している。
「表まで聞こえるような言い合いなぞ、もってのほかだ！　ただで

さえ少ない客が、さらに減るだろうっ。なにを考えているんだ！？」
店に入りかけていた客を逃した言い合いに、多喜次の雷はいつもより三割増。眉間のしわも、三割増。
「だいたい、鈴夜も夏洌もいて、なんだってあんなことになるんだっ！」
「「……」」
「ごめんなさい……」
押し黙りを貫き通す奉公人二名と、素直に謝る仁琥。うしろのほうで反省の格好をしている異形達。
「いいえ、仁琥様が悪い訳じゃあ、ありません。家鳴相手に本気をだす鈴夜が悪いんです」
「でも、僕が家鳴をけしかけたのだし」
「……そもそも、どうしてそうなったのですか…？」
仁琥の言葉に多喜次が息をつく。眉間に刻まれたしわを揉み、多喜次が目を瞑る。その隙を逃さず、家鳴たちが叫んだ。
《にこ、わるくにゃいっ！》
《すずが悪い！》
《すず、にこをいじめたっ》
家鳴たちが言えば、雪童も目尻をつり上げる。
《あたしも見てたわ。鈴夜はいじわるを言うのよ》
《否。我には、手代は正しいことを言っているように思えた》
《山童っ。こんの風見鶏っ》
《我は鶏ではない》
《～っ！　あんたなんてねぇ、屁理屈童子よっ》
《……命名感覚もないのだな》
《も！？　も　ってどういうことよっ？》
《そのまんまの意味だが？》
お互い、一歩も引かない様子に、多喜次の眉間のしわが四割増。
さすがにいけない、と感じたのか仁琥がおどおどと言う。
「あの…今日はね、お客様が来るの。だから、そろそろ止めようよ」

それでも、ふたりの異形たちはますますお互いを罵りあう。あんまりな言葉遣いに、多喜次が一声あげようと口を開いた。しかし、多喜次がふいにのれんに目線を転じた。肩を落とした鈴夜と夏洌も、そろりと多喜次の目線を追う。

その間も、雪童対山童の言い合い合戦は続いているが。

のれんを押し分けて、細い声が入り込んできた。

「あの……お取り込み中でしょうか？」

控えめな声が異形たちの動きを止める。

異形の言い合いから打って変わって、沈黙が支配する異形屋のなか。おどおどと、その声は続けた。

「明智ですが…」

のれんから顔だけのぞかせているのは、二十歳（はたち）頃の青年。人なつっこそうな顔だが、いまは申し訳なさそうな表情が浮かんでいた。

「ご都合が悪いのなら、また、後日……」

「いいえ、大丈夫です。どうぞ、なかへ。夏洌、お茶」

誰よりも早く多喜次は動き、のれんの外にいた人物を招き入れる。しょげていた仁琥が跳ねるように土間におり、その人物の手を取った。

「おひさしぶりですね、明智さま」

「はい、仁琥さま。おひさしゅうございます。また、厄介事を持ち込んでしまいました」

人なつっこそうな笑みを浮かべ、彼は仁琥の目線にあうようにしゃがみ込んだ。

白い上衣に濃青の袴。社居に仕える者たちの服装だ。手にした風呂敷を抱え、座敷にいる夏洌たちにも頭を下げる。

「そちらの小僧さんは、はじめまして、ですね。桜稲荷の禰宜（ねぎ）、明智と申します」

「あ、夏洌です。……わあっ！」

礼儀正しく礼をとる明智に、夏洌もあわてて頭を下げた。しばらくして顔をあげると、自我の強い瞳と目があう。それに驚き、声を

あげた。
「雪童っ？　どうしたんだよ、いったい」
《夏洌って、アケっちゃんとは違うのよねぇ。アケっちゃんは神人の匂いで、夏洌は、なんというのか、異形っぽい？》
何気ない少女異形の言葉に、夏洌の胸がとくり、と跳ねる。
この前、狐に言われたことを思い出し、軽く首を振った。めまいにもにた感情がわき上がってくる。額を押さえると、それは消えていったが、なんとも言えないわだかまりは残ったままだ。
「どうしたんですか、夏洌さん。えらいの？　なら、休んでますか？」
目を開けると、仁琥の顔が近い。明智の顔にも心配の色が浮かんでいて、夏洌をのぞき込んでいる。
「大丈夫。それに、正吉が寝てるから。起こせないよ」
「……なら、いいんですけども」
無理はしないでくださいね、と念を押す仁琥に頷き、夏洌は厨へと向かう。雪童に頼んで作り置きしてある氷を切り出し、冷茶に浮かべると、店へと戻る。お茶出しも、小僧の大事な仕事だ。
風呂敷包みを解いている明智と目が合い、軽く目礼される。
「冷茶ですか。雪童さんのお手製氷ですね。いただきます」
からん、と澄んだ音を楽しむように碗を回してから、明智は茶を飲む。始終、ふわふわ笑んでいるひとだなぁ、と夏洌は思うのだ。そのふわふわ加減も、こちらが幸せになるように気を配っている感じがする。
「暑い日には、異形屋さんにお邪魔したくなりますね。お社居じゃあ、熱いお茶だけなんですよ。あ、これどうぞ」
「玖馨堂の鬼饅頭だぁ」
食べてください、と差し出された菓子折に、仁琥が子供らしい声をあげる。その様子に眼を細めていた明智だが、すぐに表情を変える。
「じつは、ご相談があって……」

「どうしたんです？　改まって」
きょとん、と首を傾げる仁琥の微笑んで、明智は口を開こうと努力する。苦渋の表情に、仁琥は多喜次を見た。頷いた多喜次は、明智を促した。
「話してみてください。お役に立てるかも知れない」
多喜次に促され、明智が口を開く。
「すこし、ながくなるのですが……」
冷茶で唇を湿らせた明智は、ゆっくりと話し始めた。

第六章〜姫神様の野望2

いつもなら声をかけてくれるはずの祭神が、けっして応えてくれない。

一度や二度なら気まぐれ、で済まされるはずなのだが、それも幾度も続けばやはり訝しむ。

なんどとなく呼びかけてはみたのだが、やはり応えはない。困り切った彼らは、姫神に仕える霊獣たちにも心当たりを聞いてみた。返ってきた答えは、やはり彼らの疑問と同じだった。

――姫さまは、何事にもお答えくださらない。なにゆえか。

なにゆえか、と訊かれても困るのはこちらである。知っていれば苦労はない、と言い返しそうになったのも何度か。さすがに霊獣を口答えするわけにもいかず、彼らの鬱憤（いらだち）は蓄積されていく。

状況が一転したのは、姫神がへそを曲げてから一月も経った頃だ。茹だるような暑さのなか、社居に出てきた若い神官が、異変に気がついた。

その楽観的な性には反し、至極マジメに姫神に仕えていた霊獣たちが、やけにあわてているのだ。理由を聞いても適当にはぐらかされ、その挙げ句に姿を見せなくなった霊獣たち。

これはアヤシイ。このうえなくアヤシイ。

事情を聞き出そうと、霊獣たちの好物である油揚げと酒を具え、とりあえずぐだんぐだんに酔わせてみた。最初はなんとか威儀を保っていた霊獣たちも、その性には逆らえず徐々に口が軽くなっていく。

順位（ナンバー）二位の狐が、ぽろりと漏らしてくれた。

――姫神さまは、家出をなさったらしい、と。

狐らにとっては日常的なことであろうが、些末な人間風情からしては大問題である。

というより、家出をする神様とはいかに。開いた口がふさがらな

いとはまさしくこのことだ、と茫然自失な神主を放っておいて、意を決した禰宜は社居を抜け出した。

＊＊＊＊

たとえ神様が家出をしたとしても、雲の下に住む平々凡々一般庶民には関係のないことである。

氏神がお留守とはつゆほども思わず、日々の生活を送るのが人間（じんかん）だ。

「ひやっこーい、ひやっこーい」と水売りの呼び声が間延びして届き、寺子屋から帰っていく子供たちのはしゃぐ声も高い。のんびりと歩く夏洌のわきをすり抜けて、甲高い笑い声を上げた。鬼ごっこでもしているのか、元気いっぱいに走る子供らを通してやりながら、夏洌は息をつく。

「子供は元気だねぇ、こんなに暑いのにさ」

ぼやくように呟くと、腰のあたりから呆れた声が届く。

《あんたも、子供だろうにさ。走ってみたらどうだい？　あぁ、そこの角を右ね》

「そりゃ、二百年も生きてる異形にとっちゃあね。仁琥ぐらいの歳からみたら、俺なんて“兄（あん）ちゃん”だよ、兄ちゃん」

夏洌の腰にぶら下がった根付けの付喪は、さもおかしそうにけたけた笑う。指示された角を曲がり、強い日差しを避けるように歩く夏洌は、不機嫌そうな面持ちだ。

「すこし経ったらさ、おじちゃん、なんて呼ばれるのかな…。考えたくないけど」

なら考えなきゃいい、と付喪は言う。

《どうせ、人生なんてすこしの時さね。小難しい事を考えてると、あっという間に終わっちまうよ》

「なんとも、異形らしい考え方だね」

その言葉のどこに面白味を感じたのか、根付け異形はまたもや笑

う。なんとなく馬鹿にされた気分の夏洌は、この異形が笑い上戸なのを知らない。
とはいえ、考えても仕方がない。この件は終わりとばかりに頭を振って、恨めしく青い空を見上げた。
「で、なんで俺は掛集めなんだろうか」
《そんなもん、決まってるさあ。下っ端すぎるのよ》
いまごろは、稲荷についているだろうか。暑さにへばっていないだろうか。床店で冷たいものでも、買ってもらってると良いのだけれど。
稲荷社へとむかった幼い主人に思いを馳せる時点で、すでに夏洌の親ばか――――ならぬ奉公人ばかは進行しているのである。
それにしても、家出した姫神を、結局は探すことになるのだろうか。

暑い日差しを避けるために道端の楠に寄りかかった夏洌は、額に浮かんだ汗を拭いた。冷や水でも、と思いながらも、決して暖かいとは言えない財布と相談して諦める。
暑いなぁ、と何度目かのため息をついたとき。
「ちょっと、そこの男、あたしを助けなさい」
急に声が降ってきた。目線をあげると、六尺ほどの高さの枝に、少女が掴まっている。というよりも、かろうじてしがみついている、というほうが良いかもしれない。危機迫った表情で、夏洌に助けを求めている。
「……俺？」
夏洌はあたりを見回し、少女の言う“男”が自分であることを認識した。
「そうよ。あんた以外に誰がいるのよ。さ、早く助けなさい」
危機迫った表情とは裏腹に、少女の口調はひどく強い。
「それが助けて欲しい人間の言うことかよ」

などと言いつつ、年端もいかない子供を見捨てるわけにはいかず……。ため息をつきながらも、夏洌は腕を伸ばした。
「好きで引っ掛かったわけじゃないのよ！」
途端、少女はぼすり、と夏洌の腕に向かって飛び込んできた。予想もしていなかった衝撃におされ、哀しいかな尻餅をつく。腕のなかに収まった少女は、夏洌を見上げた。
「ふぅ、助かったわ。ねえ、あなた、暇？」
「……は？」
面食らう、とはこういうことか。腕の中に抱えこんだ少女をぼんやり見ながら、夏洌は思う。呆気にとられる夏洌をよそに、少女はなおも言葉を継いだ。
「あたしね、社居……じゃなくて家を飛び出してきたの。あそこは好きじゃないの。自由に遊びにも行けないし、おやつだって決まった物なのよ？　出かけるときだって、お供が必ずいるんだし」
「その、お供のひとは？」
立ち上がり自分を離しながら訊いた夏洌に、少女はあっけらかんと笑った。
「そんなの、撒いたに決まってるでしょう？　さ、この町を案内してちょうだいな」
「は？　……ちょっと！」
ぽん、と着物の裾を払い、少女は夏洌に手を差し出した。仁琥よりも少し大きな手をした少女は、夏洌を見つめる。
「ね、あんたの名前は？」
「んーと…」
さて、正直に言ってよいものか。近頃の異形騒ぎに巻き込まれているせいか、幾分用心するようになった夏洌だ。言いよどんでいると、少女がすごい目で睨んできた。
「言いなさいよ。言わなきゃ、名無しの言兵衛役立たずって呼ぶわよ」
「夏洌です」

「名前あるんじゃないの。大丈夫よ、変なことはしないから。で、案内してくれるわよね？」
ひらひらと右手を振る少女に、夏冽は眉を寄せた。
「俺にも仕事があるんだけども…」
乗り気ではないらしい夏冽に、少女は顔をしかめてみせる。そっぽを向いて、ぽそりと言った。
「あたし、祟るわよ」
「た、祟るって…。恐ろしいこと言うなよ。冗談だろう？」
なにげに恐ろしいことを言う少女は、夏冽の問いに大層明るい笑みをひとつ。
「なに言ってんの。本気に決まってるでしょう？　七代どころか、末代まで祟ってあげるわ」
この少女は本気だ、と直感が告げる。となれば、折れるのは決まっている。
「誠心誠意、案内させていただきます」
うなだれた夏冽に、少女は満足そうに頷いた。腰に手をあて、強気な瞳で夏冽を見上げる。
「さ、行きましょ」
自分の袖をにぎって、いまにも駆けだそうとする少女を止めて、夏冽は腰を落とした。少女と同じ目線になり、問いかける。
「とりあえず、きみの名前は？」
「え？　あたしの名前…。そおねぇ、うか、とでも呼んでちょうだいな」
「おうかちゃん？」
「…語呂が悪いわね。まあ、それっくらいは妥協点かしら」
どこまでも不遜な少女は、いくどか口のなかでつぶやいていたが、やがて小さくうなづく。握った袖を引っ張って、夏冽を立たせた。
「さ、案内してちょうだい」
「いいけども…。一応、店に戻ってもいいかい？　これでも奉公人なんだ」

「それっくらい構わないわ」
「ところで、どこに案内すればいいわけ？」
「え？」
思いもしない問いだったようで、おうかはきょとんとする。しばらく考えるように首を傾げて、夏洌を見上げた。
「どこか、狐…じゃなくて奇人変人の行きそうな場所がいいわ」
「狐、じゃなくていいの？」
「……あら、狐の行きそうなところを知ってるの？」
「知ってるっちゃあ、知ってるなぁ」
まさか、妖狐と妖狸の諍いに巻き込まれた、とは言えない。不思議そうに自分を見上げるおうかに、なんでもないと言い返し、歩き始めた。
「どこに行くの？」
「とりあえず、おうかちゃんの行きたいとこに」
途端に明るくなったおうかの顔に、おもわず夏洌は笑みを浮かべる。どうしてか、どことなく馴染んだ雰囲気だ。
「じゃあ、まずは江都の名所に連れて行ってちょうだい！」
とんでもないのに引っ掛かってしまったのやも、と内心で嘆きつつ、夏洌は踵を返した。

第六章～姫神様の野望２（後書き）

お待たせ、している方がいらっしゃるのでしょうか…？
なかなか続かない拙文ではありますが、もう少しお付き合いいただけると幸いです。

第六章〜姫神様の野望3

あまり旅環境の整った国ではないが、それなりに旅が楽しめる国ではある。
街道沿いには必ず宿里があるし、駅馬や客馬も用意されている。近場の温泉地に湯治を、とか少し足を伸ばして神宮詣・皇都観光など、とけっこう旅も盛んだ。
それに江都から出ないでも、それなりに観光地はあるのだ。

紫煙にくるまれる少女を見て、夏洌はやはり苦笑を隠しきれなかった。あびたところが良くなると噂の煙を盛大に浴びながら、おうかは夏洌を顧みる。
「夏洌、これでよくなるのよね！」
「そうだけど。なにも、胸にあてなくても…」
いいんじゃないか、と思う。
率直な感想を言うと、おうかは柳眉をつり上げて怒った。
「だめよ！　あいつは、胸のある女の子が好きなのよ」
「あいつ？」
鸚鵡（オウム）返しに問う夏洌に、おうかはあわてて首を振る。腰まである直髪が揺れて、かんざしが奇麗な音を立てた。
「違うの！　あいつのためじゃないのっ。こ、これはねっ」
「あー、乙女心ってやつかな。聞かなかったことにするよ」
「乙女心なんかじゃないわ！」
吠えるように言うおうかの腕を掴んで、夏洌はゆっくりと退がった。寺の境内を歩きつつ、手を引くおうかに問いかける。
「桜稲荷にでも、行ってみる？　稲荷だから、お狐もいるんじゃないかな」
なにげなしに次の行き先を示してみたが、烈火の如く却下された。

「稲荷に行くなんて、ぜったいにイヤよ！」
「なんで！　狐って言ったら、お稲荷だろう」
「そりゃそうだけど…。あ、そうだったわ。稲荷には近づいちゃダメって、父様の遺言が…」
「どんな遺言だ」
切れ味抜群の返事を返した夏洌に、おうかは唇を尖らせる。花立湧柄の袖を振り、むすくれて足を速めた。朱い小袖の背中に、夏洌がいまさらのように問いかけた。
「そういえば、探しているのはどんな狐？」
その問いに、目鼻立ちのはっきりした少女は夏洌を顧みる。すこし考えたあと、晴れやかに笑ってみせた。
「空狐よ。まっしろな毛の仕狐なの」
そう、と夏洌はうなずいた。よくよく、狐に縁ある人生なのだろか。だとしたら、前世でなにをしたんだろう、俺ってば。

＊＊　　＊＊

たのしそうに歩くおうかを見ながら、「さて、どうしようか」と夏洌は独りごちた。店には、根付けの付喪が伝令に走ってくれている。多少、帰店が遅くなっても、心配はされないだろう。
それにしても、どういう出自のお嬢さんなのだろうか。この、おうかちゃんは。
着物は絹、ちゃんとした紅染めの色地に可愛らしい花立湧の模様。よく手入れされている髪は結ってはおらず、公家の子女のように垂らしている。
「せめて、その空狐さんとなんで知り合いなのかを――」
「夏洌！　あれはなにっ？」

「ひとの話を聞こうよ…」
夏洌(ひと)の話を聞いていないおうかは、掴んでいた夏洌の手を離して駆ける。ひとつの床店のまえで止まり、夏洌を招いた。
「早く来なさいよ、夏洌。ほら、これはなに？」
ため息をつきながらも近寄ってきた夏洌に、おうかは小さな土塊(つちくれ)を差し出す。子供の手に収まるほどの、ひねり鳩だ。
「ひねり鳩だね」
「欲しいわ！」
「…買えと？」
「崇るわよ」
「年上を脅すなよ」
「あたしのほうが、大人なのよ！」
「ありえないだろう」
文句を言いながらも紙入(さいふ)れを取り出した夏洌に、店主が朗らかに笑う。手早く手製の紙袋にひねり鳩を入れて、おうかに渡した。
「四文(200円)だ。――お嬢ちゃんのお供かい？　かわいいお嬢ちゃんじゃないか」
「あら、お世辞は受け取らない主義よ。本音として受け取っていくわ」
ませガキめ！　と睨む夏洌を気にも留めず、おうかは嬉しげに路に戻っていく。四文を払った夏洌も、あわててその小さな背を追うために人の流れに飛び込んだ。

「さ、次はどこに行く？」
もはやあきらめの境地にすら達した夏洌を横目に、おうかは立ち止まらずに歩き続ける。
「おうかちゃん」
「あいつ、女の子が好きなのよ」
すこしばかり寂しそうなおうかに、夏洌はなにも言えずに黙り込む。しかし、探しているのは空狐だったはず。女の子好きな空狐と

は、これいかに。
なにか引っ掛かったような感じもしたが、あまり気にも留めずに思考から追い出した。
「雌狐が好きなのか？」
「たぶん、女の子が好きなんだと思うの。狐でも、ひとでも」
「なんとも節操なしな雄狐だな」
「あら、あいつは雌狐よ」
「雌狐！？　……あぶない神狐だなぁ。」
そうかしら、とおうかは心そぞろに言い返す。顔と目線は、夏洌を通り越して床店に行っている。買い物に心が動くのは、小さいながらも女性ということだろうか。幼い頃、母の買い物にどれだけ付き合わされたことか…。
さて、話は元に戻って。
空狐と知り合いになれるとは、どんな女の子だ。着物も相当――とまではいかなくとも、一般庶民には晴れ着並に質のよいものだ。手指は白く細い。すくなくとも家の仕事をしなくても良いほどの家計、ということも分かる。
うーん、と悩んで、別の考えにいってみた。
どこかの寺の稚児、ということは――ありえない。稚児はそもそも男児に限られる。では、どこぞの武家の女の童（じじょ）ということ――もありえるはずがない。こんなに綺麗な着物は着られないはずだ。おまけに、空狐との関わりがない。
盲点を突いて、稲荷の関係者と考えてみようか。社居には、神降ろしのための女童がいるという噂だ。歳七つから十一あたりの女児がその座に就く。
「あ、ひょっとしておうかちゃんって、巫女さんだ！」
空狐と知り合いなら、それっくらいしか思い浮かばない。そう言うと、おうかは怪訝そうに振り返ってくる。
「急に黙りこくって、なにを言うかと思ったら…」
「…違うのか」

「そうよ、残念でした。あたしはね、巫女なんかじゃないの。もーっと上でどっしり座ってるのが仕事。夏洌って、アホね」
ずばりと言って切り捨てたおうかに、夏洌の顔が引きつった。なんでこんなに我が侭なんだ、と見ず知らずのおうかの父母に怒りすら覚える。きちんと躾はしておいてもらいたい。
「それに、社居にいても空狐とは出会わないわよ。だって空狐は、ほとんど社居にはいないから」
「え、初耳。社居にいなくても、神狐なのかい？」
「無知ね。空狐ぐらいになったら、社居にいないのが普通なのよ」
「…おうかちゃんは、年の割には物知りだな」
精一杯の嫌味だったが、そう聞こえただろうか。
「あら、夏洌にしてはようく分かってるじゃない」
「……さいですか」
嫌味には聞こえなかったようだ。なんと楽観的な性格、そして考え方。羨ましい限りだ。
「それにしても騒がしいわね。人の波にもまれそう」
「手、繋ぐ？」
差し出した手は、すぐに握られた。慣れていないようだし、心細かったりするのだろう。慣れていないときには、この騒がしさは心許なくなる一因でもある。夏洌だって、異形達のざわめきには慣れなかった。こんなに静かな日は、いつ以来だろう。と、そこまで考えて気づく。
「異形の声がしない…？」
辺りを見回してみても、異形の影すら見られない。昼間だろうが真夜中だろうがうじゃうじゃ湧きまくっていた異形たちが、影形もないとは。
「どうかした？」
きょとん、と見上げてくるおうかに、夏洌は首を振る。幸運（ラッキー）だと思おう、うん、それが一番いい。だいたい、これが普通なんだよな。ぶつぶつ自己暗示の如くに独語する夏洌を不信感まるだしの目で見

上げ、おうかは息をついた。
「あれ、そろそろ帰りたくなった？」
耳ざとくため息だけは聞きつけ、夏洌が視線を落としてくる。べつに、と冷たく言い放って、おうかは歩を早めた。
「いやよ、せっかく羽を伸ばせるんだもの。もっと楽しみたいわ。って、聞いてるの？　夏洌」
「あれー。お、あそこにいるのは！」
おうかの言葉を通過して、夏洌は眼を細めた。すこし先を歩く、あのふらふらした人の良さそうな控えめ青年は、たしか。
「明智さん！」
桜稲荷の禰宜（ねぎ）、明智だった。

第六章～姫神様の野望３（後書き）

これのどこが姫神様の野望なんだ？という疑問は私めにもございます（苦笑）タイトル、つけなくていいのならつけたくない。有り体に言えば、下手です、タイトル付けは。悶々と悩んでこれか、と我ながら…

それはさておき、そろそろ転へとむかう頃でしょうか。今しばし、お付き合い願いますよう…

第六章～姫神様の野望４

気のよさそうな禰宜の姿を認めて、夏洌はほっと息をついた。稲荷の禰宜なら、空狐の行方ぐらい知っていて当然だろう！　そう考えて安堵した夏洌とは対照的に、おうかは身を縮めて夏洌の陰に隠れる。

「明智さん！」

「ちょっ、なんで呼ぶのよ！？」

ふらふら歩く明智に声をかけた夏洌は、思い切り腰を叩かれた。

「えぇ？　だって、明智さんは稲荷社の禰宜なんだよ、だから」

「それっくらい、知ってるわよ！　だから、なんで明智を呼ぶのっ？」

「あれ、明智さんと知り合い？」

「だからなに！？」

くわっと夏洌をにらみつけて、おうかは踵を返そうとした。しかし、たかられるわ殴られるわの夏洌は、納得がいかない。おうかの襟首を引っ掴み、逃がすまいとする。

「離しなさいよ！　ちょっと、襟つかまないでよっ」

「ほら、空狐さんを探したいんだろ？　だったら、稲荷の禰宜に訊くのが一番」

「明智だけは、ぜーったいにイヤなのよ！」

天下の往来で言い争う男女。これが妙齢（いい年）した男女なら、「あー、痴話喧嘩かぁ」と見られるだけなのだろうが。今回は違う。十（とお）歳ほどの見目可愛らしい女の子と、奉公人然とした青年。すわ、人さらいか！？と間違えられても文句は言えない。

誰かが同心に連絡する前に、明智さんが気づいてくれたのが幸いだった。

「夏洌さんじゃないですか、どうしたんです、こんなところで」

人受けの良い顔の明智がいれば、自然と場が和んでくる。不信感

顕わにいきさつを見守っていた通行人たちも、ほっとしたように通り過ぎていく。
「使いの途中で、この子と会って。なんか、空狐を探してるとか――」
「空狐？」
聞き返しつつ、明智は夏洌の後ろに隠れたおうかを見た。途端、端整な顔立ちが驚きに染まっていく。

「――姫神様…？」

唖然と口を開けておうかを見つめる明智に、夏洌はきょとんと首を傾げる。なにか、重要な一言を耳にした気がするのだが。
ぽかんとする夏洌を放っておいて、明智はおうかと目線を合わせるように膝をついた。
「姫神様。い、いままで、どこにいらしたのです？　もう、私どもは心配で心配で」
姫神――と呼ばれたおうかは、居心地悪そうに視線を彷徨わせる。夏洌の袂を握りしめて、明智と目を合わせないように言う。
「……ちょっと、江都の行きたかったの。べつに、あいつを探しに行ったわけじゃないのよ」
「あいつとは、まさか空狐さまにございますか？」
「だから、あいつを探しに来たわけじゃないのっ」
ほとんど怒鳴っているふうだが、明智は眉ひとつ動かさずに頷いた。
「ご心配、いたしました」
「出かけたって、いいじゃない」
「えぇ、お出かけになるのは構いません。――ただ、託宣のひとつもなく、お供のお狐を振り切ってしまわれるのは、おやめください」
心配しました、と何度も言われると、さすがのおうかでも堪えるのか。痛そうな顔をして、ちいさくちいさく言った。

「――ごめん」
「いいえ、姫神様をご心配申し上げるのが、我々の仕事のようなものですので」
「さりげに嫌味よ」
「おや、そうですか？　あ、夏洌さん」
にこやかに笑う明智が、立ちつくす夏洌に気がついた。立ち上がって、夏洌にむかって頭を下げる。
「姫神様をみていてくださったのですね、ありがとうございました。なにか、ご迷惑をお掛けしませんでしたか？」
「あ、いや……。え、っと」
「もしや、姫神様がご迷惑を！？」
「いややっ。迷惑だなんて！」
必死に否定しようとした夏洌の努力虚しく、おうかちゃんご本神（ほんにん）が嬉しそうに告白する。
「明智、見てみて。夏洌に買ってもらったのよ！」
二寸ばかりの土形（にんぎょう）を満面の笑みで見せるおうかに、明智が顔色をなくした。
「たかったんですか！？」
「失礼ね！　夏洌に買ってってお願いしたら、買ってくれたのよ！」
本当ですか、と明智に問われ、夏洌はあいまいにうなずく。おうかの言うことは、たしかに合っている。ただ、「祟る」と脅したことは内緒にしているだけだ。……それがいちばん、たかりの証拠なのだが。
「なんだか、納得いきませんが。まあ、夏洌さんが言うなら、一応認めておきましょう」
「あたしって、信頼ないのね」
「ご自身の常の行動を鑑みていただければ、その理由は簡単に出るかと」
「――すみません」
きゃんきゃん吠えていたおうかと、まるで保母さんと化している

明智がそろって顔を上げた。
「なんでしょう、夏洌さん」
「えーっと、姫神ってのは、神様ですよね」
「あら、夏洌。それっくらいわかんないアホなの？」
「姫神様、本人をまえにして、そんなことを言わないでください。姫神様の言霊は、けっこう心に来ますので」
真顔で言う明智もなにげに酷い気がする。酢を飲んだような表情になった夏洌は、それでも気になったことを訊く。
「つまり、おうかちゃんは神様？」
一瞬、惚けたおうかと明智は、すぐに立ち直って言った。
「もちろん。おうかさま……と呼ばせるなんて、もっとマシな呼び名は無かったんですか」
「うるさいわね。無かったのよ。――あら、夏洌が固まってる」
なにげなく見上げた夏洌が固まっているのをみて、おうかは怪しげな笑みを浮かべる。いたずらを考えたときの顔だ、と明智が気づいたときには。
「夏洌さん！」
なぜかぐらりと傾いだ夏洌の身体。あわてて明智が支え、そのまま険のある顔でおうかを見る。
「……姫神様、これはいささか酷いいたずらでございましょうに」
「そうかしら？　夏洌、疲れてるみたいだし、寝させてあげたのよ」
たとえ、その方法が呪いもどきだとしても。

路のど真ん中で睡りはじめた――姫神の呪いにかけられて気を失ったともいう――夏洌は、どうやって運んだのか、異形屋で目を醒ました。
「とどのつまり、俺は神様にたかられて、殴られて、江都観光の案内人にさせられた挙げ句、わけのわからん術にかけられたってことですか」
「わけわかんないって、どういう事よ！？　あたし、失敗なんてし

ないわ！」
なかば唖然と言う夏洌に、姫神はきゃんと反論する。一暴れしそうな少女を抑えつつ、明智が真面目な顔で頷いた。
「そういうことになりますね。――良かったじゃないですか、姫神様と関わり合いになれるなんて、よっぽどの運気の持ち主ですよ」
「良くないよ、と思うのは俺だけでしょうか…」
どんよりと打ちひしがれる夏洌に同情したのは、なにも奉公人だけではあるまい。家具のうらから、梁のうえから、同情じみた笑い声がある。
「そんなことより。これが、今回の御礼でございます」
目下、最大の悩みを「そんなこと」呼ばわりされた夏洌は、もはやぐったりと床に伏す。同情の笑い声が増えたのは、気のせいではあるまい。
「よろしいので？」
そう訊いたのは、多喜次だ。対価はいらない、と口では言いつつも、手はしっかりと謝礼を受け取っている。生きるためには金がいる。金を得るためには仕事をしなければならない。まぁ、夏洌は哀れだと思うが、それとこれは別次元の話。あとで饅頭のひとつでも買い与えてやろう、と出来た番頭は考える。
「姫神様の面倒を見ていただいたのですから。当然のことでございましょう」
建前を分かっているから、明智も笑顔で応じた。二度目に差し出され、ようやく番頭もうなずく。
「そうですか、では遠慮無く」
遠慮無く、と言う前に謝礼の包みは小判箱の中に収めている。掌大の包みだが、中身は期待して良いはず。なにせ、祭神を見つけたのだから。
お茶のいっぱいでも、という多喜次に、明智は首を振る。
「いえ、そろそろ帰らなければ、神主殿がボケそうなので。さて、姫神様。そろそろ失礼いたしましょうか」

「そうね、町に降りて人間を見回るのも、けっこう楽しかったわ」
いまだ衝撃から立ち直れていない夏洌を突きながら、姫神は笑う。差しのべられた禰宜の手を取り、やおら立ち上がる。にこやかに笑う異形屋一同に、優雅に礼をひとつ。
「今日は、どうもありがとう。なにか困ったことがあったら、あたしに言ってちょうだい。出来る限りのことはしてあげる」
「…どういたしまして。姫神さまも、お風邪なんてひかないように、気をつけてくださいね」
鈴夜にせかされ、ようやく顔を上げた仁琥が言う。顔には不機嫌が張り付いているが、そこには目を瞑ってもらおう。（見た目だけは）同年代な仁琥に言われ、姫神も小さく笑う。
「今日は本当に、楽しかったわ」

では失礼します、と言った明智に腕を掴まれた姫神は、思い出したように夏洌を見上げる。
「夏洌、今日は楽しかったわ。だから、お礼にひとつだけ教えてあげる」
幼い風貌に似合わず艶やかに笑ったおうかは、いたずらっぽく人差し指をあげた。
「夏洌はどうも、あいつに縁が繋がってるみたいだわ。」
「……あいつに？　せめて、こう…もうちょっと、わかりやすく」
「残念。あたしたちにも理はあるの。――これ以上は、理にふれるわ」
「はい？」
夏洌が意味をよく解さないうちに、姫神は明智の腕をひく。苦笑した明智が一礼して歩き出したのに合わせ、姫神も手を振った。
「じゃーねー。また、遊びましょー。あたし、夏洌は大好きよーっ！」
釣られて手を振り返した夏洌の袖を、仁琥が不機嫌そうに引く。視線をさげれば、どこかご機嫌斜めの主人の視線と行き会った。

「倉稲魂命となにしたの？」
「なにって…。一日従者をした、というか、やっかいな観光客に引っ掛かったていうか」
言葉を濁す夏洌に、仁琥が目を瞠った。
「おうかちゃんと、いろんなとこ行ったの！？」
「まぁ、寺とか神社とか…。空狐さんが行きそうなとこに」
「ずるい！」
「え？」
ずるいずるいを連呼する仁琥に、夏洌は困り切って多喜次を見る。助けを求められた番頭は、たのしげに――じつに恐ろしく見えるのは、仕方ない――顔を綻ばせた。
「あ、あの」
「どうも、倉稲魂命様に惚れられたようだな。夏洌は」
「うぇえ！？」
情けない声を出す夏洌に、仁琥は不機嫌丸出しで鼻を鳴らした。
「そういうの、浮気っていうんだよ！」
「浮気って…」
まさしく言い捨て。もしくは言い逃げ。言った途端に店に引っ込んでいった仁琥を唖然と見送って、夏洌はなんとも言えない顔だ。
「そうそう、浮気って言うんですよ」
「夏洌が浮気か。おやおや、旦那様のご機嫌を損ねたなぁ」
「仁琥様のご機嫌を損ねるたぁ、良い度胸だねぇ」
からかわれ、夏洌は思わずへたり込む。笑いながら店へと戻っていく奉公人たちと、座り込んだ夏洌を交互に見て、多喜次はすこし考えた。
「夏洌、あとで私の部屋に来い」
「はっ？」
「お説教だ」
「えぇっ？　冗談でしょう？」
「あながち、冗談でもない。いいな、必ず来いよ」

強面番頭にサシの呼び出しを喰らった夏洌は、深く息をついた。お説教ぐらいなら受けるが、それ以上の話には進まないことを祈ろう。店番役の異形に一声かけて奥に戻った多喜次を追って、夏洌も店面を後にした。

さて、人気の無くなった異形屋の店先。

やけに静かだった異形達は、ひそひそと言い交わしている。

《アホ夏は、どうも稲荷に関係するらしいな》

《…倉稲魂命（ひめがみ）様に？》

《道端に落ちてたものでも、食ったのではないか？》

《ありえるかもね。この前だって、お膳の下に落としたものを口に入れてたわ》

《……なんとみみっちいこと》

青行燈の呆れた声に、同意する意見がいくつかあがる。しかし、それもすぐに収まった。赤座布団に鎮座した貔貅（ひきゅう）の低声で、場の雰囲気は零下まで下がる。

《そんなこと、どうでもよい。乃公（だいこう）が知りたいは、あやつがどうして異形の匂いを持っているか、だ》

《貔貅にもわかんないか。おいらは、だいたい検討がついているぞ？》

雷獣の言葉に、貔貅の機嫌が地に落ちる。異形屋の異形を二分化するこの筆頭異形。仲の悪さは、水と火だ。

《ほお、ならば教えてもらおうか》

《狐らが忠告を与え、さらには倉稲魂命様までその手がかり（ヒント）を与えてくださったんだ。となれば、ことは神狐に関連することだろうな！》

二股の尾を振り、雷獣は貔貅をにらみつける。貔貅もまた、雷獣をにらみ返した。

《落ちたものだな。誇り高き異形が、ひと如きに肩入れするとは》

《どんなことを言われようとも、おいらは気にしないぞ。貔貅、おまえ、友達いないだろ》
貔貅が孤高不恭なのは周知のこと。それをわざわざ言うとは！
店のなかに集っていた異形達が、そろりそろりと姿を消し始めた。
《それとこれとは話が別であろう！？　な、なにゆえ、ここでそんな話を持ち出すのだ！　乃公は、友達なんぞという軽々しいものはいらん！》
《ふーん、あっそ。ま、おいらは友達百匹いるモンね》
《おーぬーしーっ》
《さ、椿姉のとこに行ってこよー》
《待て！　ぬしっ、乃公を愚弄するか！》
《おいら、難しい言葉なんてわかんなーい》
気むずかしい異形が思いを寄せていることを知っていて、あえてからかう雷獣。それに乗せられる貔貅。すでに、この時点で店の中は店番を言いつけられた異形と、言い争っている二頭の異形だけだ。
当初の目的を完璧に忘れ、貔貅と雷獣の喧嘩は続く。

第七章～来訪した　いかずち

――なにかおかしい。

帳場で算盤の珠をぱちぱち弾いていた夏洌は、しきりに首を傾げた。

いや、そもそも異形屋などという訳の分からん店に奉公していること自体がおかしいのだが、この際その話は置いておいて。

おかしいのは、この店に集う異形たちなのだ。

なにかにつけて、夏洌を観察しに来る異形たち。おどつきながら、夏洌のご機嫌を伺いに来る異形たち。アヤシイ動きをして、夏洌を見張る異形たち。

明らかに、誰かに言いつけられての行動だろう。

異形たちに命じることが出来るのは、建前上では店の主人の仁琥だけなのだが、他にも異形を動かせる者はいる。

「大方、多喜次さんあたりなんだろうなぁ…」

異形屋番頭の多喜次は、なぜか鋼鉄の出刃包丁を所持していたりする。なんでも異形の刀鍛冶である一本だたらを脅して鍛えさせたという“なんでもぶった切れる鋼鉄出刃包丁”らしい。それを脆弱な異形さんたちの前にちらつかせて脅す多喜次。想像に難くない。冷たい想像をしてしまった夏洌は、ぶるりと身体を震わせてその想像を追い出した。

「あれー、どうしました？　寒気でも？」

「いや…、極寒の想像をしたらぶるりと…」

やけに大きめの箱を抱えた正吉に言われ、夏洌は曖昧に笑んだ。

さすがに、番頭の恐怖映像を想像したとは言えない。気の良い、というよりおっとりしている同僚は、そうですかぁ、と笑う。

「あ、終わりました？　夏洌さんが算術得意でよかったですよ。多喜次さんったら、算盤が大の苦手らしくて…」

これもお願いしますね、とにこやか笑顔で差し出された算帳を受

取ながら、夏洌はなんとも言えない表情を浮かべた。
「大概の店じゃあ、読み書き算盤は必須なのに？」
「そうなんですよ。鈴夜さんも、あまり得意とはいえなくて…。ま、私は論外な下手さですけどね」
従って、異形屋の帳場は夏洌に任されることになっている。危うい経営状態だと思っていたら、まあまあ繁盛していたのには驚きだ。いや、なら雨漏りを直したり買掛けを使ったりしてもいいのではないだろうか。
疑問を口にしたところ、そばにいた正吉が答えをくれた。
「異形屋を利用する方々のうち、半数ほどが人外の方なんですよ。だから、傍目には“閑古鳥の巣”なんて風に見えるんです。まあ、つぶれない程度のひとのお客もありますし、人外の方からの収入は裏ということにしてるんです」
商人たちの噂は恐ろしいですからね。用心に越したことはありません。
にっこり笑ったまま、表情ひとつ変えずになにげに暗い話を言う正吉に、夏洌は我知らずに唾を嚥下する。下手したら、番頭より怖いんじゃないか、この小僧は、などと考えていると。
ふいに店の中が翳った。
もしや、などと考えている間に、ゴロゴロ……と遠雷が聞こえ始める。店の中にまで水の匂いが入り込んできて、晩夏に似合わない冷たい風が吹き抜けていった。
「あちゃーっ、夕立が来ちゃいますよ！」
あわてて正吉がのれんを下げに行く。明かり取り兼風通し用に開けておいた格子窓を夏洌が閉めに向かうと、屋を鳴らす異形たちが騒いで急な雨降の来訪を告げた。
《ぎゃっ、あめあめ！》
《あめだっ、雨！》
《濡れりゅーっ》
《桶桶おけー》

ぎしぎしと鳴り響いて、梁の上の埃を落とす家鳴たちを睨み上げ、小僧ふたりが叫ぶ。
「揺らさない！　ホコリ落ちてくるでしょうが！」
「さすがに店じゃあ、雨漏りなんてしないだろう」
そーですよー、なんて言いながら、正吉が準備よく桶を抱えてくる。呆気にとられた夏洌が、正吉を見る。
「え、するの？」
「だいじょーぶですよー」
棒読みだ、完全なる棒読みだよ。
そう言っている間にも、雷は近づいてくる。薄暗くなった店内を刹那に照らしたあと、ほんの間をおいて大きな雷鳴が轟く。
「仁琥、大丈夫だろうかな」
「あぁっ、忘れてました！」
なぜかあわてた正吉が、仁琥の休む庵に向かいかけたとき。ひときわ大きな雷鳴があたりをつんざいた。雷鳴に重なるようにして、幼い悲鳴――おそらく仁琥のもの――が響く。
「ふぎゃぁぁぁぁぁっっ！」
これ以上ないほどに泣きべそをかいた仁琥が、鞠のように店に転がり込んでくる。そのままの勢いで座っていた夏洌に突進…というより頭突きをかます。
「ふぎょおっ」
「うわーーーんっ、雷なんて大嫌いだもーーーんっ」
「……若は、雷が大嫌いだそうです」
鞠のごとく丸まった仁琥に押し倒された夏洌に、正吉が申し訳なさそうに言った。

「なんで、俺に突進してくるわけよ…。べつに、正吉さんでもよかったのでは？」

「だって、正吉立ってたから…」
えっぐえっぐと泣きながらも、立っている人間を押し倒さないだけの理性は残っていたらしい。雷がなるたび、空が光るたびに震えてしがみついてくる仁琥の頭を、慣れない手つきで撫でてやる。
「……なるほど」
座っている人間なら良いのか、という疑問は残るが、まあそこは許容範囲で。泣いている幼子に対して、ひとは非情になりにくい。
「仁琥にも、苦手なもんってあるんだな」
一時は夏洌を窒息させんとする勢いだった仁琥も、ようやく落ち着いてきたようで、正吉の差し出した湯飲みを受け取りながら頷く。
「だって、雷神さまが来るんだもの」
「雷神？　稲妻の神だろう、それって。なんでイヤなんだろう」
正吉は知っているか、と問おうと同輩を見ると、なにやら物言いにくそうな表情を夏洌に向けてくる。
「まあ、神様ですからね。いろいろと、厄介なんですよ。神様のほうが……」
「おかわりッ！」
すっかり荒んだふうの仁琥に、正吉がおとなしくお茶のおかわりを注ぐ。ぐびぐびと飲みっぷりの良い様を見ると、夏洌はそれ以上の追求を諦めた。
さきほどよりも激しさを増した稲光と雷鳴がひっきりなしに空を騒がし、店のなかまでも騒がす。
「雷って、稲妻っていうでしょう」
いきなり、正吉が言う。なにを言い出したのか、と目線を向ければ、正吉がほんわりと笑って続けた。
「雷が鳴ると稲が良く育つから、雷は稲の妻なんだ、って意味なんですよ。知ってました？」
「それは違うよ。落雷があった田圃のほうが、生育がいいんだ。だから、雷は稲の妻だろう？」
「あ、そうなんですか？　初めて知りました」

「だからぁ？」
ほけほけと和んできたところに、仁琥のどすの効いた声が割り込む。よほど雷が嫌いなようで、ご機嫌斜めだ。
「いや、あのですね。ほら、稲妻ってすごいでしょう？　ゴローッ、ピッカーッ！　って感じで。妻、っていてるからには、女神なわけ……えっとぉ」
うまく言い表せず、困っている様子の正吉の意を酌んだ夏洌は、そのあとを引き取った。
「つまり、稲妻は女神なわけで、でも女神にしちゃあ、やることが荒っぽい。だから、稲妻の髪はとぉってもの力強い女のひとなのか……って感じ？」
「そう！　そうなんですっ！」
すっきりした表情になった正吉が、手を叩く。
「そう思いません？　若も」
「……雷神さまは、むっさいおじさんだったよ？」
「あ・・・。たしかに」
「女のひとっぽさなんて、これっぽっちも無かったんだから！」
「うー、そういえばそうでしたね……」
おいてけぼりを喰った夏洌は、居心地悪いように何度か尻を浮かす。気づいた仁琥が、ぶすっとしたように教えてくれた。
「まえに、雷神さまに拉致されたんです。あのおじさん、なんか変なひとでぼくに女の子の格好をさせるんですよ！　ぼく的変なおじさん番付、堂々第一位の横綱ですっ」
「女の子の格好……」
きっと、ものすごく可愛いんだろーなー、などと考えている夏洌を見て、仁琥がそっぽを向く。
「あ、ごめん。ついつい…。で、なんだっけ」
「稲妻の神は、どんな大女かって話ですよ」
手代も番頭もいない店では、小僧たちがうわさ話に興じる。つらい奉公生活の少ない息抜きでもあり、貴重な情報収集の時間でもあ

る。
「逆さ髪で、お福さんみたいな顔で」
「ちょっと赤ら顔！　それで、かなりの酒豪とかでしょうかね」
妄想――否、想像は無料(ただ)である。座布団に座って、呼び出した子猫又のほっぺ――とおぼしきヒゲの辺り――を引っ張る仁琥が、ふいに顔を上げた。
「……お客さんみたいですよ」
「え、こんなときに？」
「だれでしょうね？」
立ち上がった正吉が三和土に降りたとき、今日一番の雷鳴が空を揺るがした！
「ひぎゃぁぁぁぁーーーーーっ」
仁琥がぎぃぅーと夏洌に抱きついて、雷に負けぬ劣らぬ悲鳴を上げた。雷鳴と共にきたお客を案内した正吉も、その悲鳴には目を瞠る。
「す、すみませぬ。若は、雷が大の苦手でございまして…」
それを聞いて、お客はいきなり頭を下げた。
「それは申し訳ございませぬ。この雷鳴、わたくしが呼びしものにございまして。――まさか、異形屋の主人殿が雷を怖がられるお子様とは、思いもよらず…」
奇妙奇天烈なことを聞いた気がして、異形屋の面々（三人）はお客を凝視する。その視線を受けて、お客が頭を上げた。
「わたくし、雷媛(らいえん)と申します、いなづまの神霊でございます」
そのひとは、とても綺麗な女性だった。千年の昔、名を轟かせた小町なる美人も裸足で逃げ出すほどの。

第七章～来訪した　いかずち（後書き）

気がつけば１２月です。師走です。
でも、まだまだ物語のなかでは晩夏。……どうぞ、気にしないでくださいませ。

そういえば、稲妻って、ほんとにコメの豊作に関係するみたいですね。生物の授業で習いましたが、まったくもって頭の中に残っていない自分…。

第七章〜来訪した　いかずち2

綺麗な、とありがちな言葉で片付けてしまうのが惜しいほどであった。

目を惹きつけて止まないのは、どこだろう。どこかを探ろうとすると、すぐにほかを見てしまい意味がない。一際目立つの、つややかな射干玉（ぬばたま）の黒髪はさすが女神だなぁ（神だけに）と思うほど。

「雷鳥たちは帰りましたから。とうぶん、雷は鳴りませんわ」

「よかったです…」

ほっとしたふうの仁琥に、雷媛なる名の異形――というより神霊――はほんの僅かに笑んだ。米粒程度の笑みで、成人男子二名はくらりと来る。

「あ、そうそう。雷彦（らいげん）が、とんでもないことをしてしまったみたいね。同輩として謝らなければなりませんわ。――その節は、まことに申し訳ございませんでした」

「い、いえ！　雷神さまには、多喜次がたっぷりお説教していたみたいですから！　もう、大丈夫です」

「まあ、そうでしたか！　フフフ、わたくしも、あの雷彦めをたあっぷりお説教いたしましたの。多喜次って方とは、気が合いそうだわ。どこにいらっしゃるの？」

「すこし出かけてて。じきに、戻ってくると思います」

にこやかな会話の内容を聞き、夏洌が目を瞠る。ちょい待て、雷神を説教した？　あの鋼鉄拳をお見舞いしたのか。神様相手に。……多喜次への接し方には気をつけねば、と正吉を見れば、彼もまた、瞠目している。

そこに、一頭の異形が姿を見せた。

ひょこひょこと、犬のように尾を振りつつ歩んできたのは雷（いかずち）とともに去来する異形、雷獣。雷繋がりで親しいのだろうか、と正吉が横目で見る。

《媛、おいらを覚えてらっしゃるか？》
雷媛は、二本の尾を振りつつ雷媛に問いかけた。どうやら、親しい仲らしい。
「まあ、雷獣ではありませんか。息災（げんき）でしたか？」
《おう、媛。おいらは元気勇気笑顔満載な日々だったぞ！　媛はどうであったか？》
「わたくしも、元気でしたわ。毎日、走り込みをしておりますの」
《変わらないな、媛も！　走り込みは、三里ほどか？》
「いいえ、ちょっと増やして十里ほどに」
なるほど、と雷獣は二尾を振る。その何気ない会話を聞いて、雷媛に惚れかけていたオトコどもは目を瞠った。走り込みを十里！？
なんとも恐ろしいお嬢さんだ。というより、その外見に比例しない中身の凄さ。
「ところで、今回はどんなご用で異形屋に？」
ようやく本題にふれた仁琥に、雷媛はぽんと手を打つ。ひとつ頷いて、やおら切り出した。
「わたくし、異形を借りたく存じまして」
「……貸し出し、ですか？」
「えぇ、異形を借りたくて」
「珍しいですね。神さまが、異形を借りるなんて」
いつもは、依童（よりまし）をお探しでしょう？　それか、都のお菓子名所案内ですよね。あ、近頃、凪瀬屋のいちご大福が人気なんですよ。いつもみたいに、食べに行きます？
菓子食べたさに人間（じんかん）に降りてくる神様。――もはや想像に難くない。暇ゆえに社居を飛び出した姫神もいるし。
しかし、雷媛はそのどれにも魅力を感じないようで、首を横に振った。
「いいえ、やはり、異形をお借りしたいのですわ」
「異形の貸し出しですね。――あの、多喜次が帰ってくるまで待ってもらえますか？　じきに、帰ってくると思うんです」

困ったような仁琥とは対照的に、喜んだのは雷獣だ。立ち上がって、雷媛のもとで笑み顔をつくった。
《異形が必要！　ならなら、媛。おいらを借りるか？》
ばっしばっしと犬のように尾を振りながら言う雷獣に、雷媛はいいえ、と首を振る。
「今回お借りしたいのは、雷獣なんかではないのですよ」
《な、なんかって…。なんかって、媛よ。おいらはなんかなのか！？》
尊敬――というより崇拝しているらしい雷媛に“なんか”扱いされた雷獣は、すごすごと異形本に退散していく。その後ろ姿があまりに哀しい。そのあまりの落ち込み様に、雷獣と仲の悪い貔貅が彼を慰めていた、というのはまた別の話。
一方、雷獣の落ち込みなど視界の端にすら映らなかったらしい雷媛は、仁琥に向き直った。
「えぇ、お待ちします。なんでしたら、雷鳥たちに、番頭さんを迎えに行かせましょうか？」
「いいえ、大丈夫です。ぼくになにかあったら、多喜次はすっ飛んで帰ってきます。……たぶん、今頃、走ってるんじゃないでしょうか…」
「主人思いの番頭さんだわね。いろいろ、よろしくお願いするわ」
雷媛の言葉に頷くと、仁琥は雷媛に茶を勧める。
「多喜次が帰ってくるまでに、お話を聞かせてもらえますか？」

第七章～来訪した　いかずち２（後書き）

最近、はたと気づけばツンデレ女神やら草食系優男君を書いている拙文です。
書き始めたころから変わらない、この好みとはいったい……？

第七章～来訪した　いかずち　閑話

ゴロゴロと鳴く雷雲を引き連れて空を散策中の雷媛は、ふと下界を見下ろした。どっかんどっかん一暴れして額に輝く汗もきらきらしく、そろそろ帰山しようかなぁ…なあんて算段をたてていたときのこと。

「……なんでしょう」

上空高くいる雷媛のもとまで、風脈に乗ったのか、良い匂いがふわんふわんと漂って来た。いかにいかずちの神霊とはいえ、見た目は乙女。らしくないけど、中身も一応乙女。

「なに。なんなんでしょう、この良い匂いは！」

なんとも鼻をくすぐる、甘ーい匂い。時刻はちょうど午八つ刻（三時）頃。お昼に食べたものも消化して、そろそろ小腹が空いてきたなぁーと感じる時間帯なわけで。お腹がぐるるー、と鳴るのは仕方ない。

ひくひく鼻を動かして、雷媛は匂いのもとを探してみる。周りを飛ぶ眷属たち（雷鳥ーズ）がぎゃわぎゃわと鳴いて主人を諌めた。うるさく鳴いているが、黙殺しておこう。聞く気皆無の雷媛に、雷鳥たちが翼をすくめた。…なんて器用な。くちばしで息をついた雷鳥たちを放っておいて、雷媛はひらり、と雷雲を下げた。

去り際の雷雲から、ひときわ大きな雷光が飛び出す。ついで空を揺るがした雷鳴に、下界の住人たちは驚愕する。

――下界がなんか騒がしいけど、気にしないでおこうかしら。

凄まじいまでの雷光雷鳴とともに降り立ったのは、東側に泉を望む大きな屋敷。その屋敷は人間たちが大事に大事にしているのを、雷媛は知っている。

白砂が眼にまぶしい庭に飛び降り、雷媛はあたりを見回した。漂ってくる、良い匂いのもとを探す。それは、すぐにも見つかった。

明らかに身分高い男が、庭に七輪を引っ張りだしてなにやら煮ている。おたまを熱していて、そのなかをくるりと回すと、なお甘い匂いが広がった。
「はんにゃ〜…っ」
なんて良い匂い。なぁあんて幸せな匂い。甘ーくてこんがりした匂いに、雷媛は座り込んだ。やっぱり乙女なのよ。
「…いかずち……から女子(おなご)？」
和んでいたら、なにやら驚いた声が掛かった。和んだまま、顔を上げれば、なにやら品の良い袴が視界に入る。そのまま、袴をたどっていって…。
「ぎゃっ」
おもわず飛び出した声に、男の顔が歪む。紺色の袴を穿いた男がおのれを見下ろしている。
「……どちら様？」
困惑げに問いかけられ、男が項垂れた。「それはこちらが聞きたいことだ」
首を傾げた雷媛に、男は酢を飲んだように眉を寄せる。
「――…空からの訪い人とは。珍客だが、茶でも饗した方がいいだろうか？」
七輪に乗せたおたまをいじりながら、男が問う。応えが無いことに顔を上げると、なぜか一点を凝視する雷媛に行き着く。おのれの手元を凝視したまま固まる珍客を見て、苦笑した。焦茶色の菓子を差し出して、誘った。
「食うか？」
「…いただきますわ」
思いのほか素直な返答に、男は吹きだした。
「――では、高縁へ招こうか」
浮石糖(かるめいら)なる南蛮菓子を口に運べば、匂いに負けぬ甘さとこんがり

焼けた砂糖の風味が広がって、食めばさっくさくと軽い歯ごたえ。なんとも幸せなお菓子。神仕たちも、こういう洒落た神饌(おそなえもの)をすればいいのに。

「おいしいですわ…！」

次から次に菓子を口に放り込んでいく珍客に、男はやや呆気にとられてその様を見守っていた。なにか言えば、きっと百倍になって返ってくる。沈黙は千両にも勝るのだ。

「こちらは？　そちらのお菓子は？」

「…食べるがよい」

若草色の小袖に紺色の袴なる出で立ちの男は、雷媛の言葉通りに菓子を差し出す。舶来の菓子が、恐るべき早さで消えていく。

「こちらは、“はるていす”という菓子。それは加須底羅(かすていら)だ」

趣味の菓子を庭先で楽しんでいたために落雷の憂き目に遭った男は、息をついて茶器に手を伸ばす。母屋のむこうでは、家人たちが不安げな表情でこちらを伺っているようだ。それらを蹴散らす家令が偲ばれる。

「で、いかずちの姫。姫は我が屋敷にどのような用できたのか」

「ふえ？　用なんて、ありませんわ。お空を飛んでいたら、なにやらお腹をくすぐる良い匂いが漂ってきましてね。その匂いをたどったら、この浮石糖だったってわけですの」

「…では、本当に菓子食いたさに、庭をえぐってくれた訳か？」

男は手にした扇で庭を示した。超間近落雷に遭った庭は、白砂の一部分がぽっかり口を開けている。三尺程度の穴からは、いまだにぶすぶすと煙が立ち上っていた。男に習って庭を見た雷媛が、首を傾げる。

「なにか気に入りません？」

気に入らない、どころの話ではない。発覚した事実に、男はふるふると拳を震わせた。

「姫の食欲のために、私の庭が抉られたと！？」

なんということだ。信じられん傍迷惑だ。あそこには福寿草の一

群があったのに。小さな芽が萌えるのを見て、寒く寂しい冬を過ごそうかとも考えていたぞ。なのに…小さなゆとりのない冬こそ、寂しいものはないであろうよ。よよ、よよよ…。
　果ては袖を目元にあてて、泣き真似まで始めた男に、雷媛はむぅっと眉を寄せた。
「いいではありませんの、庭ぐらい。東側にある苑園（こうえん）に行けば、冬咲きの花などたくさんあるでしょう」
「天朝様から賜った株だったのだ…花を楽しみにしていたのに」
　はてテンチョウサマとはなんだろう。よく分からないが、相当に落ち込んでいるようだ。ほんのわずかな罪悪感がほろほろ湧いてくる。
「その……雷神様のお庭に咲く花などどうです？　テンチョウサマの福寿草などより、きっと美しゅうございますわ」
　たいそう嫌だけど雷神様にお願いして、一枝折らせてもらおう……などと算段を立てている雷媛に男は首を振る。
「いらない。――雷神よりも、天朝様のほうがいい。他の花なんていらない。もう一度、天朝様にいただく」
「…あー、さようですかぁ。では、遠世の桜草などは？　王母様の御桃は？」
　その後もいろいろ提案してみたが、ことごとくテンチョウサマに負ける。いったい、テンチョウサマとはいかに！？　いっそ意地の境地に達してやるとばかりの雷媛に、男は茶を差し出した。
「もういいから。頼むから、出来るだけ早く立ち去ってくれぬか？」
「なぜです。このように美しいおなごがおるというのに、あなたはテンチョウサマの福寿草ばかり」
「だから、福寿草は諦めると。――意外としつこいなぁ。香でも用意せねば、帰れぬのか」
「失礼ねっ、わたくしはあんな助平仙人の二の舞は踏みませんの。まだ食べてないお菓子があるでしょう？　それを食べてから、」
「包んでやるから、手みやげにして帰れ」

「まっ。なんていう男！　そんなにわたくしが気に入りませんの！？」
ぎゃんぎゃん吠える雷媛に、男は困ったように首を振った。「そういう意味じゃないんだ」
本日五つめの浮石糖に手を伸ばす雷媛に、男は言う。泰然と笑んで、その実、ひどく痛そうに。
「私は、狐憑きゆえ。あまり、噂をたてられたくないのだ」
狐憑き？　焼き菓子をくわえた雷媛は、首を傾げた。しっとり菓子を呑み込んで、勢いよく否定する。
「ありえませんわ！　あなたのような男に憑く、物好きな狐などおるはずもありませんものっ」
「誉められているのか、貶されているのか……」
なにやら項垂れる男に、雷媛はほん、と胸を叩いた。
「わたくしにお任せあれ。こんなにステキなお菓子をいただいたんです、お返しをせねばなりませんもの」
「なにをしてくれると？」
「わたくしたちの世界にはね、こういう諺があるの『困ったときの異形屋本舗。それでもダメなら組合に逝け♪』って」
異形屋とは、また変わった屋号だ。のほほんと思う男を知ってか知らずか、雷媛は勢いよく立ち上がった。
「わたくし、ただいまより、その諺を実行して参りますわ！」
ふたたび、激しい雷光が屋敷を包む。とっさに瞑ったまぶたを通してまで、閃光が瞳に焼き付いた。一瞬間を置いて、凄まじい雷鳴が轟く。
「いかずちが屋敷より生まれたなんて、どんな噂がたつんだろ……」
噂もみ消しに躍起になるであろう家令を思い、男は息をついた。

第七章～来訪した　いかずち　閑話（後書き）

閑話、になるのでしょうか。
この話は、別に書いておいたものをつなげたものでして。退治話をUPしようか、迷っております。

第七章〜来訪した　いかずち3

「で、異形屋にきたと？」
強ばった、というよりもはや硬直している多喜次の問いかけに、いかずちの姫はあっけらかんと笑う。
「えぇ、それ以外に理由がございますか？」
「お断りします」
「なぜです！」
「冗談じゃない。話を聞けば、あきらかに身分高き武家の屋敷ではないか。天朝様と知り合いなんて、よほどの武家だ。へたすりゃ、太守家に連なる氏かもしれんのだぞ。仁琥様に害が及ぶ。ぜったいに及ぶ。冗談じゃない！」
「んま！　あなたのような堅物男、雷彦以来ですわ！　頭の中まで、石灰岩でできているのね！　それか金剛石よっ」
「金剛石でけっこう。売っぱらったらいい値段になるんだっ。それにしても失礼な異形だなっ、それが依頼にきた異形の台詞か！？」
「失礼なのはあなたです。わけのわからない持論を振りまわしてると、いずれ、そちらの仁琥君に逃げられますわよっ。子どもの父親離れなんて、あっけないものなんですからね！」
「なん……っ」
固まる多喜次。言い切る雷媛。

両者一歩も引かぬ言い合いを見ていた仁琥が、正吉の袖を引いた。
「太守家ってなぁに？」
「この江都を治める、お武家の長です。太守様あのお城に住んでるんです」
「ほぇー。――あれ？　でも、雷媛さんの話じゃあ、その太守様はお屋敷に住んでるんでしょう？」
「んー、先代太守じゃないでしょうか？　それだったら、ご老人で

すよねぇ」
　よくわかりませんねと首を捻った正吉に、仁琥もそれ以上は問わない。ちらり、と番頭を見るが、その剣幕に押されるようにして眼を逸らした。放っておこう。触らぬ神になんとやら。
　しかしながら、これを治めなければ、きっとおやつ抜きだろうし。育ち盛りの食べ盛り。おやつは三食に並んで恋しいものだ。
　うん、と仁琥は頷いた。
「ぼく、貸すだけならいいと思うんだけども…」
「いけません！」
　即座に却下された。眉間のしわがとんでもないことになっていて、手代と小僧二人が顔を逸らす。唯一、果敢に挑むのは仁琥だけだ。
「なんでっ？　どうしてっ？　ダメな理由は！？」
「いけないって言ったら、いけないんです！　仁琥様は、いったいいつからあたしの言うことを聞かなくなったんです！？」
「今日から！」
「うっ……」
　びしっと言い切られ、そっぽを向かれた多喜次は胸を押さえてへたり込んだ。よほど堪えたらしい。
「いいもん。多喜次がダメっていうなら、ぼくが良いって言うもん。――払猫、いる？」
　古びた和書に問えば、しばし、間をおいて。
《……なにか》
「雷媛さんについていって、その……えーっと、男の人のお名前は？」
　くるりと愛らしく雷媛を振り返り、異形姫に南蛮菓子を振る舞った男の名を訊く。雷媛はすこし考えて。
「そういえば、聞いてませんでしたわ…」
「うっかりですね」
「うっかりしてましたわ」
　朗らかに笑いあう二人を見て、多喜次がますます拳を握りしめた。

握りしめすぎて、肌が白くなっている。
「貸すだけでもいけません。ぜったいにいけません」
「バレなきゃ、いいんでしょう。なら、大丈夫。払猫、できるよね」
《そりゃ、手立ては五万とありますが。――よろしいので》
ひょっこり和本から頭を出したのは、白茶の二毛猫。熊猫（パンダ）模様が可愛らしい。
「うん、いい。ぼくが許す。異形屋の店主はぼくだもの。多喜次ったら『いけません』ばっかなんだもん」
「仁琥様のためを思ってです！　そんなに言うなら、今日の晩ご飯はカボチャにしますよ」
「ぼ、ぼくカボチャ平気だもん！」
「そうですか、それは結構。では、ついでに人参もあげましょう」
「正吉ぃっ」
涙目で縋ってくる仁琥を抱えて、正吉が苦笑する。
「払猫なら、大丈夫でしょう。多喜次さん、どうしたんです？　いつもらしくないですよ」
「…狐憑きなんて、政戦の常套文句じゃあないか。太守家の争い事に、仁琥様を巻き込むつもりかい」
「若なら大丈夫です。そんなに締め付けると、ほんとに嫌われますよ。ねぇ、若？」
正吉の言葉に、多喜次が固まる。えぐえぐ啜り泣く仁琥に顔を向ければ、ふいとそっぽを向かれた。
「あのぉ」
遅々として進まない商談に、雷媛がしびれを切らした。
「そんなにお嫌なら、わたくしだけが払猫さんを連れてあの男の屋敷に行きますわ。なにしろ、こちらは人外の存在ですからね。不思議の二毛猫を連れてきても、そう気にしないでしょう？」
「…払猫を連れていくのは、決定事項なのか」
「そうじゃなきゃ、ここには来ませんわ。あなたは心配性なのよ。どういう育て方をしたのか知らないけども、子どもなんて、すこし

ぐらい乱雑に扱ったほうが丈夫に育ちますよ！」
「さ、若。どうします？」
決定するのは店の主人。ひとつの決定が店を潰すことにもなりかねないけど。それでも仁琥が決める。
「……払猫だけ、雷媛さんに連れてってもらおう。来た依頼は断らない。――お祖父さまの決め事だよ」
「若の決定通りに。ね、多喜次さん――って、撃沈してますか」
惚(ほう)けている多喜次を横目に、仁琥が二毛猫を抱き上げた。おのれの頭ほどもある猫をせっせと運び、雷媛の膝元に降ろす。
「ご希望の払猫です。期間はどうしますか？」
幼さばかりが目立つが、口調を糺し、しゃんと背筋を伸ばせば、年相応に見えた。それでも足りない威厳も精一杯に補っている。その様が微笑ましくて、ついつい多喜次は笑んでしまう。あぁ、カボチャ人参ばかりでなく、タマネギも入れてさしあげますからね。
「二日もあれば」
「えっと、策案はありますか？」
「ほぼ。あとは、行き当たりばったり上等で」
「そのぉ…貸出賃は…？」
「あ、そうでしたわね。相場はいかほどですの？」
「えっとぉ……多喜次ぃ」
ふいに視線を向けられて、にへら崩れていた多喜次はあわてて顔を糺す。
「はっ、えー。こういう件は初めてですし……。そうですねぇ、銀七匁ぐらいが妥当でしょうかねぇ」
「あら、意外と安いのね。払猫というのは」
《ふぎゃー…とでも反論しておくべきか…？》
雷媛の腕に抱かれた二毛猫が唸る。その頭を撫でて、仁琥は頷いた。
「じゃあ、決まりです。――払猫を二日。貸賃は銀七匁です。証文、しょうもん～」

喜々として証文をとりに向かう仁琥をちらりと見て、多喜次は払猫を睨む。白い猫耳をいじりながら、たいそう低い声で。
「百万が一、仁琥様に害意が及ぼうもんなら……。――覚悟しておけよ」
《ふがふがっふががっ！》
「うんうん」
満面笑顔で頷いて、払猫を解放する。なんともオソロシイ男じゃ。触らぬ神になんとやら。なにがあっても主を最優先にすべく、払猫は覚悟する。

「では、お借りいたしますゆえ～」
払猫を抱えたまま雷雲に飛び乗った雷媛を見送り、異形屋一同は空を見上げる。
雷雲と一緒に、雲も引き連れていってくれたらしく、空には一片の雲もない。
「雷媛さん、どんなふうに帰ってくるかなぁ」
「さぁ。――あ、夏洌！　帰りは武家町水路まで迎えに行けよ」
「えぇっ？　俺がですかっ」
わかりましたよぉ、と項垂れる夏洌を見て、仁琥が手を握ってきた。「ぼくのおやつ、半分あげますから。ね、だからそんなお顔はしないでくださいよぉ」
なんとも頼もしい申し出だが、鄭重にお断りしよう。多喜次が凄まじい目で睨んできている。
「ねぇ、夏洌さん！　一緒に大路まで行こうよ。虹が出てるかもしれないよ」
雷媛のおかげか、すこし気温が下がっている。そろそろ、秋物の小袖をこさえるべきか。ひかれるままに歩き出した夏洌は、のんびりと思う。
「正吉も行こう。ね、虹、見に行こうよ」

小僧ふたりをお供に、仁琥が大路を行く。

一方、存在すら埋没されているんじゃないかと思う手代は。
「一回も。一回も名前が出てこなかった……っ」
ふるふると異形屋の店先で震えていた。
「なんで…。なんであたしがっ」
「おや鈴夜。いつの間に帰ってきてたのかい。それなら良い。土物屋(やお)に行って、カボチャと人参とタマネギを買ってきておくれ」
「多喜次さん！　帰ってきてましたよっ。なんで呼んでくれなかったんです…ん？　かぼちゃ？」
「仁琥様、たってのご希望だ。腕を振るって、おいしいカボチャ料理を作ろうじゃあないかい」
ふふふ…と黒っぽい笑みを浮かべる番頭に、手代はこくこく頷いた。仁琥らが行った路とは反対に、土物屋へと急ぐ。

世に言う、――触らぬ神に祟りなし。異形屋に言う、――触れぬ多喜次に怒りなし。

第七章～来訪した　いかずち３（後書き）

年内に……と思いまして。
新年早々、試験が待っております（泣）次話投稿はそのあとになってしまうかと……。点数が悪かったら、もっと遅くなるんですけども（苦）

では、良いお年をば

第八章〜まっしろな空狐

目の前を流れる水路が、城下町と武家町を仕切っていた。幅三尺にも満たない水路ごときで、ひとの垣根は作られている。

魚が跳ねたらしく、ぽちゃんと水音が響く。それを聞くともなしに聞きながら、夏洌は息をついた。

「遅い……」

店を出たのは陽が中天にあったころ。それがどうだ。午八つ刻をしらせる鐘が鳴ったばかりだ。お天道様は元気溢れすぎ、陽でじりじり道を焼いてくれている。ついでに肌も焼けてくる。

「そもそも、なんで迎えがいるんだよ。異形だろ。異形ならひとりで帰ってこいよ」

屋敷まで迎えに行け、などという斬首ものの言いつけにはさすがに逆らったものの、精一杯の譲渡で橋まで迎えに来ている。

柳の下に避難しているのだが、さきほどから警邏の目がこちらをにらんでいる。そりゃ、立派な不審人物だろうさ。いつまで経っても柳の下にいる奉公人。変だろうな。変に決まってる。それにしても、警邏兵さんたちも暑いだろうなぁ。あんな武装しなくても、安全な町中なのに。暑いのは俺もだけどね。

やさぐれてきた夏洌は、なにげなく対岸を見た。涼やかな水面でも見て、和もうじゃないか。いやー、ほんとに暑いなぁ……って。

「あ、払猫だ」

あの独特の二毛猫は見忘れまい。白と黒の二毛猫が、へろへろとこちらに向かっている。なにやら背中に背負っているが、なんだろう。

「なにフラフラしてんだか」

すぐにでも駆け寄って抱き上げてやりたいが、なにせあちらは武家町。へたに白木の橋を渡れない。　それにしても、だれも抱き上げないんだな。あんな目立つ猫なのに。あ、異形だったか。

「おー、猫ー」
心配な足取りで橋を渡ってくる猫を抱き上げ、夏洌は警邏の目から逃れるように走り去る。
「猫、遅かったな」
《お、ほーこーにん。たしゅけろ。干からびりゅ》
「……なんか、縮んでない？」
《ひが、陽があんなに照っていりゅ。…みじゅ》
「海月（くらげ）かよ」
干からびて、へたるなんて。そうぼやきながら、夏洌は路地を折れる。棟割長屋（むねわりながや）の井戸を拝借しよう。
「すみませーん。水をいただきたいんですがー」
明るい笑い声が漏れ響いてくる板塀から、ちょいと顔をのぞかせた。
「あら、変わった猫じゃないか。干からびてるわよ」
「干からびるなんて、変わった猫ねぇ。あら、模様も変わってる」
「どこかのお店の奉公人かい？　あんたも大変だねぇ。さ、おいでおいで」
長屋の一角、井戸の周りで話し込んでいた奥様方が、板塀から顔をのぞかせた夏洌を迎える。井戸端会議の真っ最中だったようだ。
「すみません、お借りしまぁす」
「あぁ、お待ち」
置かれていた桶を井戸に放り込もうとする夏洌を、奥様のひとりが止める。
「その干からび猫、ずいぶんばててるみたいだからさ。桶に水がたまる前に、カラカラだよ」
これを使いな、と水の入ったたらいをくれた。掘り井戸ではない江都の井戸は、桶に水がたまるまで時間が掛かる。
「ありがとうございます。――ほら、払猫。ありがたくちょうだいしなよ」
《おー、助かったぁ》

たらいにつけてやると、しっぽを振って喜ぶ。猫らしくない仕草に、奥様方が目を瞠った。
「猫らしくないと思ったら、異形だったんかい」
「招き猫っぽいねぇ。ねぇ、水のお礼に幸運を招いてくれるかい？」
「おくまさんなら、旦那を招かないとねぇ！」
明るく笑う女性方に、たらいに浸かった異形猫はにいっと笑う。
息を呑んだ女性方に首をかしげながらも、猫は言った。
《招き猫じゃあなくて、払猫でしてね。――悪運を払うぐらいなら、朝飯前でさあ》
「あら、笑顔は恐ろしくても心意気は良いじゃないの！　干からびてたわりにね」
《なにせ元が紙だもんで》
「紙ぃ？　紙の分際で水に浸かるのか、大丈夫なのか？　溶けないのか？」
あわててておのれを引き上げた夏洌に、異形猫はたいそう不機嫌な顔をする。濡れた毛が張り付いて、とんでもなく貧相だ。
《勝手に持ち上げるな。紙を舐めるなよ、親水性抜群なんだぞ、耐水性もあるんだぞ》
内面は悪い猫に、夏洌は眉を寄せる。耐水紙は知っているが、親水紙とはこれいかに。
「――とりあえず、上がろ」
《む。信じておらぬな》
良いながら、異形猫は身体を振るった。身体を覆っていた水が飛び、抱えていた夏洌の顔や着物にしみを作る。
「……おまえな」
《うん、乾いた。――素敵なご婦人方、希代の招き猫職人が作った払い猫。その妙技をご覧入れましょう》
渋面の夏洌から逃れると、異形猫は優雅に立ち上がった。井戸端で立ちつくす奥様方にのどを鳴らし、一声鳴きあげた。なにかを爪に引っかける仕草をし、そのまま口に運ぶ。

《これで、長屋を襲う予定の不運は向こう一月分、食いました》
「一月かい」
つっこみを入れたのは夏冽だ。以外とけちんぼなんだな、異形猫め。
一方、不運を払われたらしいご婦人方は。
「……食った？」
ぽかんと口を開けたままだ。疑いの目を向けていたが、金を払ったわけではない。当たるも八卦当たらぬも八卦の気分で納得したようだ。
「ありがとさん」
「一月分でも嬉しいよ」
「良いことはするもんだねぇ」
口々に言い、異形猫を撫でていく。
「ありがとうございました」
《ありがとう、ご婦人方。――なにかお困りの際は、どうぞ異形屋に》
ぺこんと頭を下げて長屋を出て行く奉公人と猫を見送った奥様方は、顔を見合わせあう。誰からともなく笑いだし、しまいには長屋を包み込んだ。
「変わった猫だねぇ」
「変わってるのは、奉公人のほうだけどさ！」
朗らかな笑み声が井戸端に響いた。

水をあびて復活するなど海月じみた根性を見せた異形猫をお供に、夏冽は路を歩く。あたりは橙色で、帰途につく職人たちも多い。
「すっかり暮れちまったねぇ。早く戻らないと」
《奉公人》
あちこち歩いて犬にほえられ、猫に引っかかれ、馬には蹴飛ばさ

れた異形猫が夏洌を呼び止めた。前を歩いていた夏洌は立ち止まり、異形猫を振り返る。
「なに」
やけに堅い顔をした異形猫が小走りに夏洌に近寄ってきた。白黒の模様が橙に染まり、変わった色合いの猫になっている。
《おい、奉公人。――何かいやな予感がする。早く帰るぞ》
「なんで。まだ、こんなに明るいよ」
《たわけ。夕刻だぞ？　夕刻なんだぞ？　奉公人よ、おまえはそれでも異形屋の奉公人なのか》
「奉公人奉公人ってうるさいなぁ。奉公してるからって、異形に対して知識持ってるわけじゃないんだよ。なんで夕刻がだめなんだ？」
そんなこともしらんのか、と異形猫は息巻いた。小走りのまま夏洌を追い越し、なんども振り返って帰店を急かす。
《夕刻は逢魔が刻、大凶刻。いらぬ出会いも多い。早く帰るぞ》
「いらない出会い？」
聞き返したとき。
《奉公人っ！》
異形猫が突進してきた。思わず除けようとして、動きを止める。
《逃げるぐらいせんか！》
「むりっ」
精一杯の声で夏洌が叫ぶ。指の一本も動かせない。だって、体中がこわばる。
「殺される……っ」
《奉公人、動くなよッ》
異形猫が吠えて夏洌に飛びかかる。爪を立てて着物にしがみついて離れない。
「あ、ちょっ、破ける！」
《……離れて良いのか。わか》
「冗談です！」
本気で爪を引っ込めようとする異形猫に、夏洌はあわあわと首を

振る。
「猫、意外と良いやつだったんだな……」
《ふっ、それほどでもある。――あ、そうそう。危なくなったら、先に逃げるゆえな》
「はいぃっ？」
自己保身に走った異形猫に反論する間もなく、まわりの風景が暗幕に包まれる。
おあぁぁぁぁぁあん……
異形猫が低く鳴きあげて、世界が反転した。

第八章～まっしろな空狐（後書き）

払猫の話は、完章後に投稿しようかなと考えております。

第八章〜まっしろな空狐2

あたりはすでに夜闇の幕。大凶刻はすでに過ぎたようだ。
両腕は身体の後ろ手に縄で縛られ、口にはなぜか布が巻かれている。闇に慣れない目をしばたたかせて、夏洌はようように状況を理解してきた。
（まさかと思うけど、神隠しにあった？）
由緒正しい行方不明の原因だ。ここはどこだろうと興味本心で考える。
（しかし、これが噂に名高い神隠しだとは！　身を以て体験できるとはなぁ…っ）
――最悪だよ。思わず自己突っ込みで完結させてしまう。落ち着け、自分。神様が関わってるなら神隠しだけど、これは異形の仕業。だから、神隠しじゃない。
（つーことは、神隠しじゃなくて、異形隠し？　……恥ずかしくて、そんなことは誰にも言えなくない！？）
あたふたと魚のように動き回って、ひたすらに手の縄をほどこうと試みる。異形猫はどうしたろう。たしか、着物に爪を立てて、一緒にこちらに来たと思ったんだけど……。はて、そういえば傍らになんら熱がない。異形猫はどこに行った？
「猫っ？　――まさか、ほんとに逃げた？」
ありえる。あの猫ならありえる。ていうか、やりやがったな、猫。
「逃げたと言うより、助けを呼びにいったと考えよう……」
それっくらいのことはやるだろう。
ようやく闇になれてきた目で辺りを見回し、夏洌はなんとか上半身を起こす。少しでも、情報が欲しい気分だ。
《おう、起きたか。奉公人》
「猫っ！」
淡闇から聞こえた声に、涙が出そうになるほど安堵する。芋虫よ

ろしく這い寄って、声の主を認識した。
それは、たしかに獣の形をしているが。
「猫じゃない？」
《猫とは、払猫のことかえ？》
「えーっと、そうなんだけど、どこに行ったのかなぁ……って」
《猫ならば、なにやら三十六計と叫んで遁走したぞ》
「逃げやがったのか、あの猫！　多喜次さんに言いつけてやるっ」
迎えに行ってやったのに！　淡闇を払うなりなんなりすれば良いだろうが。
《――で、本題に入っても良いかの？》
「あ、はい。待ってもらったみたいで」
つい、答えてしまった。
「えっ。ちょっ、本題って？」
《ではな――》
「待った！」
この頃感じられるようになってきた命の危険を感じて、夏洌は獣を見る。
真っ白な狐の異形だ。大きな犬ほどもある体躯で、月色の眼は爛々と輝いている。赤い口元からのぞく切れ味抜群そうな牙は、いやがおうでも眼に入ってくる。
《なんじゃ》
わたしイライラしてます、と白い異形のまとう雰囲気が物申す。冷や汗ものな体験に、夏洌は相手を鎮めるように声をかけた。
「…えーっと、俺、なにかしたかなぁ？　っと思うのですが」
《なにかしただぁ？　おう、バッくれるったあ、ええ度胸やんけ》
「ほんきで覚えがないんですけど」
《どこまでもバッれるか。……ふてぶてしいヤツめ》
「人違いじゃありません？」
《ふんっ、吾が人違いなぞするわけがない。言い残したいことはあるか》

「えー、今の状況のすべてを知りたいのですが…」
《そうか、ないか。ふむ、人間風情にしては思い切りの良い。若き姿をしているが、実はよぼよぼのお爺だったりするのか》
「ひとの話をきけぇぇぇぇい！」
ブツッと鈍く堪忍袋の緒が切れた。奉公し始めてから、おのれの新境地を発見した夏洌は、それを“変心”と呼んでいる。
「いいか、こちらの質問事項をわかりやすーくまとめるから、それに対する答えを出してくれればいい。かなりの譲歩だ。反論はゆるさん」
ひとつ、ここはどこなのか。
ふたつ、なぜにこんなところにいるのか。
みっつ、俺をさらった理由は何なのか。
よっつ、変人――もしくは変態異形はさっさと名乗れ。
「以上。――さ、答えを」
《では！　――ひとつめ、ここは裏世（うらのせ）。人が住まう地とは一線を画する場じゃな。――ふたつめ、吾がそなたを連れてきたゆえ。みっつめ。理由はおのれが知っていようぞ。よっつめ、じきに冥土に下るものが、吾の名を知る理由はない》
どうじゃ、と得意げに白い異形が胸を張る。後足で立って胸を張るなんて、さすがは異形。
「……答えになってない。特にみっつめとよっつめ」
《ぐちぐちうるさいわい》
「じゃあ、これはずせ」
《人使い――いや、狐使いの荒い人間め》
そういいながらも、白い異形は夏洌を縛める縄をほどいた。まるっきり狐手で、どうやってひもを結んだり外したりするんだろう。
「どうも。で、もう一度、本題」
《まだわからぬか。致し方ない。説明してやろう》
そういって、白い異形は腰を落とした。

話の端々から察せられるに、やはりどこかの稲荷の仕狐のようだ。
仕狐らはタマなるものを持っており、それが妖力の源ともいえ、さらには仙狐・神狐に進化栄転（グレードアップ）するために必要なのだそうだ。
ところがこの白い異形。春一番が吹いた頃。ひょいこらひょいこら桜稲荷を散歩しているとき、あろうことか、大事な大事なタマを落としてしまったらしい。
タマを無くして以来、必死になってタマの行方を捜していたら、どうも夏洌に行き着いたとのこと。
はて、と夏洌は首を傾いだ。
「要約すれば、どういうこと？」
いまいち理解できない。この異形には初めて逢ったし、存在すら初知りだ。それが、どうして恨まれるようなこと……？
しきりに首をひねる夏洌に、白い異形が大きくふるえた。
《早い話が……吾から盗ったタマ返せと言っておるんじゃーーッ》
どてっ腹に鈍い衝撃があった。どうやら、我慢しきれなくなった白い異形さんが突進してきたようだ。あの体躯でこれだけの衝撃で済んだのは、ありがたい。などと考えている間にも吹っ飛ぶ。
「うおぅ、う〝っ？」
けほっ、と僅かに咳があふれる。思い切り打ち付けられた頭が痛んだ。
「なにが哀しくて、異形なんかに押し倒されなきゃいけないんだよ！　返せ、俺の初押し倒されを！」
むかっ腹がたって、意味不明な文句を言う夏洌に、白い異形は冷たい目線を向けてきた。かと思うと、いきなり哀しそうに泣くふりをする。
《……おぬし、アホなんじゃな。あろうことか吾のタマを呑み込んだものが、このようなアホとはなんという不運！　こんなアホに吾は命運を握られたのかっ、なんでぞ！？　吾、悪いことしたかっ？
いや、してないしてない》
「そこ、自己完結するな。ひとを攫った時点で、悪いことしてるじ

ゃないか。たいそう立派な悪異形だ」
《む、それもそうであったな。……じゃないわい！　なにゆえ、吾ともあろうものが、アホなんぞに憑かねばならんのだ。吾は、吾は……っ》
「わ、吾は……？」
なぜか打ち震える、白い異形。舞台役者のように悲劇的に手を広げて、（なにもない）空を仰ぎ見た。そして、魂を振るわせるような叫びをひとつ。
《吾は、お尻の可愛いおなごに憑きたかったんじゃーッ！》
「アホはあんただーっ！」
すっぱーん、とどこから取り出したハリセンで白い異形の頭を叩く。
「おまえ、桜稲荷の空狐だな。こんな不摂生な上に女好きな仕狐が他にいるかってんだ！」
《なんと、すでにメンまで割れておったか。むむむ、致し方ないぞ。アホごときに名乗る名はないが、名乗ってやろう》
肩で息をする夏洌に、白い異形？？桜稲荷の仕狐（暫定）はどこまでも偉そうに言い放つ。傲岸不遜な態度に、すでにキレていた夏洌の堪忍袋の緒は再度キレた。
「そーかそーか、アホに名乗る名前がないなら、“おおたわけ空狐”と呼んでやろうではないか」
《なんと！　この気高く麗しい吾が、そのような名で呼ばれるとは。最悪じゃ、命名感覚（センス）皆無ぞ》
大袈裟に眉をひそめる空狐は、ぼわんとありがちな音を立てて人身に転じる。ぽかんと口を開けて、夏洌はその様に見入った。

第八章〜まっしろな空狐3

ぼわんという古典的な音と煙が晴れると、夏洌はますます目を見開いた。
「ひとにもなれるのか……ってなり損ないじゃねーかよ」
《おぬし、まことに男かえ！　ぶらさがっておるのかえ！　この吾の気高く麗しい》
「しつこい！　ったく、えーえー、俺はれっきとした成人男子ですよ。だからなに？」
《吾を見て、なんとも思わぬのか！？　やはりアホか。はっ、おなごに興味がない！？　なんともったいないっ。――よもや、ソチラの気があるのか！？》
「あー、現実逃避ってやつね。自分の不運さを呪ってるわけか」
ぎゃんぎゃん騒ぐ空狐を吹っ切れた冷静さで観察しつつ、夏洌は息をつく。人身に転じた空狐は、たしかに見目麗しい。白い髪はすんなりと長く、月色の瞳はまあるくて大きい。江都美人図に載っている美人さんたちが、霞んでしまうほどだ。……ある一部分を除けば、だが。
「ひとつ聞きたいんだけども」
《んあ？　なんじゃ。言うてみよ、苦しゅうないぞ。この気高く美しい》
「なんで耳だけ狐なわけ？」
延々と続きそうだった自賛を遮って、夏洌が問う。口上を遮られた空狐は不満を残しながらも答えた。
《吾は神狐のなかで一番高位の空狐ゆえな、人身を常にとることを許されておる。しかし、一応ひととの区別はつかねばならぬ故、このようなキツネ耳を持っているのじゃ。ま、吾に言わせてみればー、大神狐さまがキツネ耳好き（フェチ）なだけだよなー》
「…神狐って以外と取っつきところ満載だったのか」

こんなもんが神の遣いなら、異形屋に憑いている異形達が愉快痛快きわまりないのも納得がいく。こんな性格の狐にからかわれたら、おうかちゃん（倉稲魂命（うかのかみ））も嫌うだろさ……ん？

そこまで考えて、夏洌はおのれの思考を見回した。

はて、空狐ともなれば、一番の高位はず。社居におらず、野に遊ぶと言われる神狐だ。その神狐が、なぜにおうかちゃんをからかうのだろうか。

「たしか…空狐は社居には在駐しないんじゃあ…？」

疑問が口に出てしまった。人身のまま毛繕いにいそしむ空狐が、夏洌を見る。なあに、と笑って言った。

《社居仕えはなにかと気苦労が多くてな。吾は一応、社居仕えを退いている、という体裁をとっている。が、姫神が心配ゆえ、心優しい吾は社居にちょくちょく顔を出してやってるのじゃ。ついでに、姫神の瓦斯（ガス）抜きをば……》

「早い話が、用もないのに社居に行って変ないたずらをしてる訳か」

《妙約をするでないっ！　人聞きの悪いことを言うな》

「それなら安心しなよ。俺はおまえに会うまで、だぁぁれにも会わなかった。つまり、この場でその言葉を聞いたのは俺ひとり。俺が言った言葉を、俺が悪く感じるわけがない。――よかったな、空狐！」

《嬉しかないわーーっ》

にこにこ笑う夏洌を撲る勢いで、空狐が怒号した。体毛が逆立って、いまにも夏洌の首を噛み切りそうだ。

末代まで祟られたくはない。ここは、異形屋の力を借りよう。息を吸って、覚悟を決める。

「な、異形屋にこないか？」

突拍子もない、とはこのことか。うちふるえた空狐は、なおも吠える。

《いかぬわっ。おぬしとの縁など、いまここできっぱり切ってしまいたい！》

ぎゃんと吠えてとりつく島もない空狐に、夏洌は息をついた。
「そうか……異形屋には、けっこう綺麗なお嬢さんとかも依頼に来るのになぁ」
《なに？》
これ見よがしにつぶやかれた言葉に、浅ましくも空狐が反応する。狐耳だけがこちらを向いているのを見て、夏洌はひひひと笑い声を漏らした。
《綺麗なお嬢さんと言うたな。それは、まことか？》
乗るのか。あまりに単純な空狐に、すこしばかりめまいを覚える。これでいいのか、神狐たち。
「まあ、ね。異形達にも、美人は多いみたいだよ」
《ふむ……。綺麗で美人で気だてが良くて、愛想が良い。さらには吾の訪れも待っている、と》
「や、そこまで言ってないから」
《行かねばならんな！　綺麗で気だてがよいお嬢さん方のために！》
「……色狂い空狐め」
《なんか言うたか？》
「いや、なんにも。――それで、異形屋に帰してくれるわけ？」
呆れを見事に押し隠して、夏洌は空狐を見据えた。白い空狐はうっそりと笑い、もちろんじゃと返す。
《なあに、噂に名高い異形屋。一度でよいから、見てみたかったぞ》
「へー」
隣の家に垣根ができたんだねぇ。有名な掛け句が脳裏を過ぎる。感慨の欠片もない夏洌の顔を伺い見て、空狐がきゅっと眉を寄せた。
《気に入らぬか》
「いいや、大いに結構。気に入った、十分、気に入った」
不純な動機だが、まさか仁琥には手を出すまい。それに仁琥には獄吏も裸足で逃げ出すような番人もいる。
それに、やけにしっかりした所のある仁琥のことだ。
ひょいこら店に転がり込んできた空狐を、なにもせずに逃がすと

は思いにくい。
「ま、せいぜい頑張ってな。空狐やい」
《いざ！　麗しいの女性らが待つ、異形屋へ！》
「おー」
感慨皆無の夏洌を引き連れ、意気揚々と空狐は向かう。麗しいお嬢さんが待っているはずもない、閑古鳥の巣なる異形屋へ。

（飛んで火にいるなんとやら……）

名文句がひらりと過ぎった。

終章〜異形、貸します

時刻はすでに夜四つ過ぎ。すでに木戸は閉まっている。
幸い、空狐がつれて出てくれたのは春夏冬町の側だったし、顔見知った木戸番はよろよろの夏洌を見て、すぐに木戸を通してくれた。
狐形の空狐を抱き上げながら道を急ぐ夏洌に、暇をもてあました空狐がちょっかいを出す。ふさふさした尾で夏洌の顔をはたくやら、肉球で夏洌の額を叩くやら、はては爪をたてて頬をひっかいてくる。
「いい加減にしろっ。うっとうしい。っていうか自分で歩け！」
《えー。吾の優美な白毛が汚れるであろう。ほれ、とっとと歩け。なんのための足じゃ》
毛皮にして売っ払ってやりたい。もくもくとわき出る黒案に、おもわず流されかけた夏洌は、あわてて頭を振った。それでも、やはり視界をわざとふさぐ尾は邪魔だ。
おのれの顔を覆う尾をひっぺがして、夏洌は空狐を抱え直す。歩く気皆無なら、譲歩して抱いていったほうが早い。
抱え方が悪いだの手の置き場所が悪いだの文句を言っていた空狐が、番小屋を振り返り、耳をかいた。
《そういえば、まえにあのような屋に行ったことがあるぞ》
「番小屋に？」
思い出したように空狐が言えば、夏洌は記憶をたどるように目を伏せる。聞いたことないなと言えば、空狐はあれじゃと尾を振った。
《武家町の近くにあった》
「しゃんしゃん火のときか」
《そんな危ない異形もいるのか。ふむ、妖艶な女性というのも好みぞ》
「……おまえが自体が妖艶（あやかし）だろうが」
言うと、けたけた空狐が笑う。薄い月光が白い毛を照らして、なんとも神秘的だ。中身に関係せず、外見はあるのだから気分が悪い。

こんなのが空狐とは、情報屋に持ち込んでも買い取ってもらえないだろう。
息をつけば、空狐が夏洌を見上げる。
《ため息は幸せを逃がすぞ？　若いうちから幸せを逃がそうとは良い心がけだが、あまり推奨できるものではない》
「誰のせいだと思ってんだ。いい加減にしないとどぶに捨てるぞ」
《やめい。言うだけでも汚れるわ。歩け歩け。文句を言わずにせっせと歩け》
「ふん。そうやって言ってられるのも、いまだけだよ。――覚悟は良いわけ？」
《覚悟とは？》
「……言い訳の」
《ない。なあに、異形のなかの異形なる吾が行けば、ささっと終わるであろ》
そしたら、麗しい女性らとムフフフー。吾困っちゃーう。
どんな想像をしているのか、容易に見当がつく。ふやけた顔の空狐を肩に巻きながら、夏洌は帰店の途についた。

夜が更ければ、なおボロさが目立つ異形屋。のれんは仕舞われていて、しかし店の中は灯りがついていた。
大きく息を吸って吐く。それをなんどか繰り返して、戸に手をかけた。
「帰店、おそくなりまして。――ほんとすいませんっ！」
ガタゴトと非常に立て付けの悪い戸を蹴り開けて店に入った瞬間、夏洌は土下座せんばかりの勢いで頭を下げた。ついでに、抱え込んでいた白狐をたたき落とす。
《ぎゃっ、なんじゃっ！　このように可愛い獣になにをするっ》

「黙れ空狐。おまえも謝れ。だいたい、ほとんどすべての責任はおまえにある。だから謝れ」
責任を押しつけることにした。
にらまれた白狐はしばし文句を考えていたようだが、夏洌の顔を見上げて考え直したようだ。
《なんで吾が。――あ、なんかイロイロすまなんだ》
いつの間にか形成された力関係に従って、空狐が大人しく頭を下げた。いきなり、犬ほどもある白狐を連れて帰ってきた夏洌に、異形屋の面々はぽかんとするよりない。
あっけに取られていた異形屋一同のなかで、最初に再起動したのは仁琥だった。
「……これ、なに？」
仁琥の何気ない問いに、白狐が剣呑な目になる。　これ、だと？　なに、だと？　この気高く麗しい空狐様を、ナニコレ呼ばわりとは。なんたる無礼、無礼千万不届き千万じゃ…と不機嫌な顔をする空狐を夏洌は抱き上げて、仁琥の顔の前に持っていく。
「桜稲荷の空狐なんだって。捜し物をしてるらしい。仁琥に挨拶を」
べしんと頭をひっぱたかれ、文句を言ってやろうと夏洌を見た空狐はしかし、なにも言わずに仁琥に向き直った。
《お初にお目に掛かる。吾、桜稲荷の仕狐の総元締めを賜る空狐である。このように気高く麗しい吾を金輪際…ふぎゃっ。えー、とりあえず、よろしくやろうではないか》
ひとの眼は口ほどにものを言うとは、このことか。にこやかに笑ってはいても、この殺気はいかがなものか。人間は甘く見ない方が良いのかもしれない。空狐は悟ったように息をつく。
「これが、夏洌さんを攫ったの…？」
《おう？　吾は攫った覚えはないぞ。妖力でアチラに引き込むという正当な手段で連れていっただけぞ。――だいたい、これ言うな》
「あ、ごめんなさい」
素直に謝った仁琥に、空狐はうんうんと頷く。素直な子供は気に

入ったぞ。
しかし、その考えはすぐに消え去った。
「で、人さらいなんぞした異形はどうしましょう」
「組に報告しちゃえば？」
仁琥の隣で寡黙に座っていた番頭がとんでもない事を言い出したのだ。小さな主をうかがい見て、にっかり笑う。
「そう仰ると思いました。良いお考えですね」
「うん。じゃあ、さっそく沓頬にいってもらおうかしら」
「わかりました。さすがですすございますね」
雷の媛に“いずれ多喜次嫌いって言われるわね”と予言されたのがいまだに応えているらしい。らしくない対応に、礼儀正しい鈴夜と正吉が目をそらす。
《……組に？》
なにげに恐ろしい会話を交わす主従に、空狐はだらだらと冷や汗を流す。組合に報告なんぞされた日には、異形会議にどのツラ下げていけばよいのか。いや、そもそも存在抹殺などいう恐ろしい事態にも発展しかねない！
こくり、と白いのどを動かして覚悟を決める。
《……ここは。――ここは噂に名高い異形屋とか。ならば、吾とて異形のうちにはいる存在。これもまた、なにかの縁！　吾が縁（えにし）を得た夏洌が一生を経るまで、異形屋の発展に尽力しようではないか。ど、どじゃ？》
「ふむ……」
多喜次にお伺いを立てたのは、権力をかぎ取れる空狐能力の賜物か。上目遣いに見つめる白狐をにらみ返して、多喜次が決めかねるように首をひねる。
「多喜二。ぼくは良いと思うよ」
「しかし、空狐です。厄介ごとを引き込むは必定。奉公人だけの厄介で十分首が回っていないのに、この上、異形の厄介まで引き受けていては」

店が持ちませんよ、と言う多喜次に、仁琥が唇を曲げた。
「厄介事なんて、もういっぱいあるもん。いまさら厄介事のひとつやふたつ、みっつやよっつ増えたところで、お店は沈まないよ。――なんたって、おじいさまが作った大船だもの」
「たしかに、ひとつふたつならばよいのですが……」
みっつよっつは厳しい。苦瓜を口に含んだように顔をゆがめた多喜次に、仁琥は食い下がった。
「空狐さんを味方につけたら、きっと江都中のお狐さまが見方になってくださるよ」
「……う」
「江都にお稲荷様は多いから。百人力だと思うんだけどなぁ」
「……た」
「ひょっとしたら、倉稲魂命（うかのかみ）さまもいらしてくれるかもね」
「……つぁ」
「空狐さんがいればなぁ。どんな異形だっておとなしくなりそうだけども…」
「――えぇっい、ままよ！　良いですよ、分かりました！　どうぞ、空狐をお入れくださいっ」
多喜次が言い切った途端、正吉が横から古びた本を突き出す。空狐が反復するまえに、黄ばんだ書をめくった。
「拇印か捺印、どちらでもいいですよー」
《判を押すのか？》
さすがに迷うそぶりを見せた空狐だが、正吉が有無を言わせずその前足を取る。すかさず鈴夜が朱肉を差し出し、空狐の前足につけた。ひんやりとした朱肉に、体中の毛がぞわつく。
《ま》
待て、と言う間もない。とらわれた前肢は書に伸び、黄ばんだ空き頁にぺたりと押される。
ぺったんといかにもな音と共に、異形狐の所属が決まった。
「いらっしゃいませー」

《にょ？　なかま？》
「空狐とは豪勢な」
《あら、狐じゃない》
「よろしくね、空狐さん」
《ふん。狐風情が書入りとは》
「しっかり働けよ、空狐やい」
交互にかけられるひとと異形の迎えの言葉。ひくり、と空狐の毛が逆立った。のど元を空気塊が通り過ぎ、威勢良い声が飛び出す。
《待てと言うたにーっ！》

異形屋の夜は、騒がしい。これからも騒がしくなる。

終章～異形、貸します2

さて、空狐が異形屋に居着いた最初の朝。朝食を作るのは鈴夜の役目だ。魚を焼く匂いが漂うが、まだ朝食までは間がある。
ちょうど良い守り役だと言われ、空狐は幼い店主の暇を潰してやっている。文句を言おうものなら、きっと朝食の添え物にされていた。
《仁琥よ、じきに朝餉ぞ。太極拳でも教えるか？　しゃきっとするぞ》
お腹をぐーぐー鳴らす仁琥に、空狐が鼻を寄せる。着替え終わっている仁琥は、空狐の提唱に首を振る。空きっ腹でやりたくない。
「そういえば、空狐さんにはお名前あるの？」
空腹をもてあました仁琥が、ごろんと寝転がりながら空狐に訊く。行儀が悪いと起こしてやりながら、空狐は尾を振った。
《はて、しっぽが一本だった頃は、親狐になにやら呼ばれておったが》
「ないの？　じゃあ、ぼくがつけてもいーい？」
「いいですよ」
横合いから答えたのは多喜次だ。帳場でなにやら書き込みつつ、当たり前だという笑みで空狐を見ている。
《吾の拒否権はないのか？　吾の名ぞ。え、そんなに簡単に……》
「えぇっと――空狐さんは桜稲荷の神狐さんなんだよね？　じゃあ……右近さん？」
《うこん？　左近ではないのかや？》
首をひねる白狐に、仁琥はうん！　と笑う。
「右近の桜でしょうー？　だからね、右近さん」
《逆ではないのか？　桜はさこ……ぎゃふっ》
抗おうとした白狐に、夏洌の鉄拳がお見舞いされる。白い頭を押さえて、金色の目で恨めしそうに夏洌を見た。雨戸を開けてきた夏

洌は、拳を握りしめている。あれで叩かれた、絶対。
《なにをする！》
「仁琥のやることに、文句をつけるな」
《過保護じゃ！　過保護すぎるぞっ。いずれ世の中に出たとき、それはそれは苦労することになる！　直せ、いますぐに直せ！　これは親切心じゃ》
前足を振り乱して反論する空狐に、夏洌はにっかり笑う。
「仁琥がそんな人間になると思う？　にこにこ笑って、じつは異形屋一策士っぽい仁琥が」
《む。だが！　考えてもみよ、右近ぞ。右近は橘ぞ。橘稲荷の空狐に、なんと言われるか》
「派閥争い？」
ほうそれは興味あると言う夏洌に、空狐は必死に前足を振り上げて拒絶した。
《正直言えばある。ゆえに右近はいやじゃ！》
「仁琥ー、右近で良いってさ」
《聞けいっ》
「じゃあ、右近さんで。よろしくねー」
もはや反論すらしない空狐。朝食が出来たと正吉が呼びに来るまで、ぐったりと仁琥にもてあそばれていた。
ふかふかのしっぽを、仁琥が気に入ったらしい。

＋＋＋

曲がりなりにも神狐である。
そのうえ、空狐は神狐の最高位。間違っても人風情に憑くような異形ではない――はずだ。どれだけ空狐らしくないとしても、一応は空狐。
なぜに夏洌に憑いたのか。

朝食の場で話すのは行儀が悪いが、さりとて仕事中の会話も支障がある。しかたなく、多喜次が許可をだしたのだ。
「で、夏洌は空狐のタマを飲んだアホと」
「なんと間抜けな」
《アホじゃ、たわけじゃ。たぁけじゃ》
鈴夜が切り出せば、多喜次と空狐が同意をしめす。薄汁の椀を持った夏洌は、必死になって首を振った。
「そんなの、わかんないじゃないですか。空狐が――右近が勝手に言ってるだけで！」
《吾の言を信じぬか、たわけめ》
「信じられるか、おうかちゃんの言葉もある」
「そういえば、倉稲魂命（うかのかみ）は空狐に隔意がありましたねぇ」
《あれは瓦斯抜きをしてやったいただけじゃっ》
古びた座布団を引っ張り出し、すっかり居着いた空狐が吠える。それに夏洌がやり返し、さらには空狐がやり返す。みっともない喧嘩が勃発しそうななか、ただひとり、冷静に箸を運ぶのは正吉。
焼き鰯に菜入り薄汁、豊富にあるたくわんを順序よく食べ、思い出したように顔をあげる。
「第一、タマっていうのはなんなのです？」
もっともな問いであった。
肝心な質問に、異形屋中の視線が正吉に集まる。家鳴や蔵異形がいつの間にか店に出ている。
「タマを取り出してしまえば、夏洌さんから出て行くんでしょう？」
その問いに、首筋を掻いていた空狐が足を止めた。にぃっと器用に笑い、口をゆがめる。
《我ら神狐は、仕狐の路を歩み始めたときより、丹を練っている。体内の気を集め、丹田を鍛えるのじゃ。それが結晶化したのが、珠ぞ》
「つまり、俺は右近狐の“気”を食ったわけ！？」

《端的に言えば、そういうことぞ。――安心するがよい。空狐のタマを食ったとて、狐になるわけではない。ま、腹をかっさばけば取り出せるがな》
「冗談じゃない！」
《昨夜も言ったように、ひとの一生など短いもの。五十年や六十年、人に憑くのも一興であろうな》
「ということは、俺は一生、狐憑きってこと？」
《なーに、綺麗な嫁が来ればかわいがってやるぞ！》
衝撃（ショック）的な事実に突き当たった夏洌は、今にも砕けんばかりだ。そこをわざわざ突くのが、空狐のやることか。
《いっそのこと、吾が嫁になってやろうか》
「いらんわいっ」
落ち込んでいた夏洌の心は一気に駆け上がり、空狐の首を絞める。白い尾が振られるのを見て、柱がきしきし鳴った。
「では、夏洌さんはいつ、タマを呑み込んだと」
大喧嘩まっしぐらだったのを止めたのは、やはり正吉の冷静な問い。締められたまま、ご丁寧に首だけを回して空狐が答える。
《桜が満開のときだった。禰宜が、なにやら管狐の筒を持っておった》
「あのときだ！」
空狐の言葉に驚いたのは、おとなしく箸を動かしていた仁琥だ。怪訝な顔をする多喜次を見て、すこしおとなしく続ける。
「ぼくが、多喜次にお願いして、はじめてお使いに行かせてもらったとき」
あぁ、と頷いたのは夏洌だ。次いで、正吉、鈴夜も思い至る。
「あのときの子供か。……ひったくりに遭いそうになってた」
「遭ってないもんっ」
「ひったくり……？」
不穏な気配を漂わせるのは、やはり過保護が抜けない多喜次だ。そこに来て、ようやく思い至ったようで。

「ひったくりにも、遭ったんですか」
「にも？」
にも、ということは他の被害もあるのか。夏洌が正吉を見ると、彼は頷く。手招いて、顔を寄せた夏洌の耳元で教えてくれる。
「人さらい、強盗、ひったくり、通り魔、通り異形に異形隠し。犬に蹴られるなんて朝飯前――じゃなくて散歩前。奥様台風には巻きまれ…」
「外を歩けば、被害に遭う？　というか奥様台風？」
「そういう星巡りの許にお生まれになったんですね。おいたわしい……」
「そりゃ、過保護になるわけだ」
目元を押さえる正吉に、夏洌は何度も頷いた。奥様台風は気になるが、細かなことまで気にしていては、異形屋勤めはままならない。
《聞いておるのか、夏洌よ》
「え？」
空狐に耳をつままれた夏洌は、眉を寄せながら空狐をはたく。お返しに噛んでやろうと口を開けた空狐を避けると、夏洌は箱膳を持ちあげる。
「なに？」
《人生、あきらめが肝心ぞ》
「右近狐に言われたくない」
《右近と言うでない！》
「ほら」
食器を箱膳の中にしまい込み、足下をうろつく空狐を鬱陶しそうに見下ろす。
「で、なに？」
《む。番頭がのれんを出してこいと。――吾を小間使いのように使いおって》
空狐が捧げ渡してきたのれんを受け取り、夏洌は土間におりた。しっかり掃き清めた土間には、すでに朝の陽が入り込んでいる。

「夏洌、異形回収に行ってこい」
「俺がですか？」
「空狐もいるから、大丈夫だろうということになった」
「……すんごく、頼りない狐ですが」
夏洌の視線に誘われた鈴夜も、つい空狐を見てしまう。朝陽が照り帰った白毛はきらきら輝き、多少は神々しい。
「いないより、マシだろう」
手代にとっては、その程度の認識らしい。抗議するように金色の瞳が鈴夜をとらえたが、すぐに手代を通り過ぎた。
「仁琥様、しばらくは外出禁止です！　町内会にひったくり撲滅を叫んできます！」
「いらないもんっ。そんなこと言う多喜次なんて大嫌いだっ」
「き――」
衝撃（ショック）で言葉もない多喜次のまえで、仁琥がそっぽを向く。立ちつくす奉公人に気づいて、寄ってきた。
「のれん、ぼくが出しても良い？」
「……いい、のか？」
「雨戸は開けてくれたもの」
鈴夜が頷いたものだから、夏洌も仕方なしにのれんを手渡した。満足げに受け取った仁琥は、朝寝に入ろうとしていた空狐を踏み台に、のれん掛けに通す。
《うぅ。なにゆえ吾が踏み台に……っ》
「ありがとう、右近さん」
文句を言いながらも、おとなしく踏み台になってくれた空狐に礼を言って、仁琥が飛び降りた。
奥では多喜次が未だ固まっている。番頭の頼りない姿から目をそらし、正吉も土間に降りてきた。
「今日は晴れですね」
仕事です、と言い置いて、箒を持った。店表を掃く気だろう。あわてて夏洌も後を追った。

「俺も手伝います！」
《なんとも騒がしい店なこと》
「お店だからねぇ」
あくびをひとつ押し出した空狐を抱え上げて、仁琥が帳場に座り込んだ。ぬいぐるみのように抱き込まれた空狐が、鼻面で仁琥のあごをとらえる。
《ところで、吾も貸し出されるのかえ？》
空狐の問いに、幼い店主（あるじ）はにっこり笑った。
「異形貸します、の異形屋だもの」

“異”と染め抜かれたのれんを出すは、異形屋。異形を貸し出す、奇特な店。
商売繁盛、家内安全、合格祈願。恋愛成就に女難除き水難除き。お家のお掃除もお任せください！
さて、本日の異形屋ものれんをあげて店を開ける。

一口噺〜夢守りの獣

やつがれが目を覚ましますと、あたりは真っ暗闇でございました。どこからか、生温い嫌な風が吹いてきます。やつがれの毛が、逆立ちました。

昼間みた少女の夢が、まさかこのように悲惨だとは……！

あぁ、ご紹介が遅れました。やつがれ、貘ともうします。夢を食す異形でございます。ご主人の言いつけで、ある少女の悪夢を食しに参りました。

「ばくさん、こっち。いつもこっちで、怖いのがあるの」

少女がやつがれを手招きます。十歳ほどの少女で、ご主人と同じ年頃です。こんないといけない方が、こんな悪夢にうなされているとは。

大丈夫ですよ、大丈夫。やつがれがお側におりますからね。

「ばくさんは、なにかしら？　豚さんでもないし、牛さんでもないわ」

やつがれですか？　やつがれは貘というもの。牛でも豚でもございませんよ。

「そうなの？　でも、ばくさんはとぉってもあったかいわ」

可愛いお嬢さんの言葉に、やつがれは伏せました。そのままお嬢さんを抱き寄せ、やつがれの腹にもたれかけます。お嬢さんは、ちょっとびっくりしたようですが、すぐにやつがれのお腹に寄りかかります。ありゃりゃ、お嬢さん！　こしょぐったいですっ。こしょばゆいです！

お嬢さんが笑いながら、やつがれの毛をくしゃくしゃと掻き撫でます。小さな手が、ご主人に似ております。

ふと、お嬢さんの身がこわばりました。

流れる風が、急に冷たくなったのです。嫌なにおいも、増してきました。やつがれの鼻が、ひん曲がりそうです。

「お化けがくるの！　あたしを食べにくるの！」
お嬢さん、お嬢さん！　落ち着いてください。あわわ、やつがれに抱きついてください。ね、ちょっとは落ち着きますか？
お嬢さんがやつがれの背に這い上がってきました。お嬢さんが上りやすいよう、やつがれはますます地に伏せます。
あぁ、勇ましいですね、お嬢さん。貘をお供に、魔が夢を退治にいきますか？
「あぁ、すてきね。きっとばくさんは強いもの！」
えぇ、お嬢さんを乗せていれば百人力ですよ。さあ、いきましょうか。
ここはお嬢さんの夢の中です。とん、とやつがれの身体は宙に浮き上がりました。
どうやらお嬢さんは、貘が飛べると思っていらっしゃるのでしょう。
暗い空を踏みしめながら、やつがれは飛んでいきます。背に乗るお嬢さんを落とさないよう、細心の注意を払いながら。

お嬢さんの魔が夢は、深奥の空とも、深淵の海ともつかぬ場所でした。遠くから、なにかが近づいてきます。お嬢さんの身体が、堅くなりました。
やがて、近づいてくるものの姿がやつがれの目にも映ります。
あれは――！
「あれよ、あれ……。あれがいつも、あたしを食べちゃうの」
あれは、深海に住まうという鱶鮫でしょうか。恐ろしい勢いで、こちらに迫ってきます。ぐんぐん、たくましい尾をくねらせて。
「いやぁっ」
お嬢さんが小さく悲鳴を上げます。鱶鮫の形をした魔が夢が、お嬢さんに気がつきました。
お嬢さん、怖がらないで。あれはただの夢です。お嬢さんをおや

つにしようという、性悪鮫です！　あんなの、見かけ倒しです。いきましょう、お嬢さん。ここはお嬢さんの夢。お嬢さんがいちばん、強いです！

「ほんとう……？」

えぇ、ほんとうです。だからお嬢さん、涙を拭いて。顔を上げて。あんな鮫、やっつけちゃいましょう。夢は無敵です。

「ほんとうに、あたしのほうが強い？」

強いですってば！　ほらほら、鱶鮫の干物なんておいしそうでしょう？　あ、開きのほうがいいですか？

「あたし、焼いたお魚、大好きよ」

お嬢さんの声が、強まりました。こうなれば、お嬢さんの天下です。やつがれをお供に、いざ鱶鮫退治に！

「鮫さんなんて、焼いたお魚にしちゃうんだから！」

お嬢さんが鱶を指しました。やつがれは鱶に向かって、突進します。身体がとても、軽いのです。お嬢さんが、そう思ってくださるから。

「てぇぇぇいっ！」

やつがれの前脚が、鱶鮫の頭に見事当たります。鱶が頭を振って、やつがれを離そうとしました。ところがそうは、いきません。

お嬢さんはやるきです。やつがれもやるきです。このまま追いかけて、追いかけて、追いかけて、お嬢さんの夢から退治てあげましょう！

「どうすれば、出ていくの？」

簡単です。お嬢さんが出てけって、叫んでしまえばいいのです。ここでは、お嬢さんの言霊が一番、強いのですから。

「ことだまって？」

いずれお分かりになりますよ。お嬢さんが大人になって、やつがれのことを知るぐらいになったら。

「じゃあ、分かったらばくさんに真っ先に教えてあげる」

ふふ、お約束ですよ。楽しみですね。そのときは、お饅頭をおみ

やげによろしくお願いしますね。
さて、ではそろそろ、行きましょうか。
「うんっ」
お嬢さんの声を合図に、やつがれは飛び上がります。鱶鮫も気づき、こちらに向かって猛然と泳いできました。しかし、お嬢さんとやつがれは逃げません。真っ向から、鱶鮫に対抗してやりましょう！
お嬢さんが、やつがれの背で立ち上がりました。大きく息を吸い込んで、思い切り。
「鱶鮫なんて、出てちゃえぇーーーっ！」
叫びます！
瞬間、やつがれの目には確かに見えました。お嬢さんの言霊が鱶鮫に猛然と向かっていったのが。そして、おそれをなした鱶鮫が、逃げ出していきます。
「やったぁっ！」
お嬢さんがやつがれの背で飛び上がりました。あわわっ、危ないです。落ちちゃいますよ！
やつがれの心配むなしく、お嬢さんはやつがれの背から落ちてしまいました。あわてて後を追ったやつがれでしたが、その必要はなかったようです。
「すごい！　あたし、飛んでるよっ」
えぇ！　ここはお嬢さんの夢。どんなことでも叶います。お嬢さんが経験することを貯めていって、いずれは大きな明るい海原になりましょう。そしたら、あんな鱶鮫なんて、入ってこられませんよ！
お嬢さんに聞こえたのでしょうか。お嬢さんはすでに、空の上。やつがれの脚でも、届かぬ高空におられます。

やつがれは、そろそろ帰りましょう。お嬢さんはもう、大丈夫でしょうし。もう、あんなに輝いておられます。
それに、なんだかご主人にあいたくなりました。今度はご主人と

一緒に、ご主人の夢で遊びましょう。

夢は無限大です。重い続ければ、どんな夢だって叶います。ご主人は、どんな夢を見ているのでしょうか。

一口噺～夢守りの獣（後書き）

獏がお気に入りだったりします。
悪い夢ばかりじゃ、お腹を壊してしまいそうですけども。
なので、悪夢を退治るのは夢みている本人ということで。獏はその、
お手伝いを。

一口噺〜恋文車

《愛おしいあなた様へ》
あら、以外と積極的な書き出しね。及第点だったりするわよ。
《このようなお文を差し上げたこと、お許しくださいませ》
きちんと礼もできるのね。関心かも。
《西掘川であなた様をお見かけしたのは、まだ桜ほころぶ三月のことでした。もはや、藤も散り逝き、五月の空は青いばかりです》
三月？　えぇっと……じゃあ、貴女は二ヶ月も恋心を放っておいたの！？　だめよ、だめ！　恋心はナマモノなのよ。もっと早くに行動に移さなきゃ……。
《転がったお饅頭をあなた様に拾っていただき、私は一目であなたに恋をいたしました》
……お饅頭？　いったい、どういう出会いなわけ？　まぁ、出会いが斬新ってのもいいかもしれないけど。
《朱鷺色の小袖が、たいそうお似合いでございましたね。香ったのは白檀だったのでしょうか。桜花より春風よりも、あなた様のお召し物、薫香のほうが記憶に残っております》
すてきな表現ね。ここは丸よ。散文的でいいわ。
《あなた様に拾っていただいたお饅頭は、いまも大切に持っております》
とってある！？　二ヶ月前なんでしょ…。先旬は雨も多かったし。かび、生えてそうね。まぁ、気持ちが大事なんでしょうけども。
《ひねもす、あなた様のことを思っている自分に気づき、お文を差し上げた次第です》
ずいぶん古い表現だわ。ありきたりだし。でも、自分の気持ちに気づいて文するってのは、ほめられるわ。
《このようなお文は、あなた様にとってはご迷惑だったやもしれません》

うんうん。相手を思いやる。そして相手の迷惑を考える。いいわね。上級手段よ。
《ただただ、私はこの気持ちを――初めて抱いた恋心というものを、あなた様に知っていただきたかったのです。恋狂い女子の、哀れな文と思し召しください》
ずいぶん、自虐に走ったわね。こんなの貰っちゃ、相手も気分を損ねるわ。……まぁ、恋なんてこんなものよね。
《ご気分を損ねたのならば、申し訳ありません》
あら、自虐趣味を謝るだけの余裕はあったの。ふむ…、なかなかいいわね。飴と鞭の使い分けもできてて。
《どうか、お忘れくださいますよう……》
忘れちゃっていいの？　って言ったって、どうしようもないものね。決まり文句みたいなものだし。ここはいいわ。あとがどう続くか……。
《あらあらかしこ》
終わり！？　え、え、え、え？　なんかずいぶん、変わった趣味の恋文ねぇ。
さてと。どこから添削すべきかしら。

文から生まれた、異形がある。
世では文車妖妃と字され、認知度も高い。その文車妖妃、恋文の添削をしていたりするのは、以外とひそかな人気であったりする。
恋文添削をする文車妖妃は、もとの気性なのか、はたまた生まれた文が激しかったのか。
恋文に関しては、ずいぶん辛口である。ときには書かれた文章に憤り、すべてを書き直せと命じることもあるが、助言は的確であった。そのため、文車妖妃に祈れば恋は必ず成就するという、神頼みならぬ異形頼みにまで発展していたりも。
異形を貸し出す希な店には、噂を聞きつけた女性たち（片思い中）

が多く訪れる。店の経営を大変助けているというのは、周知の事実であった。
いろいろと、抜けたところはあるものの、まあまあ役に立っていることは事実である。

◇◆◇◆◇◆

《謹啓
急なお文、驚いていらっしゃると存じます。どうか、お許しくださいませ。
三月のことでございました。私の落としたものを拾っていただいたこと、あなた様はお覚えでいらっしゃいましょうか。私は、いまでも鮮明に覚えております。
あの日、私はあなた様に恋をしてしまいした。なにを急に、と思われることでございましょう。
しかし、私はこうして自分の気持ちに気づき、居ても立ってもいられませんでした。あなた様のすべてが、目の裏に焼き付いております。
このようなお文を差し上げ、不快な思いをなさったやもしれません。それでも、どうかお伝えしたかったのでございます。
あなた様に恋をした娘より

あらあらかしこ》

完璧ねっ！　完璧でしょう、わたし！
これを貰って、よろこばない男はいないわ！
さ、今すぐに出しにいきなさい。町飛脚なら、まだやっているわ

よ。さぁ、決戦ははじまったばかりよっ。いざ、天王山へ！

文車妖妃のお墨付きを得た娘は、喜び勇んで町飛脚屋へと走っていく。そのうれしげな後ろ姿で、だれが思うだろうか。その恋文に、差出人の名前が書かれていないことなど。

その恋文がどうなったかは、誰も知るところではない。ただ、文車妖妃の人気は続いたという。

一口噺～恋文車（後書き）

文車妖妃という、ぽっとみ恐ろしげな妖怪――あわわ、異形です。なにやら、恋文の怨念が妖怪化したとか。なんとも執念深い恋文です。きっと、他人の恋文に口を挟むのも好きでしょうから。

一口噺～空飛びたる　前

夏洌という青年がいる。
ちょっと変わった店に奉公している以外は、ごく普通の青年。目立たないと言ったら、そこで終わりだが。
さて、この夏洌。人生最大の危機を迎えていたりする。
夜空のまっただ中で。
「いやあああああっ」
まだ三月に入ったばかり。夜になれば気温は下がり、それなりに寒い。だが、夏洌は寒さを感じていない。――否、感じる余裕を持ち合わせていなかった。
なにせ、眼下に広がるのは夜の町。耳元でびょうびょう唸るのは、冷たい夜風。
気を手放したいほどの体験だが、いかんせん、夏洌は異常な状態に慣れてしまっている。こんな尋常でない状態でも、星空がきれーだなーと笑えるぐらいには。
しかし、と夏洌は考えた。
（なんだって、俺は空を飛んでるわけよ……？）

夏洌は、一風変わった店に奉公している。自分探しの旅に出て、流れ着いたさきで拾われて、なぜか狐憑きになって、今に至る。変わった人生だ、と我ながら思うぐらいだ。
異形に関わることには、だいぶ耐性がついてきていた。異形退治や異形説得、異形間の争い事を調停するのが、彼の奉公先の仕事だ。
今日も幼い店主に連れられて、異形折伏に赴いた。当然のごとく夏洌が囮になり、異形に追われ、すっころび、池に落ちた挙げ句に、烏に襲われ、なんとか折伏したのだったが。
心身ともに疲れ、早々に布団に潜り込んだはず。隣にいたはずの、

白狐のぬくもりがない。あいつがいれば、多少は暖かいのに、と夏冽が身じろいだ。
と、そのとき。
《おう、起きたか。小僧よ》
夏冽の頭の上から、野太い声が降ってきた。はて、と首をひねろうとして、気づく。
なんだかやけに堅い拘束感。まるで、かぎ爪に握られているような……？
「か、か、か……っ」
首をぎりぎりまでひねって、上を見る。そこにいたのは、面をつけた異形。
《ん、どうせし、厠か。ここにてはいかぬ。しばし待て》
「烏天狗！」
《腹が減りきや。水がいるか。はて、母御が恋しや？》
「違うっ、そんなんじゃない！」
つい、反論してしまった。顔を赤らめ、身動きできないながらも異形をにらんだ。
夏冽を布団ごと拐かした異形。名を烏天狗という。
顔を覆う面は鋭いくちばしを備え、烏のよう。たくましい体躯を宙（そら）に保っているのは、一対の翼。猛禽の翼は羽ばたくたび、夜風を渦巻かせた。
《我、頼みがありて来たり》
ふいに、烏天狗が下降を始める。気圧の変化に間に合わず、夏冽は強い不快感に襲われた。しかし、狐憑きになっているため、身体には異常がない。
耳の痛みに顔を顰めながら、夏冽は烏天狗を見上げる。
「来た？　拐かした、の間違いじゃないのか？」
《我は御山の天狗をまとむる、暁丸という》
きれいさっぱり夏冽の言葉を無視して、天狗は続けた。ばさばさと羽音がうるさい。風も強い。

《夏洌。汝、なにやらあやしき匂いがすな》
「……よく言われるよ」
《なんとも香しく、汚らわし》
夏洌のなかに入り込んだ狐力の源が、どうも原因らしい。異形たちに恐れられ、敬われ、ときには襲われる。息をついた夏洌に、天狗はからからと笑った。
《気にすな。いずれ、とれん》
古い言葉だな、と夏洌はぼんやりと考えた。布団の中は暖かくなってきて、眠気を誘う。疲れていたこともあってか、夏洌はすとん、と眠りに落ちてしまった。
空の上で寝たなんて、初めてのことだった。

◇◆◇◆◇◆

気がつけば、木々のざわめく森にいた。
相変わらず布団にくるまれ、一瞬、夢を見ているのかとも思う。だが、夏洌の意識は急浮上した。
「烏天狗っ！　ここはどこだっ！」
仮面をつけた異形は、のんきにも酒盛りに興じていた。ひとを攫ったとは思えない、剛胆さだ。強い酒の香りに、夏洌は顔をゆがめる。それを見留めたのか、天狗が笑った。
《汝、酒はたしなまずや》
「あぁ、店主の意向でね。なあ、烏天狗。俺を攫ったわけは後で訊くとして、まずはこの布団、解いてくれないか？」
苦しいんだ、と呻けば、天狗は目を丸くする。大杯を置き、夏洌に近づいた。体躯が大きいから、威圧感がすさまじい。
《こは気がつかざりき》
大きな手とは裏腹に、布団の縄をほどく手つきは優しかった。夏洌を気遣うように見つめ、夏洌が笑い返すと、安堵したように息を

吐く。
《よかりき》
布団の縛めから解放された夏洌は、芋虫のようにはい出ると、天狗を見上げた。見上げるだけで、首が痛くなりそうだ。ううーん、と思い切りのびをして、夏洌は天狗を見た。
「そういえば、俺に頼みがあるって言ってたけども」
《そうなりき。いとこうぜしがあり》
とても困っている、と天狗は羽を畳む。意気消沈した格好に、夏洌はおずおずと手を伸ばした。
「俺にできることなら、ね」
《じつは、大角鷹主というものが、雛を攫いにきたり。手の天狗たちは憤りて、報復も辞さずと言う。我は戦は避けたし。されば、血を流さざるよう、なんとか貰いたし》
「……えぇっとぉ」
良く、わからない。
こめかみを掻いた夏洌の脳裏に、聞き慣れた声が響く。
(大角鷹主とかいう変態が、雛を攫ったらしい。天狗たちは弩直球で戦支度をしてるから、なんとかしてくれ、と)
「右近!」
自分の身のうちに巣くう狐だが、どうやら憑いてきていたようだ。なら、もっと早くに現れろ!と夏洌は心の中で叫ぶ。――しっかり狐には、伝わったようだ。
(ふん。来てもらえただけでも、ありがたいと思え。むざむざ天狗なんぞに攫われおって)
「出てこないのか?」
(天狗とは顔を合わせたくない。通詞はしてやるゆえ、よかろう)
急に顔を顰めた夏洌に、天狗は怪訝そうな目を向ける。
《どうしき。なにかありきか?》
「……いや。それよりも、早く行こうか。その大角鷹主とかいう異形のところへ」

《おう。疾く行かん》
ばさり、と天狗が羽を広げる。手を伸ばし、夏洌を抱え上げると、一気に夜空へと舞い上がる。人間にはとうてい、体験できないことだ。
「すごい……っ」
思わず感嘆の声をあげた夏洌に、天狗はくつくつと笑う。ばさりばさりと、大きな羽音が夜空をかき乱す。
《汝は、なかなか変はりたり。恐るることなく、天狗に抱かれて空を飛ぶとはな》
「まあ、空は何度か飛んでるしね。天狗に抱かれるのは、初めてだよ」
《なほ汝を選びて良かりき。汝ならば、雛を取り戻してくれん》
「そりゃ、どーも」
いるはずの白狐は、息を潜めている。本当に天狗が苦手なのか、はたまた面倒なだけなのか。どちらにしろ、白狐はアテにならない。
《ここより、角鷹の森。気をつけよ》
「じゃあ、あそこらへんで下ろしてくれる？」
《汝ひとりを行かすや？　そういふよしにはいかざる》
「大丈夫。厳密には、ひとりじゃないから」
《あやしき若人なり。――では、よろしく頼むぞ。なにかあらば、すなはち呼びてくれ》
うん、と天狗に頷きかえすと、天狗は高度を下げた。羽音も心なしか、小さい。
「じゃあ、行ってくるよ」
にこやかに手を振りながら、夏洌はうっそうとした森に踏み入った。背には見つめる天狗の視線を感じている。

一口噺～空飛びたる　前（後書き）

天狗は（あまつきつね）らしいですね。
なので、神狐さんからみたら、狐じゃないのに狐を名乗るなや！でしょうか。

さて、後もございますので。

一口噺～空飛びたる　後

角鷹（くまたか）というのは猛禽だ。鷹というだけあって、眼光は突き刺さるように痛い。

《汝、なぜ我に会わんとす》

静かな口調で問いかけたのは、大きな鷹だった。橙色の瞳が、夏洌を見つめている。自然と、背筋が伸びるのを感じた。

巨大な鷹は、語りかけるように夏洌を見つめていた。

角鷹の森に入ってすぐ、白狐は姿を現した。子狐の姿ではなく、本性をとっているのも物珍しい。九本の尾を絡め、木漏れ月光に照らされ輝く銀の体毛。銀毛九尾の狐を引き連れて、夏洌は森を歩く。

さすがに神狐の連れ人を襲う勇気はないのか、森の獣たちも静かだ。ときおり、背後でかさりと音がする以外は。

「角鷹は良いんだ」

《ふん。夏洌はドジすけゆえな。どっかで転んで泉下に下って、ひょいっと吾の珠が戻るやもしれぬ》

「そりゃ、幸せなご想像で」

《なんじゃ。吾に護衛を頼めるなど、どんな高位とて無理なこと。憑いてきてもらえるだけでも、ありがたいとだな！》

「あだっ。でっ、いだっ、いでっ、あだだっ！　だっ、かっ、らっ、いっだ！」

九本の尾を器用に使い、白狐は夏洌の足を叩く。尾が九本あるとは、なんとも便利なことだ。途中で夏洌も、応戦する。結果、なぜかつかみ合いの喧嘩へと進んでしまった。

「なにが白狐、だっ！　饅頭を喉に詰まらせて、死にかけていたくせに！」

《だまりゃっ。吾の珠を呑み込んだ、たわけめが！》

「なにを！　あれはお前がきちんと持ってればだな」
《ぼさっと口を開けて突っ立っておるからじゃっ》
「口開けてないっ！」
《開けておったわ！》
ざわざわと、夜風が木々を揺らしていく。ひとりと一頭は騒ぎすぎた。頭上に降り注いでいた月光が、刹那、とぎれる。なにかが、飛んでいったようだ。
「……なに？」
《ぬかったわ……》
白狐が警戒の視線を空に向ける。夏洌も持ち前の“命の危機検出器（サー）”を発揮し、数歩、後ろへと退いた。
「なんっ」
激しく渦巻いた風が、夏洌を吹き飛ばす。地面に爪を立てていた白狐は踏みとどまったが、夏洌が飛ばされたのを見て、跳び退った。飛ばされた宿主の衣を噛み、風に逆らう。
《角鷹主》
名を呼ばれ、風を巻き起こしていたものが止まった。白狐が夏洌を離して言う。
《神代より生きる、大いなる鷹よ》
「神代……？」
唖然と鷹を見上げる夏洌を押して、白狐が前へ出る。九本の尾がくねり、絡まっていた。
《この者は、汝に会いに来た。汝の森で騒ぎしこと、礼を欠いた》
《ありうたてし。気にしたらず》
低い、森を吹き抜けるような声だった。巨大な鷹は、夏洌を見下ろしてくる。
《汝、なぜ我に会わんとす》
大熊鷹主と呼ばれる異形は、年月を経て異形と化したらしい。人

ほどもあろうかという巨体に、鋭いかぎ爪とくちばし。隻眼となってはいたが、残った左目だけでも威圧感はすさまじい。
どう口火を切ろうか。悩んだ夏洌だったが、その悩みは無用となった。
《狐憑きの若人。汝、なぜ我に会わんとする》
神代から生きていると、白狐は言っていた。だからだろうか。彼らの言葉は古語だ。聞き取りづらいが、答えないわけにはいかない。
「烏天狗から、頼まれ事を承ったのです」
宿主の慇懃な態度に、白狐は面白そうに尾を絡ませる。夏洌が足で軽く蹴ると、白狐はなお笑う。それを見留めたのか、大角鷹も低く笑う。
《汝はおかしな。さて、ここなる地にいかな用であろうや。天狗は、いかなる頼み事を汝にしき？》
「天狗の雛が一羽――でいいのかな？　が姿を消したらしいのです。どうやら、角鷹の森に入ったらしくて。その子を探しに来ました」
《ふむ。……ならば、そこにあり》
ばさり、と右の翼で木の陰を示す。白狐と夏洌が視線を向けると、木の陰でなにかが動いた。大角鷹が招くと、ひょこひょこ駆けてくる。
「天狗……！」
小さな天狗だった。人間では六歳ぐらいだろうか。小さな翼を持っているが、うまく使えないようだった。
《どうやら、天狗共の思い違いだったようだな》
「え？」
よく見てみよ、と白狐は天狗を示す。幼い天狗は脅えているふうもなく、嬉しそうに大角鷹に駆け寄る。
《かの子どもは迷い込みてきたり。放ちておかば、森の獣に食われなん》
そう言って、大角鷹は大きな翼で――彼らにとっては腕だろう――子天狗の頭を撫でる。

《なんとか親元に帰してやりたしと思いていたが、天狗たちは気が立ちけり。どうしせばよきか、悩みたりき。汝が来ること、助かりきよ》
言葉を切って、大角鷹はにやりと笑う。
《なにせ、天狗の郷に近づきしのみにても、矢が飛び来る》
自嘲のようにも聞こえたが、その声には親しみがこもっている。
子天狗もそれを感じ取ったのだろう。
大角鷹に抱きついた。
《おささま、われ、免したまえ》
《許すもなにも、怒りたらず》
苦笑するように言って、大角鷹は子天狗を撫でる。夏洌を招き、子天狗の手を握らせた。
《我ら熊鷹は気性が荒しと勘違いさるることも多し。野なる生き物がなべて生くるために他の命を奪ふが、熊鷹もそうなり。勘違いさるるは、せむかたなし。
とまれかうまれ、この子どもを返すべかりて、げに良かりき。》
送らむ、と大角鷹は歩き始めた。地を歩く鷹というのも珍しいが、白狐にまたがってご機嫌な子天狗も珍しい。白狐は相当いやがり、何度も首を振っている。
《同じく空を舞ふ者同士、仲良くしたきものなり。今回のことをひまに、天狗と仲良くなれると良し。汝よりも、よろしく伝えて欲し》
「たしかに、空を飛ぶのは一緒だなぁ。天狗もきっと、そうじゃないかな」
いつの間にか、夏洌の口調が崩れている。大角鷹は気にするふうもなく、ひょいひょいと歩き続ける。森の切れ目が見えるほどになって、大角鷹は立ち止まった。
《天狗の吾子、もう迷うなよ》
大角鷹の翼が、ばさりと広がる。強い風を伴いながら、大角鷹は空に舞い上がった。
なんて、大きいんだ……。

夏洌はただ、そう思う。天狗にしても、大角鷹にしても。自分の翼で空を飛べるなんて、どれだけ幸せだろうか。
夜空を背に、巨大な鷹が地を見下ろしている。隻眼が優しく、慈しみを込めて子天狗を見つめていた。
《狐憑きの若人よ。天狗の吾子をよろしく頼む》
柔らかくまろい声は、夜空に吸い込まれた。大きな翼が空をかき、大角鷹の姿はすぐに夜空へと消える。見送っていた夏洌の袖を、子天狗が引いた。
《狐憑きのおにいちゃん。また、角鷹様に会える？》
手を握った子天狗が、夏洌を見上げてきた。その様子が、幼い店主に似ていて、夏洌は頬を緩ませる。うん、と頷いてみせた。
「君がいつまでも、角鷹たちと仲良くしていれば。大人たちにも、そう言えば」
子天狗の瞳が輝く。幼い翼をはばたかせ、嬉しそうに走り出した。もう、天狗の郷は近い。
《おぉーい、おぉーい》
天狗たちは、郷ぎりぎりまで子天狗を探しに来ていた。たくましい天狗たちが手を振っている。
駆けだしてきた子天狗の親は、泣きそうな顔で我が子を抱きしめた。子天狗もまた、泣きながら母にしがみついていた。
《なんと！　吾子はてづから森に踏み行ききや。角鷹は吾子を救ひてくれきや》
大天狗はひし、と目を見開き、夏洌を見据えた。
「同じ空を飛ぶ者同士で、仲良くしたいって」
《それは我らとて同じき。げに無事に良かりき。熊鷹共には、礼を欠ありき。あとにて謝りに行かむと思ふ。
夏洌、なにかこうぜしがあらば、なんなりと言ひてくれ。我ら、天狗一同、すなはち駆けつけむ》
どうやら、天狗の気に入ったらしい。いつでも喚べ、と言ってくれる。

すでに夜は明けかけている。木戸が開く前には、町に戻れるだろう。

《夏洌、今回のことはいかに礼を言はむ》

「お礼なら、あとで俺の布団を返してくれる？　置いて来たから、ないと夜眠れないから」

おう、と天狗はうなずき、翼を広げる。大角鷹のように空に舞い上がり、数度夏洌を振り返ると、暁の空へと消えていった。

払暁の町には、まだ静けさが残っている。

一口噺～空飛びたる　後（後書き）

角鷹＝クマタカでございます。
言葉は古語ではありますが、いちおう、現代読みに近いものにしてあります。お手持ちの古語辞典などで引いていただければ、意味が分かるかと。

一口噺〜青鷺火

星のように飛ぶ鳥がいるなんて、初めて知ったよ。
笑って、男は言う。ぼんやりと仄光（ひかり）を発する鳥（わたし）を目の前にして、平然と。

永い時を経て、人語を解せるようになっても、私はひとりだった。正確には、ひとりになった、だろうか。
私に叡智を与えた永い年月は、私から仲間というものを奪いもした。月日はとどまることを知らず、ただただ、私だけをおいて流れていく。周りから、私を知るものがいなくなるまで。
なんの奇力も持たない。ただ、鳥として永く生きただけだ。永く、生きすぎたのかもしれない。
里宿（さと）の人間たちは、私に名を与えた。
——青鷺火（あおさぎのひ）。夜空を照らす、夜道の導き鳥。
いつの頃からか、私は淡く蒼い光をまとうようになっていた。どんな闇夜でも、私は飛ぶことができた。遙か上空から、星のように飛ぶことができた。
だが、それがなんの意味を持とうか。仲間もおらず、ただただ時を浪費しているだけの自分に。
できることならば、今この瞬間にでも、黄泉へと下ってしまいたい。それは何度も試みたことだった。何日も食わず、飲まず、眠りもせず。それでも、私は生き続けている。
そこでやっと、私は理解したのだ。
——私は、異形と化したか。
仲間も逝き、家族も逝った。私だけが残された。なのに、なぜ、この身は異形と化したのか。

仲間たちと飛んだ空を、私はひとりで飛んでいる。私を包むのは、ただ冷たい風ばかり。かつての楽しさは、どこにもなかった。
あのころは、よかったなぁ。
雛がいて、幼鳥がいて、若鳥がいて、老鳥もいた。妻がいて、我が雛がいて、毎日が彩られていたなぁ。なんて、心躍る日々だったろう。
それがどうだ。いまはただひとり。この夜空を飛んでいる。寂しく、周りには星しか輝いていない。あぁ、私も光っていたか——
ふと、眼下に影が入った。梟や夜鷹でもないのに、私の目は夜の闇を退ける。これもまた、異形の奇力なのだろう。
影は何かに、追われているようだった。
つかの間、私は迷ったと思う。このまま巣に帰れば、なにごともなく朝を迎えられる。だが、私は翼に下降を命じた。
人間のようだ。若い男で、なにやら焦っている。人間の背後を見つめれば、いくつもの不穏な影が見えた。何対もの眼が、怪しく煌めいて、男を捕らえて放さない。
——狼か……
かなり飢えているようだ。飢えた奴らのしつこさは、空にまで噂が届く。
ふと、男が見上げてきた。私と、つかの間視線が絡み合う。男が、笑った気がした。
「星のようだな」
はっと、胸を突かれた。幾たびも聞いてきた言葉だが、なぜだろう。この男が言うと、なぜだか胸に響く。
先頭を走っていた狼が跳ねた。すばらしいとしか言いようのない跳躍で、男の喉笛を狙う。男が腕で、のどを庇う様子が見て取れた。なにもせずにいられず、翼を大きく羽ばたかせる。
巻き起こった風が、次々に狼たちをはね飛ばした。常には忌む奇力だか、このようなときには役に立つ。

座り込んだ男のそばに降り立ち、翼を畳む。息を整えた男が、私を見上げてくる。
「なるほど、おまえが青鷺火か」
私を見つめる瞳は、やけに色が薄い。異国の血でも引いているのか。端正な顔が、ほころんだ。
「星のように飛ぶ鳥とは、初めて見たぞ」

歩きだした男にあわせ、ゆっくりと飛ぶ。
狼はしつこい。いまは姿を消しているが、必ずこの男を食いに来るだろう。なぜだかそれは、とても嫌なことのように思えた。この男をみすみす、失ってもよいのだろうか。
ふと、助けようかとひらめいた。併飛しながら、男に語りかける。
《助けてやろうか》
「そりゃ、ありがたい」
《では――》
角鷹の森に逃げ込めば、と言いかけたとき、男はやはり笑って、首を振ったのだ。
「だがな、あいつらだって、理由があって俺を追いかけてるんだろうさ」
《なにを言う。やつらは、おまえを食う為に追いかけてるんだぞ》
「なら、それも立派な理由だな。まぁ、遅すぎる夕食になってやる気は、一切ないが」
《あたりまえだ！》
苛立ちに任せて翼を羽ばたかせれば、私を包む青光も舞い飛ぶ。蛍のようにも思え、私はぼんやりと男を追い続けた。
「里宿で、おまえの噂を聞いたよ」
すでに二里以上歩ているとは思えないほど、男の息は平坦だ。
「山道を照らし導いてくれる、有り難い鳥だそうな」
祠まで建っとるぞ、と男は笑う。それは初耳だ。好奇心がうずく。一度、見に行くのもいいかもしれない。

《で、どうやって生きる気だ？》
「とりあえずは、あいつらから逃げる、が唯一の選択肢かな」
男が振り返った。背後を確認するやいなや、走り出す。狼が追ってきたか。
「跳び降りろ？　どこに？　――はぁ。困ったなぁ……」
全く困った様子などみせず、男はつぶやく。いったい、誰と会話しているのだろうか。
「しかたないなぁ。受け止めてくれよ」
言うなり、男は道をはずれ、森に跳び込んだ。なんという無茶を！　人の身で夜森を歩こうとは、狼の思う壺だ。引き返せと言おうとしたが、それはできなかった。
いきなり、男の姿が消えたのだ。

◇◆◇◆◇◆

たしか、崖があったと思い出したのは、すこし経ってからだった。のぞき込んでみると、三間ほど下に、うっすらと男の姿が見える。私はあわてて空をかき、崖下に降りる。
《無事か…？　死んでないか？》
男は、身じろぎもしない。柔らかい体がわずかに上下するだけが、生命を保っている証だった。だが、それもいつまで持つか。
「……微妙な質問だな。生きてはいるが、無事ではない」
呻いて、男が応えた。低く挙げられた手に、私は安堵を覚える。
《頑丈だな。あんな崖から飛び降りるなんて、酔狂の極みだぞ》
「背に腹は代えられん。それに、あいつを信じてたしな」
苦笑して男は言う。応えるように、山笹の一群が揺れる。得心がいった。どうやらこの男、異形を憑れているらしい。しかし、どのような異形だろうか。私のように鳥？　それとも四つ足の生き物？
「山童という。――山道の護りを頼んだんだ」
私の視線に気づき、男が手を振った。一瞬の間があり、それでも

うっすらと異形が姿を現す。
童子だった。肩にかかるほどで揃えられた髪が、遠慮気味に風に吹かれる。
《初めて見た》
「山童は、人の思いの具現だからな。滅多なことじゃ、人里を離れん」
思いの具現。私の驚きを感じ取ったのか、男は上半身を起こした。山童が駆け寄り、支えとなる。
「異形は他者の想いや願いの具現だ。知らなんだか？　……つまり、おまえがいまも生きて、星みたく輝いているのは、そうあって欲しいと願ったものがいたからだな」
《……誰が》
そんなことは知らん。男は言って、また寝転がる。頭上には満天の星空。数え切れないほどの小さな輝きに満ち、空はなんとに静かに賑わっていることか。
空を飛ぶものなのに、夜空は見上げたことがなかった。ただただ空を見つめる私の背を、男は唐突になでる。驚いて振り払ったが、それでも男は私をなで続けた。
しばらく、私をなで続けていた男は、ふいに私を正面から見つめる。真剣な顔に、私も翼を正す。
やおら、男が頭上の星空を示した。
「俺とともに来ぬか」
《――は？》
なにを急に。頭の端をよぎった反論を、私はぐつりと飲み込む。
なんとも酔狂なことを言う男だ。
しかし、それはとても心が躍る誘いだった。迷うことなく、私は首を振った。
《ともに行こうではないか。――私は、青鷺火という》

一口噺～青鷺火（後書き）

青鷺火、見た目は後光が差してる普通の鷺にしか見えません…。
良いとも悪いとも書いてなく、ただ「光ってる」。
……もう、どうにでもなっちゃえ、と。

一口噺～目目連の目薬（前書き）

一応、入れておきましょう。

【この小説は、小春月の純然なる思いつきの結果です】

一口噺〜目目連の目薬

狐憑きの小僧よりか、いくぶんましな体質である。それでも、異形に好かれることには変わりない。食われるほど好かれるとか、襲われるほど好かれるわけではない。しかしながら、彼はその好かれ方が嫌いなのだったりする。

人の手が入らなくなって久しい寺は、荒れ果てていた。荒れれば、異形が住み着き、異形が住み着けば人は寄らない。

傾いた本堂を見つめていた彼は、さきほどから無言を貫いていた。人外の声があれでらに響く。

《いやぁ、こういうときには目玉やってて良かったと思うぜ》

《こんな美人さんは滅多にいねぇ、美人百景図も裸足で逃げ出すわい》

《目玉冥利に尽きるってもんよ》

目玉に冥利も料理もあるもんか。黙り込む彼の目が、なによりも多く語っている。

《美人なお嬢さんにだったらぁ、退治られても良いねえ》

ひょいっと彼の眉が上がった。

「おい、目玉ども」

縞鼠の小袖、銀杏髷を結った彼は低く唸るように言う。

「だぁれがお嬢さんだってぇ？　え？　あんたらはただの玉か。なんのための目玉か」

《いやいや、知ってやす。手代殿》

《ただな、俺っちらは夢を語っただけでぃ》

口々に文句を言う大量の目玉。目玉だけの異形なので、口はないのだが、言葉の綾だ。障子の枠に憑く異形。ひとはこれを目目連と呼ぶ。

《しかし、なんて美人さんだ。どっからどう見てもお嬢さんだ》

《大奥にもあがれるぐらいさ》

《鈴夜局ってかや》
彼の堪忍袋はちいさかったらしい。やおら手を伸ばすと、目玉のひとつをつかむ。
「ただの目玉になりたいか」
《冗談の通じない手代殿だねぇ。影の丁稚はもっと丁寧だったぜ？》
《気の強い美人も乙だよ》
《目玉それぞれってことさ》
「そうか。よっぽど目玉焼きになりたいらしいな」
懐に手を入れた彼は、竹灯を出した。ぎょっと目玉たちが飛び出る。
《いやいや、待て待て、手代殿。ここで火を放ってはならん》
《よく考えろぃっ、火付けは大罪だ》
《俺っちらになにができる？》
「よく言った」
手代はにこやかに笑い、目玉を解放してやる。転がるように障子に逃げ込んだ目玉は、ぱちくりと居心地悪そうだ。
「目目連の目玉が欲しい」
異形屋手代は、にっかり笑ってさりげに空恐ろしい事を言ってのけたのだ。
当然、目目連たちは恐慌に陥った。

動揺して意味もなく瞬く目玉（まぶたはないはず）、ぎょっと飛び出んばかりの目玉（すでに格子に収まっていない）、白目をむいている目玉、黒目が大きくなっている目玉などなど、反応はそれぞれだ。目玉ひとつひとつに意思があるらしい。
そんな目目連たちを見ながら、手代は落ち着いて言い直した。
「目目連の目玉、もしくはそれに準じたなにかが欲しい」
《意味は同じじゃねぇか！》
《俺たちにだって、命ってもんはあるんだ！》

《異形だからって簡単なこと言うな！》
至極正論だ。手代はうなり、顔をゆがませる。少し悩み、消え入りそうな声でつぶやいた。
「なにも、目玉自体が欲しいわけじゃない」
じゃあなんだってんだ、と目玉が凄む。目玉だけだが、かなりの迫力だ。
「目目連の目玉には、眼病を治す力があるらしいが……」
《んなもんない》
どの目玉か不明だが、はっきりとした応えがかえってくる。落胆した表情の手代に、目目連が目玉を寄せた。眉を寄せているつもりらしい。
《どうしたってんだい》
《相談があるなら、言ってみな？　俺らにもできるかもしれないぜ》
「目を患っている娘がいる」
《娘！？》
《美人か！》
《年頃かっ？》
「いや、仁琥様と同じほどの子だ」
《仁琥ってと、じきに十か》
《狐狸らが話してた。たしか十歳だ》
助平な目玉どもに、手代が顔を顰める。さきほどから娘娘と、こいつらは娘しか興味ないのか。どれだけ助平な異形だ。言うと、目目連はからから笑った。
《俺らは元々、助平心から生まれたからな》
《性分だ。しかたない》
《で、その娘っこはどうしたんだ？》
「目を患って、見えなくなるやもしれない」
《そりゃ、気の毒だな》
《だからといってよぉ、俺らだって命あるんだし》
《ないわけじゃないが、なぁ》

その言葉に、手代の耳がうごく。すこし考えて、わざとらしく息を吐いた。首を振って、さも残念そうに見えるように。
「あと十年もすれば、小町になるだろうさ。あの瞳が空を写せないとは……」
《それを早く言え、手代》
口早く目目連は言い切ると、くるくると目玉たちが動き回る。右目玉が左目玉になり、上目玉が下目玉に変わっていく。
《ほら、溜といた目玉があったろう》
《どこにしまったか覚えてるか？》
《たしか左上三段だろう》
しばし待つ。目玉たちの入れ替わりがゆっくりになり、ようやく落ち着いた頃を見計らい、手代は訊く。
「なにをしてるんだ」
その問いには答えず、目目連たちはなにかを差しだしてきた。手もないのにどうやってと疑問に思う間もなく、それが薬包だと手代は気づいた。
《おい、手代。俺らは年に一回脱皮をする》
「は？」
目目連の習性がひとつ、わかった。展開の早さについていけず、手代は間の抜けた声を返すしかない。
《いつか、こういう日が来るだろうととっておいた》
《乾燥してるから、このまま薬研にかけて粉にして飲め》
《一日三回、一旬もすれば良くなる。苦いが、我慢しろ》
「煎じれば良いんだな」
《良い。ついでに煎汁で目を洗うのも良い》
《その将来小町に言っておけ。目目連は優しい異形だと》
《優しくて強くて親切ですばらしい異形だと》
「……覚えておこう」
薬包を風呂敷に包み、手代が頭を下げる。濃茶の髪が鬢油でつやめいて、目目連たちの視界に入った。

「助かった。ありがとう」
目目連たちは照れ、目玉を回す。あちらこちらを見て、最後には小さく《おう》と言う。照れ屋な異形らしいと覚えておく。
打って変わって上機嫌になった目目連たちに見送られ、手代は荒れ寺の門をくぐる。渡された乾燥目玉をくん、とかぐとメグスリノキの匂いがした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1390g/

異形屋本舗

2010年10月9日18時40分発行